万物、人間及びクルアーンにおける

熟考

オスマン・ヌーリ・トプバシュ

エルカム出版社

イスタンブール: **1439 / 2018**

オリジナルタイトル:	Kâinat, İnsan ve Kur'ân'da Tefekkür
著者:	オスマン・ヌーリ・トプバシュ
翻訳者:	ヌールッラー・サット
チェッカー:	サット・佐紀
グラフィックデザイン:	ラーシム・シャーキルオール
ISBN:	978-605-302-483-5
住所:	Ikitelli Organize Sanayi Bölgesi Mah. Atatürk Bulvarı, Haseyad 1. Kısım No: 60/3-C Başakşehir, Istanbul, Turkey
電話番号:	(+90-212) 671-0700 pbx
ファックス:	(+90-212) 671-0748
ホームページ:	info@islamicpublishing.org
ウェブサイト:	www.islamicpublishing.org
印刷者:	エルカム印刷所
Language:	Japanese

万物、人間及びクルアーンにおける

熟考

オスマン・ヌーリ・トプバシュ

エルカム出版社

もくじ

前書き

熟考にかなうイバーダはない
(ベイハーキ、シュアイブ, IV, 157)

私たちに"熟考"や"感受性（タハッススス）[1]"といった能力を与えられ、マーリファトゥッラー（アッラーを"心で理解する"）道を創られた無限の気前良さと恵みの持ち主アッラーに無限の感謝と称賛がありますように。

万物、人間及びクルアーンを最も素晴らしく、最も感性豊かにそして最も深い形で読み解き、ウンマにもこれらを心の目で読むように求められた預言者ムハンマドに、そして彼の家族や友人たちに祝福と平安がありますように。

アッラーは、神性の名と特性の三つの大きな顕現の場である"クルアーン"、"人間"及び"万物"の深みから何かを得てそこから生を啓発する真の真珠を取り出す能力を、被造物の中で完全

1　タハッススス：感情を抱くこと、感じること、心が把握すること

な形ではただ人間たちに、部分的にはジンにもたらされました。この唯一つの媒介は“熟考”や“感覚”なのです。

実際、熟考と感受性は、真実に至ることや心の生に段階を与える為の不可欠な条件で。比類なき導きと幸福の為のガイドであるクルアーンは最初の節から最後の節まであらゆる要因を通して私たちを熟考へと招きます。人の創造における英知、万物における驚くべき秩序そしてアッラーのお言葉を、つまり、アッラーの力の刺繍を、力と崇高さの顕現を、そしてアッラーの万物に於いての絶対的な統治者であることを熟考するように命令しています。

アッラーはクルアーンであらゆる機会で次のように語られています。

「それでもあなたがたは反省しないのか。恐らくあなたがたは反省するであろう。かれらはクルアーンを、よく考えてみないのであろうか。かれらは、それでも悟らないのか」

と語られ、信者たちを警告しています。[2]

事実、このような例文が多くあります。

2　参照：家畜章、第6章、第50節；　雌牛章、第2章、第219、266節；　ムハンマド章、第４７章、第２４節；　婦人章、第4章、第82節；　ヤー・スイーン章、第36章、第68節；

「かれらは骼駝に就いて、如何に創られたかを考えてみないのか」[3]と語られ、被造物に注意をひかれ、

「かれらは頭上の天を見ないのか。天地の凡てのものを観察しなさい。如何に創られたかを考えてみないのか。さあアッラーの慈悲の跡をよくみるがいい。かれが如何に、死んだあとの大地を甦らされるかを。このようにかれは、死んだ者を甦らせる。かれは凡てのことに全能であられる」[4]と語られ、地理的な事項に注意をひかれ、

「あなたがたは地上を歴遊して、かれら以前の無信仰な者たちの最後がどうであったかを見な

3　アッラーのアル・バーリーとアル・ムサッヴィルという特性は彼が被造物をそれぞれ異なった形で創造され、あらゆる被造物に、その立場や果たす責任に応じてふさわしい能力を備えさせられることを示しています。動物の中でラクダに与えられた特徴はこの典型的な例なのです。ラクダは水と植物が非常に少ない土地である砂漠という環境で暮らさなければならない為、そのこぶに何週間も足りる量の水を貯めることが出来えるし、棘でも食べることができ、食べた植物を長い時間体内で新鮮に保つことができます。更に、砂嵐と砂漠の極端な熱に耐えるように創造されました。確かに、これは神の知識、力、芸術の感動させる無数の顕現のただ一つなのです。

4　参照：　カーフ章、第50章、第6節；　ユーヌス章、第10章、第101節；　圧倒的事態章、第88章、第17-20節;御光章、第24章、第43節；　巡礼章、第22章、第63節；　雷電章、第13章、第3節；　預言者章、第21章、第31節；　蜜蜂章、第16章、第65節；　ビザンチン章、第30章、第50節...

かったのか」[5]と語られ、歴史に注意をひかられます。それによって私たちしもべをあらゆる要因を通して熟考へと招かれ、この万物を統治するアッラーの法の顕現条件を理解することを求められます。

またアッラーは人間が万物を無意味で無理解なまなざしではなく英知を認識する知性と洞察力で目にする必要があると表現されています。クルアーンで神聖な恵みについて言及され、何度も「**アッラー**は夜と昼を次々に交替させる。本当にこれらの中には、見る目をもつ者への教訓がある」[6]と呼びかけられます。

崇高なるアッラーは私たちに、自分たちや自然界を熟考することを繰り返し求められます。クルアーンでは約150回、アッラーの崇高と力の刺繍について考えることが命じられています。その為、タアックル、(اَلتَّعَقُّل), テデッブル(اَلتَّدَبُّر), テゼックル(اَلتَّذَكُّر)と熟考という特性を使われています。

この特性が最高のレベルで人生において実行され、神聖な鍛錬となる分野が、神秘主義なのです。神秘主義は人の神聖な力とこれに加えアッラーの恵みに応じて真実の頂点に到達することを目的とする成熟の為の道の名です。その

5　参照：ムハンマド章、第47章、第10節…
6　参照： イムラーン家章、第3章、第13節； 御光章、第24章、第44節；集合章、第59章、第2節. . .

為、“自らを知っている者は自らの神も知る”という言葉で表現される英知は、神秘主義者の神聖な成熟方法で最も基本的な基準の一つを形成するものです。

万物において、生きた心を持つ人間に創造主とアッラーの芸術的な力を知らしめることのない微粒子は存在しません。ミクロの世界からマクロの世界まで万物における全ては神聖な崇高さの証人なのです。

全ての被造物には“状態という言葉”という表現形があり、あらゆるものはそれで明白に宣言を行う状態にあります。これらの話法をふさわしい形で把握できる信者たちにとって、体のキブラはカーバであるように心のキブラはアッラーとなります。

クルアーンでは次のように語られています。

「または立ち、または座り、または横たわって(不断に)アッラーを唱念し、天と地の創造に就いて考える者は言う。『主よ、あなたは徒らに、これを御創りになったのではないのです。あなたの栄光を讃えます。火の懲罰からわたしたちを救って下さい』」（イムラーン家章、第3章、第190－191節）

万物における神聖な力と崇高さの顕現をふさわしい形で熟考できる人はまず、自分の無力さを理解し、次に、完全な服従と従順さで、あ

らゆる呼吸で神をズィクルしている状態となります。これにより、その人の心は篤信の光に満たされます。熟考は篤信によって最も適切な形に至ります。

アッラーの位階において人間は肉体の形、外観や世俗的な社会的地位ではなく、心的成長や意味の深み、精神的な性質と能力で価値を持ちます。これにより、クルアーンは信者の熟考を信仰上の思いの深さで補強してそれを物質と我欲の狭い境界線に閉じ込められることから救い、魂の雰囲気の永遠で無限の地平線に到達させます。万物における精神的な飾り棚を、教訓を含んだまなざしで見渡せる信者の熟考は精神的な特性を獲得します。心の愛情で頂上に到達するこのように深くて広い熟考は、最も美しい信仰の鍵なのです

精神的な構造を発展させられない人は、我欲的な人生の無意味な顕現に引っかかってしまい、熟考の能力を一時的な愛情の渦で破壊してしまいます。このような厄介な心、認知はもはや、真実や善に向ける代わりに常にはかない飾り棚を見て我欲の欲求や欲望の虜となります。全く熟考しないのです。はかない世界という市場の最後の上着であるケフェン（死者を包む布）はいつか必ず彼を包み、死は全てのはかない喜びに、魅惑に、欺瞞のメッキに、「中止」という印を押します。

信仰上の思いの深さに強化された熟考は人間に常に安らぎを与える一方で、ただ無味乾燥な理性の限界の内側にとどまることは野心と利己主義を強め、心を損ない、不注意さに陥らせます。

指紋はある意味でアイデンティティーであるように、ある信者の熟考や感受性においての特性は彼の精神的なアイデンティティーだと言えるでしょう。だから、人間の尊厳にふさわしいレベルでそして創造の目的に適った形で生き、精神的に深みを得たい信者は、クルアーンが示している熟考という場に入るべきなのです。なぜなら、心の細やかさ、人間関係での繊細さはただこのような熟考で手にすることができるからです。

イスラームが熟考や感受性を重視しているのにも関わらず、世俗的なものへの従事を大切にすることで生じる不注意さのせいで、人間は多くの場合レベルの高い熟考や感受性から離れて生きます。この結果として死と、この世が試練の世界である真実を忘れてしまいます。

篤信に基づいて生きて特性のある熟考と感受性を得る信者たちは―こういう人々は常に少数派です―我欲に勝ち、自らの人間的な事実を、弱さと利点を共に理解できる成熟さに到達します。

このような人々は中に生きている見かけ上の人生に関わらず、同時に自らの為に内なる感

情を得ることの、永遠の強さに到達します。心が広げられた結果見ることができる、物質的な世界の地平線を超える高い認識に到達します。完全な信仰はただこれによって得ることのできる神聖な恵みなのです。

そう、この特性に到達することのできた本当の信者にとって、はかない生はもはや大切な物であるとは考えられません。このような信者の目では、この世での日々は、量が書いてないリールから、あらゆる瞬間に終わりが来てしまう糸巻が尽きてしまうことに似ています。

同時に人生の資本はとても重要です。なぜなら、それは永遠の生を得る為の唯一の資本なのです。この認識に到達した信者は、クルアーンで語られているように"命じられたように、(正しい道を)堅く守れ"[7]ないとしたら結末はとても悲しく後悔するものとなることを知っています。この後悔をしない為に、常にアッラーのこの警告を考慮するはずなのです。

「死があなたがたを襲う前に、われが与えたものから施しなさい。かれは、『主よ、何故あなたは暫くの間の猶予を与えられないのですか。そうすればわたしは喜捨〔サダカ〕をして、善い行いの者になりますのに。』と言う。定められた時がやって来た時、アッラーは誰にも猶予を与えられない。アッラ

7　参照：フード章、第11章、第112節

ーは、あなたがたの行うことに通暁なされる」(偽信者たち章、第63章、第10-11節)

つまりアッラーは信者がアッラーの神性の偉大さ、この偉大な均衡の神秘と英知を完全に認識することを求めます。この結果として、手にしているどのはかない恵みも信用せず、篤信に基づいて生き、天国にふさわしいしもべとなることを望まれるのです。

私達はこのささやかな作品で、預言者ムハンマドの最たるスンナの一つである熟考と感受性の重要性、効果、そしてそれがどういうふうに実現されるべきかという点についてお話したいと思います。

この機会に、この作品の出版に尽力してくださったムラット・カヤ博士とメフメット・アキフ・ギュナイに感謝し、その努力が永遠に残るサダカとしてアッラーに認められることを願っております。

アッラーが私たちの全ての感情、気持ちにご満悦されますように！　私たちをマーリフェトゥッラーとムハッベトゥッラーの頂点に到達させ、私たちのはかない生涯をこの特性のままで終えることができますように。

アーミーン！

オスマン・ヌーリ・トプバシュ
2010年6月　ウシュクダル

万物、人間及びクルアーンにおける熟考

理性の限界

イスラームは理性にとても価値を与えています。更に、それを責任を持つことの、二つの基本的な条件の一つと見なします。[8]あらゆる要因を通し、理性をふさわしい形で使うように示唆します。同時に理性が事実を理解する能力は無限ではないことも告げています。なぜなら、アッラーは創造されたどの存在にも無限の力を与えませんでした。

目が見る能力、耳が聞く能力に限りがあるように、理性が認識する能力にも限りがあります。目が見る限界の先にあり、目には見えない

8　アッラーの御前で責任を持つ者となる条件の一つであるのは思春期に入ること、他には理性を持つこと、つまり過ちと罪を理解できるレベルに知的能力が上達することです。この基準によれば、子供たちと狂ってしまった人々には、イスラームの観点からは行為からの責任ではありません。

無数の存在があるように、耳が聞くレベルの先にあり、耳では聞けない無数の音があるように、理性が認識する能力の先にある為に認識できないより多くの真実があります。つまり、理性は真実を完全に認識する点において、それ自体で十分ではありません。

　実際、真実に到達するという点で、理性が無限の能力を持つと見なす合理主義者の哲学者は、影響を与えた人々を幸福ではなくただ悲惨さに引き込んだのです。[9]

9 古代ギリシアで、理性の限界を示す典型的な事件がありました。ある若者が法を学ぶ為に哲学者に相談しました。この目的の為に決められた学費の半分を現金で払い、残り分を学生が最初に引き受けた裁判に勝訴した場合に払うこととなりました。この意味は学生が最初の裁判で勝訴した場合、教育が完璧であり、教師が2回目の分割をもらう権利を得たということなのです。しかし、学習が終わると、学生は教師に支払った最初の支払いで十分であるとして、2回目の分割払いを放棄するよう師に求めました。この要求のせいで最初の裁判が学生と先生の間で行われることとなりました。
裁判では学生は判事の一団に対し、:「私はこの裁判で勝訴しても、敗訴しても、2回目の分割金を払わない」と言いました。裁判官が「それなはぜか」と質問したことに対し、彼は次のように説明します。
「勝訴した場合、判決に従うとそうなります。もし敗訴した場合には、最初の裁判で敗訴したことになるのだから、被告と私の間の契約により、このお金は支払われないべきなのです」
これに対して、先生の教師も同じように、「私がこの裁判で敗訴しても、勝訴しても、このお金を受け取るべきなのだ」といいました。判事たちの「それはなぜか」と

創造したしもべたちの特性を、疑いもなく彼らよりも良く知っているアッラーは、理性が真実に到達するという点における弱点と不十分さを補填する為に、人類の歴史を通して-伝承によれば- １２万４千人の預言者を派遣し、啓示した書巻や啓典で人類を真実に到達させるべく、最善の支援をなされたのです。

従って理性が啓示によって鍛錬されることが必須となるのです。なぜなら、人間は神聖な導きによって鍛錬されない場合、あたかも荒っぽい馬のようであり、それで目的地に達することが不可能であるように、崖から転落してしまう可能性が高いのです。荒っぽい馬のエネルギーから最善に恩恵を受ける為には、馬に手綱をかけて鍛錬する必要があるように、理性に、啓

いう質問に対し、彼は次のように答えました。
「もし勝訴した場合、判決に従うとそうなる。もし敗訴した場合、原告と私の間の契約に従い、このお金を受け取らなければならない。なぜなら私が敗訴した時には彼が勝訴することになる。そして第2回目の支払いの為の必要な条件が成立したことになる」
このように、両方の主張とも合理的で論理的なのです。つまり、理性と論理はこの例に見えるように時々自分が作った壁の中に自分自身を閉じ込め、袋小路に入ってしまうことがあります。
このように、多くの人間の紛争を解決する時においてさえ、その無力さで何もできない理性が、永遠の神性な真実を完全に理解することは不可能なのです。その為、理性が袋小路に入らないことは、それを啓示で鍛錬すること、限界を超えた真実に対して降参する必要がある、ということへの理解にかかっているのです。

示とその説明の場であるスンナの神聖な鍛錬を受けさせ、正しい理性とすることが必須となるのです。これがなされない限りそれは銃のようにその役割を果たし、善の要因にも、悪の要因にもなり得るのです。

心の務め

イスラームの観点において、信仰は心での承認、言葉での公言によって実現されます。つまり、信仰の本当の顕現の場は理性ではなく感情の中心地である心なのです。このことはとても重要です。なぜなら、信仰とは尊い感覚なのです。理性は信仰という感覚に到達し、最初の一定の段階を超える為に必要な要因なのです。

理性において認められ、精神において受け入れられた神の真実は、心において認められない場合、本当の信仰となりません。信仰は完全に心に入らない場合、行為には変わらないし、態度に方向性を与えることができません。これはアッラーの位階において全然価値のないことです。実際に、アッラーは神の真実を読んで知っているのに、心では認めていない為、それに応じて行為を行わないイスラエルの民の学者の状態を、無数の本を運んでいるロバと同じであると見なされています。[10]

10 参照： 合同礼拝章、第62章、第5節

だから、神の真実を知ることとは、それらをただ脳に貯めることではありません。知ることとは、熟考と感受性の結果として人生や万物における壮大な均衡の不可解さを解きほぐし、それに必要な形で行動することです。これを実行するのは、信仰の光で啓発された心なのです。

理性が人間、万物とそれらの真実に対して鏡のようであるクルアーンについて熟考する際に得る結果は、ちょうど土から出される生の鉱物のようです。この鉱物を加工された状態へとするものが、心なのです。

心は感受性、つまり感覚の中心です。心の「インスピレーションと閃き」という言葉で表現されている機能は、理性が提供した証拠を組み合わせ、ちょうど壊れている花瓶の部品を集めて本来の形にするように、真実の完璧な意味での認識を可能とします。

つまり、真実と善への到達を完璧的に実行する為に、理性が啓示で鍛錬され、理性が足りない時には信仰の成熟さを持つ心がその義務を引き受け、その不足を従順さで補填する必要があります。

熟考の価値はそれを感受性により強化されること、つまり、脳と心の機能が均衡のバランスの中で実行することに依存しています。脳と心のみが重視されれば、人間は多分この世界に

のみふさわしい人つまり、利益重視の人となるでしょう。しかし、完全な信者になる為には、感覚の中心地である心が精神的な訓練を受け、理性を導く必要があります。なぜなら、感覚の中心地である心は理性の熟考を、熟考は意志を導いているからです。つまり、意志の行為の基本的な要因は心なのです。そこ定着し根付くのが感覚なのです。この観点から、心がアッラーの命令に従うことは、他の器官より重要なのです。

なぜなら、我欲の欲望の土壌で、うぬぼれ、思い上がりのような心の病気の害の下で、穏やかな心の導きを得られていないままの理性の熟考は、本来のあり方から外れ、人間をシャイターンのように堕落や倒錯へと追いやるのです

メヴラーナは次のように語っています。

「シャイターンに、彼の理性ほどの愛情もあったとすれば、現在のイブリースとはならなかっただろう」

つまり、理性にはそれ単独での価値はないのです。理性を用い、それに最も正しい方向を示す為に心の中にある感覚を精神的に成熟させることが必要なのです。

要するに、真の熟考は啓示で恵みを得た理性と、精神的に成熟した心の出会う場所で始ま

ります。私たちはこの作品で熟考という概念を使う際に、アッラーの真実で鍛練、心の感受性で強化されたその適切な形を意図しているのです。

❀

熟考(اَلتَّفَكُّر), 単語の意味からの観点では、教訓を得てある物に集中すること、深く考えることを意味します。

テエッムル(اَلتَّأَمُّل), 十分に考えること、熟考を続けること、そしてよく調べて見ることという意味です。忠告と教訓を得ること、そして真実に到達する為に万物と出来事について詳しく考えることを意味します。

テデッブル(اَلتَّدَبُّر), あることの結果や結末を考えることです。

今日、私たちはこの全ての意味をただ“熟考すること” あるいは“考えること”という概念で表現しています。疑いもなくこの状態は、この崇高な民族をイスラーム文化から孤立される為、私たちの言語で起こった恐ろしい破壊という背信行為のつらい結果なのです。なぜなら、人間は言葉で考えるからです。概念やその表現の要因である単語が不十分にゆがめられた言語で、深いイスラーム的熟考の地平線に入るのは可能ではありません。この観点から、クルアーン文化から来ている言葉を守り、それを使うこ

とで生きさせ、そして、その言葉の代わりに置き換えさせようと望まれている模造された言語に絶対に頼らないことが不可欠なのです。

熟考の重要性

アッラーの書物及び預言者ムハンマドのハディースでは、精査すること、研究すること、熟考すること及び教訓を得ることについて無数の命令と奨励があります。この項目に関しクルアーンに含まれる何百もの節のうち二つでは、次のように語られています。

「かれらは反省しないのか。アッラーが天と地、そしてその間にある凡てのものを創造なされたのは、唯真理のため、また定めの時のためであることを。だが人びとの多くは、主との会見を否認する」（ビザンチン章、第30章、第8節）

言ってやるがいい。「わたしは忠告する。あなたがたはアッラーの御前に、２人ずつまたは１人ずつ立ってよく考えなさい。あなたがたの同僚は、気違いではない。かれは厳しい懲罰の（下る）以前に、あなたがたに警告するに過ぎない。」（サバア章、第34章、第46節）

ここで、人間たちが全体として、あるいは一人一人が、アッラーにしもべとして振る舞うこと、そして真実について考えることが勧めら

れています。[11]ただこの奨励だけに従っても、救われることが約束されているのです。

預言者ムハンマドは常に熟考をされていた

預言者ムハンマドは沈黙と熟考をとても好まれました。預言者となる少し前には、人々から離れて一人で暮らし熟考することを強く望まれました。メッカからおよそ５キロの距離にあるヒラーの洞窟に行き、そこで何日も過ごしていました。彼のこの時点でのイバーダは熟考すること、祖先のイブラーヒームのように天と地の支配について教訓を得ること及びカーバを見ることでした。[12]アッラーはこのように、ムハンマドを神聖な任務の為に用意されました。

当時万物とその創造主について熟考していたハンマドは、その後の生活においても常に熟考をされていました。

ヒンド・ビン・エビ—・ハーレは次のように語っています。

11 社会の、もしくは大多数の考え方は一般的に個人個人の考えに影響を与えています。この影響を取り除いて真実を見つける方法は、学者の導きを求め、ただ心と向き合い、熟考という場に入るです。クルアーンの言葉によれば、共通する認識が出す判断は、常に正確あるいは正確に近いとは限らないのです。だから、皆は自分の自由考えを言うべきであり、この共通の判断を誠実に批判し、独立した考えに到達するべきなのです。

12 Aynî, *Umdetü'l-Kārî*, Beyrut, ts., I, 61; XXIV, 128.

誉れ高い預言者ムハンマドは常に悲しげで、考え込まれていました。彼には、安楽であることはありませんでした。不要な言葉を使われませんでした。話す時間よりも沈黙の時間の方が長く続きました。話を始める前にも話が終わる時にもアッラーの名をズィクルしていました。(İbn-i Sa'd, I, 422-423)

実際、預言者ムハンマドはウンマに熟考を勧める為に次のように語られています。

「アッラーは私の沈黙が熟考となるよう、命令された」*(İbrahim Canan, Hadis Ansiklopedisi, XVI, 252/5838)*

「熟考にかなうイバーダはない」*(Beyhakî, Şuab, IV, 157; Ali el-Müttakî, XVI, 121)*

「この世界では客のようでありなさい。礼拝所を家として認めなさい。心を愛情に慣らせなさい。よく熟考し、よく泣きなさい。欲望があなた方を変えさせないように」*(Ebû Nuaym, Hilye, I, 358)*

また預言者ムハンマドは預言者イブラーヒームに啓示された10ページの書巻から次のように伝えています。

「理性を持つ人は、特定の時間を持つべきなのです。時間の一部をアッラーに対するドゥアーと懇願、一部をアッラーの芸術と力を熟考すること、一部を過去で実行したことを点検

し、将来実行することを計画すること、また一部を、生活費を稼ぐ為に分けるべきなのです」

ルクマーンは一人で、他の人がいないところに座って熟考することがとても好きであり、これをしばしば繰り返していました。彼に人々が、

「あなたはたいてい一人で座っている。人々と一緒に座って会話するほうがもっとふさわしいのでは」と尋ねました。彼は次のように答えました。

「長い間一人でいるのは熟考の為により適切です。長い間熟考することは人間を天国の道へ導くガイドなのです」[13]

アブー・デルダは、

「1時間の熟考は４０日間義務ではないイバーダより優れている」と言いました。(Deylemî, II, 70-71, no: 2397, 2400)

タビーン（サハーバを見た人々）の一人、サーイド・ビン・ムセッイェブ師に、

「どのイバーダがより尊いですか」

と尋ねられました。彼は次のように答えました。

13 İmâm Gazâlî, İhyâu Ulûmi'd-Dîn, Beyrut 1990, Dâru'l-Hayr, VI, 45. タルススにある歴史的な礼拝所でルクマーンがおこもりをした場所は現在でも訪問がなされています。

「アッラーの被造物について熟考すること、宗教について詳細な理解を得ることです」(Bursevî, *Rûhu'l-Beyân,* [en-Nûr, 44])

ビシュリ・ハフィー師は熟考の重要性について次のように語っています。「人間たちがアッラーの崇高さについてふさわしい形で熟考すれば、アッラーへ反発することはできないし、罪を犯すこともできなかっただろう」(İbn-i Kesir, I, 448, [イムラーン家章、第3章、第190節])

先にも表現したように、人にアッラーの崇高さを認識させる熟考は、理性の働きです。この活躍を完璧な結果に到達させるのは、心です。私たちの心は最も誉れある器官であり、勿論その善行は他の器官の善行よりも徳のあるものとなります。なぜなら、心はアッラーが見る所なのです。

明らかな真実として、啓示で鍛錬された理性の熟考は心を照らす光の最初の資本であり、洞察力と英知に到達するただ一つの要因です。またこのような熟考は学問、ズフド、世俗性の放棄、そしてアッラーへの愛情の要因となります。

最も役立つ熟考はアッラーの力、崇高さと統治を熟考することなのです。そのおかげで人間は現世での生を改善すること、来世に害を及ぼすことを辞めること、そしてその方法を考えます。

人がアッラーの恵み、命令と禁止、美名と特性を熟考すれば、心には愛情とアッラーについての智の芽が芽吹き、精神的なレベルを獲得し始めます。来世、その誉れ、永遠であること、現世が試練の場であること、及びはかないものであることを考えるなら、来世についてさらに考え始め、現世を必要なだけ重視するようになります。世俗的な生が、誕生と墓の間でのスピード競争であることを認識します。この生が、来世を手にする為の大切な資本であることを理解し、それを豊かにする点での真剣さと努力を強めます。持つ時間を戦利品だと見なし、それらを良いことや誠実な行いで最も素晴らしい形で活用します[14]

アブ - ル・ハサン・ハラカーニーは何と素晴らしく語っていることでしょうか。

「信者の器官の（少なくとも）一つはアッラーで忙しいままであるべきなのです。信者はアッラーを心で思い出すべき、舌でズィクルするべき、目でアッラーが見て欲しい物を見るべき、手で気前の良いことをするべき、足で人々を訪問するべき、理性で人々にサービスするべき、正確な信仰でドゥアーするべき、理性で熟考してアッラーを知り、善行を行うことに至るように頑張るべきであり、イフラースを伴う仕事をす

14 Ebu'l-Hasan Harakânî, Seyr ü Sülûk Risâlesi, 著者 : Sadık Yalsız *uçanlar*, p. 107, Sufi Kitap, İstanbul, 2006.

るべき、最後の審判の厳しさについて人々を警告するべきなのです。このような人が墓から立ち上がってすぐ白布を着たまま天国に行くことを私は保証します」

万物への熟考

奇妙なことに、人間はこの上なく煌めきを伴い、飾り付けられている宮殿を見ると感動します。それを忘れられず、生涯を通じてその美しさについて話します。しかし、この大きなアッラーの芸術の奇蹟である万物を常に見ているのに、詳しく考えることはできず、それについて話すこともできません。あたかも普通のことであるように考えます。しかし、感動したそのはかない宮殿は、この大きな万物の最も小さな部分の一つである世界のとても小さな細胞なのです。

万物への熟考

　この世界の細胞から天まで、全ての物はアッラーの芸術の奇蹟であります。全世界で人間の認識に提供された無数の英知の顕現により、万物はあたかもアッラーの力の刺繍の展示室なのです。

　万物は創造、均衡及び調和により、考える人々の為の重要な教訓の要因です。これを表現する多くの章句があります。アッラーは次のように語られています。

　「かれらは頭上の天を見ないのか。われが如何にそれを創造し、如何にそれを飾ったか。そしてそれには、少しの傷もないと言うのに。また、われは大地をうち広げ、その上に山々を据え、様々の種類の美しい（草木）を、生い茂らせる。（それらは）悔悟して（主の御許に）返る凡てのしもべが、よく観察すべきことであり、教訓である」（カーフ章、第５０章、第6－8節）

　「見ないのか、アッラーが天から雨を降らせられ、それを地中に入らせて泉となされ、それから色とりどりの、植物を生えさせ、やがてそれらが枯れ

て黄色になるのを。それから、それを乾かして、ぼろぼろの屑になされる。本当にこの中には、思慮ある者への教訓がある」（集団章、第39章、第21節）

地上にある水は人間たちに奉仕しています。彼らの食べ物や飲み物や掃除等のニーズに対処するのに使用されています。だから、時々汚れてしまいます。しかしアッラーはそれを素晴らしい秩序で清められ、またしもべたちに提供されます。

メヴラーナ師は私たちが水の変化のプロセスを熟考するよう求め、次のように語っています

「清らかさと透明さがなくなると、つまり泥と混ざって濁ってしまうと、水も私たちのように地上で穢れたことに不安を感じ、驚く。叫び、アッラーに庇護を求め始める。この叫び声と懇願に対し、アッラーはそれを蒸発させ、天に戻される。そこで様々な経過をたどらせ、清められる。そして時には雨、時には雪、時にはみぞれとなって地上に降らせられる。最後には、岸のない広い海に到達させられる」

どの季節でも見るこの自然な出来事を伝えているメヴラーナ師は人間に暗喩という方法で、「水が天で清められて来るようにあなた方もアッラーに近づいて心をあらゆる汚れから清めなさい。それによってあなた方も雨のようになり、慈悲と恵みを放つように」と奨励しています。

また一方で、万物が創造されて以来続いてきた均衡の状態、わずかの滞りもない秩序、そして入れ子状にある永遠の英知と神秘はあらゆる物が唯一である力の産物であることを認識する為に十分なものなのです。

天を熟考すること、

アッラーの力と崇高さの証拠の一つは天と地、星で示されているアッラーの統治です。天にある素晴らしい状態を熟考しないことは、人間認の識が崇高な英知の展覧会を見る機会を逃す要因となります。

地は天に比べて海の中の一滴のようであり、更にはそれよりも小さなものです。クルアーンの殆ど全ての章の様々な節では、天の偉大さに言及がされています。天にかけられた無数の誓いがあります。アッラーは次のように語られています。

「諸星座のある天において」（星座章、第85章、第1節）

「わたしは、沈んでゆく星にかけて誓う。それは本当に偉大な誓いである。もしあなたがたに分るならば」（出来事章、第５６章、第75－76節）[15]

15　参照：撒き散らすもの章、　第51章、第　7節；星章、第53章、第1節；　包み隠す章、第81章、第15節；　夜訪れるもの章、第86章、第1節；太陽章、第91章、第1-2，5節.

万物の広さ、その中にある物の動き、それらの間にある距離は、人間の力を、更には想像を超えるレベルの大きな数で言及されています。

更に、学者たちは、「万物は私たちが想像できるよりもっと驚異的でもっと偉大なのです。なぜなら、あらゆる物質は、宇宙において驚くべきスピードでお互いから遠ざかっているからです」と言わざるをえなかったのでした。[16]

天文学者は宇宙の半径を１４兆光年だと予想しています。光の速度は一秒で約３０万キロです。

銀河

天には近代的な望遠鏡で見ることができる数千億個の銀河があります。銀河は1000万から10億の星、そしてその星の原料や残骸を含めた巨大な星のグループです。[17]太陽系がある天の川銀河はそれらのうちの単なる一つなのです。

何百もしくは何千もの銀河が集まっているグループは銀河団と呼ばれています。銀河団に

16 Yûsuf el-Hâc, *Mevsûatü'l-İ'câzi'l-İlmî*, p. 413.
17 http://www.biltek.tubitak.gov.tr, Evren/Evrenin Yapıtaşları/Gökadalar,

よって形成された集団は、「銀河のスーパークラスタ」と呼ばれています。[18]

私たちがいる天の川銀河、そして私たちの近くの約30の銀河は小さな銀河団であるローカル銀河団を形成しています。近くの銀河団の一つである約6500万光年離れているおとめ座スーパー銀河団はおそらく２千の銀河を含んでいます。一つのスーパー銀河団には数多くの銀河団があり、直径は1億光年に至ります。[19]

宇宙に反映される神の壮大さを示すもう一つのポイントは、銀河の衝突です。銀河の衝突は一般的な出来事なのです。もし、2つの銀河の軌道が交差する場合、または互いに十分に接近している場合、重力はそれらをお互いに引き合います。銀河には数十億の星が含まれていますが、星の間には大きな距離があるので、星は衝突の際にお互いに触れずに通過します。しかし、ガスやほこりから成っている星の間の物質は衝突の影響で特定の場所に閉じ込められます。これは星の形成を加速させます。この為に、衝突した銀河には星形成の際の爆発が見られます。約30億年後、このような衝突が天の川

18 http://www.biltek.tubitak.gov.tr, Evren/Gökbilim Sözlüğü,
19 http://www.biltek.tubitak.gov.tr, Evren/Evrenin Yapıtaşları/Gökadalar/Gökada Kümeleri,

銀河とアンドロメダ銀河の間で起こることが推定されています。[20]

なぜなら、天の川銀河とそのそばにあるアンドロメダは1時間当たり約50万キロで接近しているからです。間に220万光年の距離があるこの二つの銀河は約30億年後に衝突するのです。[21]

天の川には約2,000億の星があります。太陽はこれらの星の一つに過ぎません。天の川銀河は約10万光年の半径があります。１秒当たり274キロの速度で回り、90万キロの速度でベガに向かって移動します。

ヘラクレス銀河団は１万個の小さな銀河からなっていて、私たちの世界から25,000光年離れています。

太陽系

天の川にある太陽系は120億キロの直径を持ちます。太陽の年齢は45ー50億年だと計算されています。　太陽は銀河の中心から3万光年離れています。

20 http://www.biltek.tubitak.gov.tr, Evren/Evrenin Yapıtaşları/Gökadalar/Çarpışan Gökadalar,; http://www.biltek.tubitak.gov.tr/haberler/gokbilim/99-08-4.pdf

21 http://www.newsandevents.utoronto.ca/bin/000414b.asp;http://www.biltek.tubitak.gov.tr/haberler/gokbilim/2000-05-3.pdf

太陽では１秒当たり5億6,400万の水素が5億6,000万トンのヘリウムに変わります。その差400万トンのガスがエネルギー/光線として拡散しています。無くなる質量によって計算すれば、太陽は１秒当たり400万トン、1分当たり2億4000万トンを失うでしょう。もし太陽が30億年以来この速度でエネルギーを生成しているならば、その期間で失われた質量は100万の4000億乗トンになります。この値は太陽の現在の総質量の約5000分の1に過ぎません。

太陽の表面の温度は摂氏約6000度です。中央部の温度は約2000万度に至ります。太陽の温度が上昇し続けると同時に、直径もまた拡大するのです。直径が拡大し続ける太陽はやがて爆発し、最も近い惑星である水星、金星、地球及び火星を破壊する可能性があります。

太陽の塊は2×10^{27} つまり、2×10の27乗トンです。70万キロの巨大な直径があり、地球の32万4529倍です。[22]

22 参照：http://www.physics.metu.edu.tr/~ecevit/bilinen_evren_gercekleri.ppt, (アクセス，２００４年０６月２１日); http://gokyuzu.org (Erişim: 21.06.2007); http://www.ozaltin.8k.com/NN/2.htm. (アクセス，２００４年１０月１６日); Yûsuf el-Hâc, Mevsûatü'l-İ'câzi'l-İlmî, p. 413-417; Ekrem Ahmed İdrîs, el-Felek ve't-Tıb Emâme Azameti'l-Kur'ân, 19-112; Prof. Dr. Osman Çakmak, Bir Çekirdekti Kâinat, ｐ. 66.

「天に諸星座を配置し、その間に太陽と照らす月を置かれた御方に、祝福あれ」（識別章、第25章、第61節）

天は絶えず拡大している

アッラーは、堅実な形で構築した天を継続的に広げて行くと語られています。クルアーンでは次のように語られています。

「われは偉力をもって天を打ち建て、果しない広がりにした」（撒き散らす者章、第51章、第47節）

学者たちは、1929年に星雲[23]が私たちの銀河から遠ざかっていることを発見しました。そして、この発見から考え、宇宙は継続的に広がっているという理論を言及したのです。[24] 20世紀の科学において最も重要な変容の1つをもたらしたこの主張によれば、銀河は、その距離に比例して増加する速度で互いに離れているのです。[25]

学者たちは1950年に、この法則を適用して銀河が離れる速度を計算しました。私たちから1000万光年離れている銀河は１秒当たり250キロ

23 星雲：星の他に宇宙で見られる白いしみのようなものです。光とガスを伴う非常に大きな塊となります。
24 Celâl Kırca, *Kur'ân-ı Kerîm'de Fen Bilimleri*, p. 165; en-Neccâr, es-Semâ, p. 82-93; Faruk Yılmaz, *Kâinâtın Yaratılışı*, p. 64-67, 255-258.
25 Kocabaş, *Kur'ân'da Yaratılış*, p. 19.

の速度で離れている反面、100億光年の距離である銀河の離れる速度は約25万キロなのです。[26]

広さについて言及される宇宙がそのままではなく､さらに広がることはアッラーの偉大さを完全に知覚することが不可能であることを示しています。

詩人はこの神聖な崇高さに対しての感動をとても素晴らしく表現しています。

偉大なのだ、神よ。あなたは偉大だ
偉大さは、あなたのそばでは非常に小さなものとなる

（アリ・ハイダル・ベイ）

この巨大な宇宙を継続的に拡大されているアッラーはいつかそれを、書記官が紙を巻くように、再び巻かれるでしょう。[27]また時が来れば地を別の地に、天を別の天に交わせられます。[28]これは新しい世界を創造すること、そして新しい生が始まることを表現しています。[29]

---

26 Prof. Dr. Osman Çakmak, *Bir Çekirdekti Kâinat*, p. 28.
27 参照：　預言者章、第21章、第104節.
28 参照：イブラーヒーム章、第14章、第48節.
29 参照： en-Neccâr, es-Semâ, p. 82, 105-106, 187-194; http://www.biltek.tubitak.gov.tr, Evren/Evrenin Kaderi/Kapalı Evren.

7層の天

また、アッラーはクルアーンで7層の天について語られています。もし、先に触れた第一の層の天であるなら、他の層を人間の理性がどうやって理解できるでしょうか。

アッラーは次のように語られています。

「（かれは）一層一層に、7 天を創られる御方。慈悲あまねく御方の創造には、少しの不調和もないことを見るであろう。それで改めて観察しなさい。あなたは何か裂け目を見るのか。それで今一度、目を上げて見るがいい。あなたの視線は、（何の欠陥も捜し出せず）只ぼんやりしてもとに戻るだけである。かれは灯明（星）をもって、最下層の天を飾り、悪魔たちに対する礫（流星）となし、またかれらのために烈火の懲罰を準備した」（大権章、第67章、第3－5節）

今、頭を上げて教訓と共に天を見なさい。その無数の星たちが1秒のゆるぎもなく驚くべき秩序で回ることについて熟考しなさい。それらの全ては多くの秘密と英知を持っているのです。

地球が自転を行わなわなければ、常に一部は暗く、一部は明るくなったでしょう。従って作業時間は休憩時間と区別できなかったでしょう。

地球の自転が24時間として定められていることにも数多くの英知があるのです。もし、この時間がもっと長かったら、地球は昼間と夜の間の気温差が1000度に至る水星のようなものとなったでしょう。長い昼にはあらゆる場所がもっと暑くなり、長い夜には非常に寒くなってどこも凍り付いてしまったでしょう。

そう、この真実を通して、アッラーがどうやって夜で昼の上を覆われるのか、眠りを休憩の、そして日中を生計を得る手段とされたことに注意しなさい。これらが全然ゆるぎなく交互に続いて行くことにおける、アッラーの御力と慈悲の顕現を考えなさい。

更に、もし、地球が太陽の周りを公転しなければ、度分の傾きが設けられていなければ、夏、冬、春や秋の季節はなかったでしょう。もし、地球にこのような傾きが設けられていなかったら、海洋から上昇した蒸気が北と南に進み、大陸は氷に覆われてしまうのでした。

もし月と地球が現在の距離ではなく例えば50,000マイル離れていたら、地球上の潮の満ち引きは非常に大きくなり、全ての大陸が1日2回浸水していたことでしょう。山ですらも短い期間で削られ、なくなっていたでしょう。[30]

30 参照：*İlim-Ahlâk-Îman*, 編集：M. Rahmi Balaban, Diyanet Yayınları, Ankara, p. 187.

だがら、ただその大きさ、星の多さに引っかかってしまわず、それらの創造主を見るのです。これら全てをどうやって創造したのでしょうか。その巨大な星たちは目で見える柱やホルダーなしにどうやってそのままそこにあるのでしょうか。

考えてみてください。太陽や月が一度でも故障を起こしたことがあるでしょうか。人間の修理工場のような修理工場に行ったことがあるでしょうか。数多くの天の被造物がそれらに割り当てられた軌道に浮かんでいますが、どれかがアッラーの計画とプログラムから逸脱して交通事故を起こしたことがあるでしょうか？

熟考を放棄することは大きな罪である

奇妙なことに、人間はこの上なく煌めきを伴い、飾り付けられている宮殿を見ると感動します。それを忘れられず、生涯を通じてその美しさについて話します。しかし、この大きなアッラーの芸術の奇蹟である万物を常に見ているのに、詳しく考えることはできず、それについて話すこともできません。あたかも普通のことであるように考えます。しかし、感動したそのはかない宮殿は、この大きな万物の最も小さな部分の一つである世界のとても小さな細胞なのです。

アッラーの御力を熟考しない人の例は、アリの次の状態のようです。

アリが、ある王様の為の、高い壁、丈夫な基礎、最も美しい家具で飾られている、召使いでいっぱいの大邸宅の中に巣を作りました。巣を出て友達に会った時には、彼らに自分の巣、食べ物やそれらをどのようにしまうのか、と言ったこと以外は話しません。彼がいる大邸宅、その大邸宅を建てさせた王様の権力、素晴らしさ、そして統治を考えることから遠く離れているのです。アリはこの大邸宅のことに不注意であるように、そこに住んでいる者についても不注意です。

不注意な人も、アッラーの精神的な芸術の奇蹟、彼の天使や純粋なしもべのことを知らないのです。

アリが、住んでいる大邸宅とその美しさを理解するのは不可能です。しかし、人間は、熟考と想像のおかげで数多くの世界を訪ねることができます。アッラーの芸術の奇蹟を理解することができるのです。アッラーが人間に与えられた無数の恵みに対し、自らが無であること、無力であることを把握して感謝のサジュダを行うのです。これができるのはただ、「人間」である者です。もしくは、言い換えるなら、唯これができる人が、人としての名誉と尊厳を感じることができるのです。なぜなら、人間は天性

のものとして熟考の力を持つ唯一の存在だからです。熟考の力を使わないうちに、それを枯らしてしまえば、この神性の信託を裏切り、そして人類の最も重要な特性の一つに別れを告げたという意味になるのです。

アッラーの友であるメヴラーナ師は、無限の神秘や英知の展示場であるこの世界で、厄介な心と共にうろうろし、被造物にあるアッラーのメッセージを散漫な、ぼんやりした顔で眺め、通り過ぎる不注意な人々の状態を次の比喩で描いています。

「ある時、ある牛が当時の文明の中心地であったバグダッドにやってきた。そして町全体を歩き回った。しかしその雄大な素晴らしさ、味覚、芸術の奇蹟の中で、ただ道端のメロンやスイカの皮だけがその注意をひいた。そもそも牛やロバの旅にふさわしいものは、道にこぼれ散らばった藁か、道のそばに生えた牧草である」（メスネヴィ　4巻、2377－2379）

伝承によれば、ムーサーの時代にある人が30年間イバーダを行いました。一つの雲が影を落として太陽から彼を守っていました。ある日、雲が来なかった為、そのイバーダを行う人は太陽の下にいたのでした。その母親にこれの理由を尋ねると、「おそらく、罪を犯したのでしょう」と言いました。彼が、「いいえ、罪を犯してはいません」というと、母は「天や花を

見なかったのですか。それらを見て、アッラーの偉大さを考えることで不注意になってしまったのでしょうか。」と言いました。若者が「はい、周囲の素晴らしい美しさを見たのに熟考を十分には行いませんでした」と言うと母親は、「それよりも大きな罪があるのですか。すぐに悔悟を行いなさい」と言いました。だから、理性を持つ信者は、熟考という任務を決して無視してはいけないのです。

人がアッラーの芸術における素晴らしさを学び、そして熟考すればするほどアッラーの崇高さについてのマーリファ、つまり、アッラーへの近しさもそれに応じて増していきます。

聖アリ―は

「クルアーンが分かる人は、天文学についてもいくつかのことを学べば、そのおかげで信仰と正確な知識が増す」ど言いました。それから次の章句が読まれました。

「本当に夜と昼との交替、またアッラーが天と地の間に創られる凡てのものの中には、主を畏れる者への印がある」（ユーヌス章、第10章、第6節）

アッラーが創造したあらゆる被造物は、アッラーの秩序の中で特定の奉仕と任務を果たします。人間はこの無数の被造物の無限の奉仕の中から今日まで、ほんの少しだけを理解することができました。見出せず、理解できていない

英知は、理解できたものよりも何倍も多いのです。

なぜなら、音を知っているなら、それは耳という受け取る器官を備えている為なのです。色を知っているなら、それは目のおかげでなのです。これらの無限の存在の世界にはまだ数多くアッラーの顕現があるものの、それらを受け取る仕組みが私たちにはない為、それらについては何も知らないのです。[31]

被造物やそれらの特性すら完全に理解できず。知性に限りがある人間が、全ての万物を創造したアッラーをどうやって完全に理解できるでしょうか。アッラーの偉大さをその特性の顕現から少しばかり理解したイスラームの学者たちは驚嘆と恐れの中でただ、

「そのお方を理解するということは、認識できることではない、ということを理解することである」と言うことが出来たのです。

---

31 イスラームの学者たちによれば、万物は“属性と本質”から成り立ちます。本質は物質的な存在です。属性とはある物質的なもので理解できるものなのです。例えば、色や臭いはそれぞれ属性であり、唯物質的なもののおかげで認識できます。前述のように目がなければ色が理解できないし、鼻がなければ臭いが理解できません。来世には他の特性を持って新しい人生を始める為に、現世で理解できない他の属性の形で存在を理解できることが考えられると同様に、現世において受け取る器官を備えていない為に、私たちが知らない他の属性があるのを認めることも可能です。

なぜなら、創造された被造物にはアッラーご自身の真実から何らかの反映や顕現はないのです。アッラーが創造したあらゆるものは特性の顕現の結合で成り立ちます。自らの顕現に耐えうる場が創造されなかったことは、聖ムーサーのアッラーを見ることについての繰り返しの願望に対して出された“لَنْ تَرَينِى” /「あなたは決してわれを見ることは出来ない。」[32]という呼びかけと、その結果として彼が失神したという出来事からも明らかです。故ナジップ・ファズルは素晴らしく語っています。

原子たちにはパーティーやフェスティバルがあり、

そして、どこでも光いっぱいであり、

密接した建築、密接したエゴ

アッラーよ、あなたを知った、未知の有名な創造主よ

大気圏

地球を包み込む大気圏にも多くの神秘や英知があります。そこに生じる雲、　時には軽く、時には激しく吹く風、聞こえてくる騒音、光る稲妻、降る雨や雪等、全ては素晴らしい計量と計算で起こる驚異的な顕現です。

32　参照：　高壁章、第７章、第143節.

クルアーンは人間を地と天の間にあるこれらの顕現を熟考し、それらにおけるアッラーの御力を指摘する証拠を見ることへと招きます。クルアーンでは次のように語られています。

「本当に天と地の創造、昼夜の交替、人を益するものを運んで海原をゆく船の中に、またアッラーが天から降らせて死んだ大地を甦らせ、生きとし生けるものを地上に広く散らばせる雨の中に、また風向きの変換、果ては天地の間にあって奉仕する雲の中に、理解ある者への(アッラーの)印がある」(雌牛章、第2章、第164節)

私達の地球を愛情豊かに抱く大気圏はアッラーのしもべたちに対し無限の慈悲を見せる完璧なシステムの一つです。大気圏は平均して77%の窒素、21%の酸素および1%の二酸化炭素ならびにアルゴンのような他のガスを含みます。酸素は非常に簡単に燃焼させるものであり、21%以上の、1%ごとの酸素の増加は雷が森林火災を起こす可能性をそれぞれ70%増加させることが予想されています。25%以上の酸素は現在使用している植物からの食糧の大部分が燃えて灰になってしまうということを意味します。

また一方で、酸素と二酸化炭素は常に使用されているのにも関わらず、空気の割合は維持されています。世界中に人間と動物のみが生きていれば、自然における全ての酸素を使用して二酸化炭素に変え、次第に酸素が少なくな

り増える二酸化炭素で死んでいたでしょう。しかし、この万物を創造した力は植物をも創造され、それらに二酸化炭素を使用して酸素に変える能力を与えられることで、万物における素晴らしいバランスそして継続していく生命もたらされたのです。

さらに、地殻の厚さは、非常に繊細な基準で決定されています。もう少し厚ければ、酸素が二酸化炭素に吸収され、植物が成長できなかったでしょう。[33]

私達の体内であらゆる瞬間に実現される何数十億の生化学プロセスのために酸素が必要です。私たちは常に肺に空気を引き込み、そして同じ空気を吐き出します。大気圏における酸素の割合が呼吸するのに理想的な密度であることは偶然とは言えないでしょう。私たちの肉体を酸素を必要とするものとして創造されたアッラーはその恵みを私たちに豊かに与えられました。さらに、容易に得ることのできる、呼吸によって得ている空気の中に最適なバランスで入れられたのです。したがって、私たちの呼吸すら、多くの教訓を含むアッラーの偉大な恵みなのです。

最も高い技術で造られた飛行機に乗った時、「もし、高いところを飛行中に圧力が下が

33　参照：*İlim-Ahlâk-Îman*, Derleyen: M. Rahmi Balaban, p. 187.

ったら自動的に前に落ちてくる酸素マスクを取り付けなさい」と告げられます。

しかし、誰も「明日空気の酸素率は21%から25%に増えるでしょうか、または18%に落ちるでしょうか。酸素チューブを買うべきでしょうか」と心配はしていません。なぜなら、アッラーを信じる人も信じない人も、アッラーの秩序を自然に信頼して生きています。そうでなければ、人間が直面するあらゆる生命の脅威と危険を認識すれば、人生は耐えられないものになるでしょう。

また一方で、空気は私たちの周りを照らす鏡のようなものです。光は物質に当たらずには、光を与えないのです。ある断片に当たった光は花火のように撒かれ、熱と光となって周りに広がります。大気圏の外にある宇宙空間には分子や原子のような粒子が存在しないため、太陽から光が来ているのに、そこは暗いのです。

例えば、大気を得られない月には、太陽から来る光を分配して周りを照らすガス層はありません。その為に、月の表面は明るい反面、その少し上の部分は継続的な光の雨の中にあるのに暗いのです。

これらの驚異的な顕現は、世界が、人間が生きることを可能とする特別な条件によって、そして重要な目的で創造されたことの非常に明確な証拠なのです。また、生を可能とするこの

細やかなバランスはアッラーがしもべたちに与えられた偉大な恵みであると同時に、そのお方の存在と無限の御力の証拠の一つなのです。万物においてあらゆる存在が神聖なプログラムによって動くこと、全てが計画的で計算され、秩序正しいことは、これを行った企画者、管理者と計算者の力の存在を認めることを不可欠とします。

従って、無神論者が言っているような、「人生と万物は自ら、偶発的にできたものである」という主張は非常に馬鹿げた詭弁に過ぎないのです。

イスマイル・フェンニー・エルトゥールル(1855-1946)はこの真実を次の例で説明しています。

「ある場所に計画や秩序が見られるなら、そこには計算する者や統治する者がいることを理性は絶対に認める」

例えば、あなたには庭があるとしましょう。その庭の周りに順番に数多くの苗木を植えさせました。ある日あなたはそこに行き、この苗木のいくつかがあちこちで倒れているのを見ました。この理由を聞くと、庭師はあなたに、激しい嵐が来てこれらを倒したと答えました。あなたはこの答を認めます。しかしまたある日そこに行き、苗木が順番に、例えば4つは大丈夫なのに５番目は倒れている、次も４つが大丈夫なのに5番目は倒れているのを見ました。そし

てこの理由を聞くと庭師は同じように答えました。あなたはこれを信じるでしょうか？疑いもなくあなたはこれを信じず、悪い意志でなされたと思うはずなのです。なぜなら前の出来事は偶発的に起こったといえるものの、今回は絶対にそう思えないからです。なぜなら、今回の出来事には計算があるからです。[34]

万物が無限の計画や細やかなバランスで存在を維持していることを、知性を持ち、考える人であればだれも否定できないでしょう。

ここで、この神聖なバランスのいくつかを示しましょう。

空気圧

大気圏を構成するガスは1 cm^2 のエリアに約1ｋｇの圧力をかけます。つまり人間の体は約15トンの重さの下にあります。アッラーはこれも崇高な均衡でバランスのとれたものとされました。外の空気圧がどれほどであろうと、ちょうど同じ程度の、体内から外への空気圧があります。空気圧が下がる高い所に登った人の不快感や鼻血の原因はこの圧力差なのです。大気圏の外に出る宇宙飛行士たちは、中に空気が入っ

34 *Îman Hakîkatleri Etrafinda Suallere Cevaplar*, p. 21-22, Sebil Yayınevi, İstanbul, 1978.

ている特別な上着を着ることでようやく、宇宙を旅することが出来ます。

熱さ、冷たさの均衡

空気中に十分な量で散布された二酸化炭素および水蒸気の分子は高い保温能力で素晴らしい均衡をもたらします。この分子は昼間に太陽からの光線の一部を吸収し、昼間の温度が過度に上昇することを防ぎます。夜になって太陽の光がなくなれば、空気分子に吸収された熱さは植物の温室でのように、寒い宇宙空間には放置されません。例えば、月はこのような保護をする天井を持たない為、昼間は高温にさらされ、夜は凍てつくような低温となるのです。

風

大気圏は温度、圧力、湿度値及び中に発生する事象の観点から、異なる層に分けられています。第1層は対流圏であり、雨、雪、風などの流れがここで発生しています。地面から16kmまで続くこの層の温度は徐々に低下し、-56℃にまで下がります。空気の子の層には完璧な循環システムが備えられているのです。

世界の軸は少し傾いており、光線はただ赤道地域に垂直にもたらされることはありません。それによって熱帯地域に熱さが分配されま

す。この地域では空気や地面がさらに温められることで、熱が豊富な量で蓄えられます。そう、この熱が集められることは、風の為に必要な力やエネルギーが提供されることを意味するのです。

海から蒸発する何千トンの水は空気の柔らかな背中に乗ります。そして、風はその水を、水を必要とする地域に運びます。この循環システムのおかげで常に雨が降る地域や乾燥地帯ではなく、完璧な計画や手段の中であらゆる地域が水と慈悲を得ることができるのです。

大気圏における完全な計画に基づく循環のおかげで、熱が輸送されます。低気圧及び高気圧システムによる南北の方向の動きや、高度における強い風流の助けを得て、北半球の冷たい空気はより低い緯度に下降する反面、南の暑い空気は高い緯度にまで上がります。

太陽が地面に異なる強さで熱を与えることは、大気圏における気団がそれぞれ異なるレベルで暑くなる原因になり、熱くなった空気は受けた命令によりすぐ上に上がります。そして、代わりにまた寒い空気が来ます。これによって地面には熱い空気があるところには低気圧、寒い空気があるところには高気圧の中心と呼ばれる、移動する空気の源が発生します。結局、小さな空気の粒子が風として動き始めます。それによって、大気圏における湿度、温度、密度、

エネルギーと、植物の受粉の為に必要な花粉が、それを必要とするところに運ばれます。

クルアーンでは次のように語られています。

「またわれは豊沃にする風を送り、天から雨を降らせて、それをあなたがたに飲ませる。だがあなたがたはその（宝庫の）管理者ではない」（アル・ヒジュル章、第15章、第22節）

万物におけるあらゆる被造物のように、風もアッラーの主権への絶対的な服従で従っています。アッラーの意志によって人類への慈悲の要因となり、また、アッラーの命令で破壊的な悲しさの顕現にも変わります。アード族が風によってどのように滅ぼされたかを描く次のクルアーンの章句はこの真実の典型的な例です。

「われは災厄の打ち続く日に、かれらに対し荒れ狂う風を送った。すると人間は、根こそぎになった。ナツメヤシの切り株のように、むしり去られた。」（月章、第54章、第19－20節）

空気の他の効果

空気はその繊細な肩に数千トンの水を運んでいるように、何百人も乗った飛行機も運んでいます。光と熱を分配しています。何百もの異なる波長の音を私たちの耳にもたらします。その最も注意をひく例は、今日の携帯電話です。

また一方で、空気は様々な臭いを互いに混ぜてしまうことなく、私たちの鼻にもたらします。もし大気がなければ、隣の友達に声を聞かせないし、電気を点けて照らすこともできなかったでしょう。また、空気は肺と静脈を循環し、とても重要な任務を果たしています。アッラーの無数の崇高さの顕現と無限の力を思い起こさせるのです。

神聖なフィルター

対流圏の次にあり地面から50キロまで高さに伸びる層の名は、成層圏です。高いエネルギーと危険な光線が地球に到達するのを防ぐこの層で温度は再び上昇します。オゾン層はここにあります。3原子を持つ酸素の分子であるオゾンは太陽の光線の害をフィルタリングします。

太陽から来る紫外線は植物の成長速度を低下させ、人間に皮膚がんを引き起こ　し、目に被害を与え、いくつかの感染症のリスクを増加させます。そう、成層圏層は、太陽から来る紫外線を捕捉して跳ね返し、素晴らしい化学的平衡によって酸素をオゾンに変換します。

オゾンはそもそも、非常に危険なガスです。1グラムの200分の１を呼吸することですら人に死をもたらします。アッラーの慈悲と英知を見てください。これほどの有毒であるガス層

を人間を脅かす極めて重大な危害の防止と気候の平衡の保護の為の、神聖なフィルターとされたのです。

保護された天井

大気圏の80kmまで伸び、中間にある層は中間圏と言われます。この層は流星群に対して盾のような義務を果たします。

木星、土星と月という障害物を超えた隕石は地球の重力に引かれてものすごいスピードで大気圏に入ります。流れ星とも呼ばれるこの事象において、隕石は空気と接触すると燃え、中間圏の中に粉末となるのです。地球の周りにこのような保護層がなかったら、あるいは実際のものより薄かったりしたら、数百万の隕石が地球に落ちて、月でそうしたように、地球のいたるところを穴だらけにし、燃やし、破壊するでしょう。しかし、アッラーの無限の慈悲の結果として、天から落ちるこの大きな物体は地面に到達する前に粉末とされるのです。そして、これらの粉粒子のそれぞれが雨の核となります。

なぜなら天に雲が形成されるためには、地上や宇宙からの細かい粒子が必要なのです。そして、これらの粒子は上部の大気圏に到達しなければならないのです。そう、ここに運ばれる湿った風で核の上に凝縮が始まり、雲粒が形成

されます。雲粒は物理的および数学的な計画によって小さな雨滴となり、この小さな水滴が地面へと落ち始めるのです。

大気圏の特性が発見されるよりずっと前に天と地の主であるアッラーは次のように語られています。

「更にわれは、天を屋根とし守護した。それでもかれらは、これらの印から背き去る」（預言者章、第21章、第32節）

ラジオ波

500-1000　キロまで影響を持つ層は中間圏と呼ばれています。ここでは、原子や分子は帯電していないのではなく、イオン化され、つまり、電子を与えること、もらうことによって帯電された状態にあります。太陽の高エネルギー線が呑み込まれて原子がイオン化される結果、層内の温度は2000℃まで達する可能性があります。電離層は大気圏のイオンによって作られた鏡のようです。無線電話とラジオの送信機の、地上から宇宙に上昇する電磁波はこの鏡に当たり、一部が反射して再び地球へと送信されるのです。反射された波は地球のあらゆる場所に届き、このようにしてあらゆる場所においてラジオや無線放送を容易に受け取ることが可能となるのです。

ここで見られるように、アッラーは地球を暗く寒い宇宙空間を素早く行き来する、適温で心地の良い住処とされました。温暖な気候が統治する地球上では、わずかな微風にすら英知があり、一つの葉でも計画なく、勝手に落ちることはないのです。

最も小さなものから最も大きなものまで、創造されたあらゆるものはそれぞれが教訓を与える碑文であり、芸術的な奇蹟なのです。

アッラーは次のように語られています。

「あなたがたは思い起さないのか。アッラーは天にあり地にある凡てのものを、あなたがたの用のために供させ、また外面と内面の恩恵を果されたではないか。だが人びとの中には、知識も導きもなく、また光明の啓典もなく、アッラーに就いて論議する者がある」（ルクマーン章、第31章、第20節）[35]

この世界を示す書の英知と真実で満たされた行を正しく読み、理解し、熟考の地平線における深みを増した者は、何と幸福なことでしょうか。[36]

35　参照：跪く時章、第45章、第13節.
36　参照：　Prof. Dr. Osman Çakmak, *Bir Çekirdekti Kâinat*, İstanbul 2005, p. 118-131.

雲、雨及び雪

雲について考えてください。大きな海が空中で泳いでいます。雲のもう一つの任務は地球が過熱されることを防ぐすることです。温度が上昇すると、水はより多く蒸発してさらに雲が形成されます。太陽から来る光線は、これらの雲によって鏡のように裏返されます。　　これにより、地上の温度はバランスがとれているのです。

慈愛深きお方アッラーは雨を降らせたい時、風を先駆として派遣します。後に、その風はアッラーの命令で山のような雲を積み、決まったところへ導きます。天において雲をご希望のままに広げ、積み上げられるアッラーはその雲の中から雨を降らされ、色々な果物を育てられます。亡くなった人々を同じように再び生き返らせることを思い起こさせます。人々がこの教訓に満ちた光景から自分に適したものを得ることを望まれているのです。（詳しくは、高壁章、第7章、第57節；創造者章、第38章、第9節）

アッラーはそのしもべの中から御心に適う者に慈悲を降らせられます。特に、干ばつの激しい地域に住む人々は、この恵みに深く喜びを感じます。彼らの絶望は希望に変わります。[37]なぜなら「かれこそは（人びとが）絶望した時、雨を

37　参照：ビザンチン章、第30章、第48節.

降らせ、慈悲を垂れられる方。かれは讃美すべき愛護者であられる」（詩人たち章、第26章、第28節）からです。

アッラーは時には干ばつ時には雨やひょうを懲罰の手段とし、罪をおかしたしもべを鍛錬します。それらを通じて御心に適う者に害を与え、御心に適う者を守ります。[38]

つまり、天と地面の関係はアッラーが望まれた時、人々の態度や心の世界に応じて形成されます。

アッラーは雨を滴の形で送りますがどの滴も、他の滴に追いついてそれとくっつくことがありません。どの滴も自分の為に描かれた道を使い、その道から離れません。遅くなったり、後ろから来るものが急いだりしません。全ての人々とジンたちは一滴の水を作る為に、もしくは一つの村に降る雨の滴を数える目的で集合したとしても、それを行うことはできないでしょう。その滴の数はただそれらを創造したアッラーがご存じなのです。

同時に、細やかな水からできており、硬く凍ったひょうや、散らされた綿のように降る雪の粒には数え切れないほどのアッラーの顕現が存在しています。

38 参照：御光章、第24章、第43節.

地に落ちる雨や雪の水を、木の一番上の枝に到達させるのは誰でしょうか。さらに、水は葉の全てに広がりますがそれは目に見えません。細かな管のおかげで木のそれぞれの部分が水によって育まれるのです。

普通は下の方に流れるべき水は、いったいどうやって上に登るでしょうか。[39]

もし雨粒が重力の法則に応じて落ちた場合は、それぞれの滴は地面に弾丸のスピードで当たっていたことでしょう。これは生物が雨の下で死ぬことを意味します。しかし、それぞれの雨の滴は一定のスピードで地面に落ちるのです。柔らかく、傷つけることもなく...

滴はある基準により形成されて小さな雨粒となります。そして空気に与えられる揚力と流動性のおかげで重力の影響がバランスを取り、滴が一定のスピードで落ちることが可能となります。

そう、教訓を含んだまなざしで見渡すことができる人々にとって、ただこの一つの真実でも、生きている世界におけるアッラーの秩序と均衡がいかに荘厳なものであるかということ、アッラーの無限の学問、力と英知を示すのに十分なものとなるのです。

39 参照：İmâm Gazâlî, *İhyâ*, VI, 67-68.

地への熟考

篤信を持つしもべたちは熟考において深みを増します。咲いている花、鳴いている鳥、果物が満ちた木、全ての言葉を分かるようになります。それらの細やかで繊細な美しさを精神的な人生に反映させます。花のように細やかな魂を持ち、果物が満ちた木のように気前の良さの持ち主となります。

アッラーは地面を最も素晴らしい形で広げ、人々が生きることを可能としました。地面の上に広い道路や通路を作られ、そこを歩くのにふさわしい、適した状態で創造されました。

クルアーンでは次のように語られています。

「(かれは)あなたがたのために大地を臥所とし、また大空を天蓋とされ、天から雨を降らせ、あなたがたのために糧として種々の果実を実らせられる方である。だからあなたがたは(真理を)知った上は、(唯一なる)アッラーの外に同じような神があるなどと唱えてはならない」(雌牛章、第2章、第22節)

「われは大地を、広々としなかったか。また山々を、杭としたではないか。」(消息章、第78章、第6—7節)

「かれこそは、大地をあなたがたに使い易くなされた方である。それでその諸地域を往来し、かれ

の糧を食べるがよい。そして復活の時にはかれに召されていく身である」（大権章、第67章、第15節）

アッラーは啓典で地について何回も述べておられ、人間は地の英知について注意深く考えるべきなのです。地の上は生存者の場所であり、地面の内部は死者の場所なのです。アッラーは次のように語られています。

「われは、大地を大きな容器としなかったか、生存者と死者（双方のために）」（送られるもの章、第77章、第25－26節）

地面が死んだ時に、それをよく見てください。その上に水が降らされると、それは復活し、発達し、緑色になります。色とりどりの生物を育てます。中から色々な生物が出てきます。または、アッラーが地面をいかに強固なものにされたのかにも注意を払ってください。どのように山の下に水を貯められているのでしょうか。泉を湧き出させ、いかに地に川を流されたでしょうか。乾いた石と濁った土壌からから甘くて純粋な水をどうやって出されるのでしょうか。その水であらゆるものにどうやって人生を与えられるのでしょうか。その水で木と植物の種類、小麦、ぶどう、アルファルファ、オリーブ、ザクロ等数え切れないほどの果物をどうやって生じさせられるのでしょうか。この果物はすべて異なる形、異なる色、異なる味、および匂いを持ちます。全てが独特の美しさや独特

の模様を盛ります。一部は栄養の点から他のものより優れています。しかし全てに同じ水が撒かれ、同じ土壌から出てくるのです。[40]

植物

種子が土壌に落ち、土壌の湿気がそれに影響を与えると、それは成長し、この成長の結果、上部と下部に亀裂が生じます。上部から土壌の上に上がる木が出て来る一方で、下部から土壌の深い部分に広がる根が伸びます。これは驚きべきことです。なぜなら、この種子の本質は唯一つであり、外から来る影響も一つであるのに、一方から天に上るもの、また一方から土壌に入るものが出て来ます。一つの特徴から二つの反対のものが生まれるのは驚くべきことです。確実に、どの事柄も、英知を持つ創造者の意志で行われているということをここから理解できるのです。

さらに、この種子から出て来る木の一部は木材となり、また一部は葉となります。また一部は最初に花として現われますが、後には果物となります。さらに、この果物の中に色々な特徴をもつ、人間の体に有益である色々な物質が生じているのです。

40　参照：İmâm Gazâlî, İhyâ, VI, 63 vd...

また、ただ果物のことを考えても、色々な特徴があります。例えば、ぶどうと種子は冷たく乾いているのに、果肉の部分、そして果汁はみずみずしいのです。同じ影響下にありながら、ただ一つの種子から色々な特徴を持つ食べ物ができることは、絶対的に、この上なく力強く、そして英知を持つある存在を示します。

またアッラーは人間の数多く病気の治療の為に植物を自然な薬局とされたのです。一部の植物は癒しであり、栄養であり、体に力を与えます。一部は復活させ、また一部は有毒で、死をもたらします。ある植物は食べられると、他のものに変わります。ある植物は血を清め、ある植物は喜びと活力を与え、また別のものは落ち着いて眠らせます。

さらに、植物を通して水と炭酸から糖分と木材を生じさせ、被造物が呼吸する為に酸素が放出されることは、いかに注目すべき事柄でしょうか。

要するに、地面から生えている植物や藁屑のどれひとつであれ、そこに人間たちの為の多くの効果がないものは存在しないのです。しかし人間は、この効果を認識するだけの力も持たないのです。

シンプルな草のように見える様々な植物が、地面の中で見出し、生やしている様々な色、香り、味、そして色々な形の葉は、どの化

学者もそれに類似するものを作りだせてはいない、実に驚異的なものなのです。

植物の成長における秩序と均衡もまた、また別の崇高さの顕現です。例えばプラタナスの木は、毎年何百万もの種を作ります。それらが周囲に広がるように、あたかも毛できたパラシュートのようになります。風と共にこの種は遠くまで広がります。もし、一本のプラタナスの木が周囲に飛ばせた種の全てが新しいプラタナスになっていれば、短期間後にはあらゆる場所がプラタナスの侵攻を受けたことでしょう。この広大な世界は、一種類の木にすら狭すぎるものとなったでしょう。この例は、他の生命体に当てはめることができます。

例えば、何年も前にオーストラリアで、一種のカクタス（サボテン）のフェンスを作ろうとしました。オーストラリアではカクタスの敵となる昆虫がいない為、植物は急速に広がって行きました。オーストラリア人をあわてさせたこの展開の結果、カクタスはイギリスほどの面積を占めるほどとなりました。その途中で遭遇した町や村の人々は、自分の土地を放棄して去らざるを得なくなり、農業が崩壊しました。

その対策として、あらゆる昆虫学者たちが世界を騒がせました。結果として、ただカクタスに住み、他のものは何も食べないある昆虫を見つけ出しました。しかも、急速に成長する、

オーストラリアには天敵のいない虫でした。まもなく、昆虫はカクタスに勝利を収めました。現代ではカクタスは限定的な場所のみに生息し、災いをもたらすこともなくなりました。大量にいた昆虫たちも、ただカクタスを制御するのに十分なだけの数が残りました。[41]

この例も、万物において容易に知性で把握することのできない均衡や神秘的な環境上のバランスが支配的であることを示します。従ってどの知性や論理も、一部の植物や動物が過度に繁殖し世界を侵略することを防ぎ、ある力も存在を否定することはできません。

また驚くべきこととして、一つの土壌の成分から、それぞれに異なる何百万もの植物や果実が育ち、実ります。糧を与えるお方であるアッラーは、それぞれの種類の被造物に、それぞれの食卓を用意されるのです。

例えば、羊が食べられるものの多くは、人には食べることができません。人が食べられるものの多くは、羊には食べることができません。つまり、糧という恵みも非常に細かなバランスで、被造物の中で分配されているのです。糧の確保と分配におけるアッラーの力を示す次のクルアーンの言葉はいかに考えさせるものでしょうか。

41 *İlim-Ahlâk-Îman*, 編集: M. Rahmi Balaban, p. 190.

「自分の糧を確保出来ないものが如何に多いことであろうか。アッラー（こそ）はそれらとあなたがたを養われる。かれは全聴にして全知であられる」（蜘蛛章、第29章、第60節）

実際、被造物が互いの糧の媒介となること、病んだ鳥の口に健康な鳥がエサの粒を運ぶことは何と大きな神の慈悲の顕現でしょう。

この世界が創造されてから今日まで、どの生命体の糧も軽視されることはなく、無数の神の食卓が用意されてきたこと、今でもそれが続いていることはいかに教訓に満ちていることでしょう。なぜなら、考えてみるならば地球の4分の3は水で覆われているからです。4分の1の大部分も、植物の成長には適さない岩場か砂漠でできているからです。残るのはほんのわずかな土壌です。しかしアッラーの御力は非常に崇高なものであり、この土壌を無数の変成作用、つまり変成、変化により、あらゆる生命体に糧を与えるだけの食料の源とされたのです。

広大な海

地表の大部分は水に覆われています。そのおかげで南極や北極の凍りつくような寒さも、熱帯の焼けつくような暑さも、全世界に影響を与えることがないのです。日中、太陽の熱で暖められた陸地は、集めたこの熱をちょうとラジ

エーターのように周囲に広げます。海は、太陽から何百万カロリーも受けているのにもかかわらず、ただ数度、温度を上げるのみです。しかし温まった後は、容易に温度を下げません。つまり海の、陸地との相違点は、気候を整え、過度に暑くなったり寒くなったりすることを防ぐ、サーモスタットの役割を果たしているのです。同時にその蒸発によって、陸地の水へのニーズにも応えます。もし地上に海が少なければ、蒸発も少なくなり、渇きによってあらゆる場所が砂漠となっていたでしょう。

海における生物や鉱物も、陸地のそれよりも劣ってはいません。海から取れる真珠、珊瑚、その他の宝飾品、そして新鮮な食べ物は、人間にとって非常に重要な位置を占めているのです。

水

地上の全ての生命体の命は、水に結びついています。もし人が水を飲む必要に駆られているのにそれを見つけることができなければ、地上の全ての宝が彼のものとなったとしても、水を得る為に躊躇なく全てを捧げるでしょう。そして人が水を飲んだ後、それを排出することができなければ、それを行う為にまた、全ての現世の富を放棄することに躊躇はしないでしょう。人類に驚嘆すべきなのです。お金や鉱石の

価値を膨張させ、アッラーが与えられる一口の水の価値の偉大さを理解することに、不注意であるのです。[42]

✿

このような無数の真実を、それにふさわしい形で熟考することができる人は、この世界にある全ての生物が生き続ける為だけにすら、どれだけの大きな知識や力の助け、保護を必要としているか把握することにそれほど時間はかからないでしょう。それ自体で実現することが絶対に不可能な条件の中で、あたかもアッラーの驚異の世界で奇跡の作品が生きているのを理解します。このことを理解した知性、論理、理性、良心は、諸世界の創造主であり、それを整えられるお方であるアッラーに反抗するという恩知らずで傲慢なことをすることはできないでしょう。

動物たちにおける英知

空を飛ぶ鳥たち、家畜の、もしくは野生の動物たち、そして目で見ることも難しいような小さな虫たちを注意深く見ることが必要です。なぜなら彼らには驚くべき特性があり、彼らを創造されたアッラーの崇高さ、御力、英知に驚嘆しないことは不可能であるからです。

42　参照：İmâm Gazâlî, *İhyâ*, VI, 65-66.

アッラーは、目で見ることも難しいような小さな動物たちの中に、驚異的な器官をいかに組み込まれていることでしょう。それらは全く不足することなく、その任務をいかにして果たすのでしょう。彼らが持っている特性を完全に見出すことすら、人間の理解力を超越するものなのです。

人はその周囲の動物、その姿かたちを注意深く見るなら、そしてそこから振り返って彼らから得られる革、毛、肉、乳といった役に立つものを教訓を得ようとする目で見るなら、アッラーの無限の恵みと慈悲を見出すでしょう。崇高なるアッラーは寒さから守る為に彼らに特別の皮を与えられ、足を守る為に固い爪を与えられました。全てのニーズに最も素晴らしい形で応えられているのです。

例えば、一週間か二週間の寿命であるのにもかかわらず、素晴らしいデザインをあたえられている蝶は、「その状態による言葉」と呼ばれる秘められた語りによってどれだけのことを語るでしょうか。目のまなざしに、理性の把握に、特に心の繊細さの為に示されている無数の神の奇蹟のほんの一つです。

クルアーンでも、ラクダを見て、どれがどのように創造されたかについて熟考することが求められています。

「かれらは骼駝に就いて、如何に創られたかを考えてみないのか。また天に就いて、如何に高く掲げられたか、また山々に就いて、如何に据え付けられているか、また大地に就いて、如何に広げられているかを。だからあなたは訓戒しなさい。本当にあなたは一人の訓戒者に外ならない」（圧倒的事態章、第88章、第17－21節）

つまり、動物たちや他の被造物のあり方を詳しく調べれば、どれほど多くの崇高さの顕現がさらに見出されることでしょうか。

アッラーは全ての生物に素晴らしい特性を与えられました。似ている糧で育まれたとしても、それぞれに異なる収穫をもたらします。これらは生命を全体として可能とする形で互いに補完しあいます。

例えば、緑の桑の葉を牛や羊が食べれば、そこから肉、乳、毛ができます。小さな虫である蚕は、同じ葉を食べて絹を作り出します。同じものを鹿の一種が食べれば、そこから麝香が得られます。蜂が花粉から蜜を作ることは、この世界で最も完全な被造物である人間の力を超越しています。シンプルな草である様々な花が、土壌から見出して生じさせている色、香り、生命力を備えた葉は、どの化学者の力が及ぶこともない、素晴らしい状態になります。動物は自らに与えられた神のプログラムにより、草を肉や乳とすることができるのに、被造物の

中で最も完全である人間は、今日の最新の科学技術を備えた化学の実験室においてすら、何トンもの草から1グラムの肉や乳を作り出すことすら、いまだに実現できていないのです。

崇高なるアッラーは次のように語られています。

「また家畜にもあなたがたへの教訓がある。われはその腹の中の雑物と血液の間から、あなたがたに飲料を与える。(その)乳は飲む者にとり、清らかであり(喉に)快適である」(蜜蜂章、第16章、第66節)

蜜蜂

アッラーは次のように語られています。

「またあなたの主は、蜜蜂に啓示した。「丘や樹木の上に作った屋根の中に巣を営み、(地上の)各種の果実を吸い、あなたの主の道に、障碍なく(従順に)働きなさい。」それらは、腹の中から種々異った色合いの飲料を出し、それには人間を癒すものがある。本当にこの中には、反省する者への一つの印がある」(蜜蜂章、第16章、第68－69節)

預言者ムハンマドも、次のように語られています。

「信者は蜜蜂に似ている。清らかなものを食べ、清らかなものを生み出し、清らかな場所

に滞在し、その場所を壊したり傷つけたりしない」(Ahmed, II, 199; Hâkim, I, 147)

預言者ムハンマドはここで信者の特性について言及し、同時に蜂にある素晴らしさと英知をも示しておられます。

解釈学者のフサイン・カーシフィーは次のように語っています。

「熟考を行う人々は、全てに十分な力を持たれ全知であられるお方アッラーが、小さな蜜蜂をどれだけの英知で創造されたかを知る。

蜂は従順であり、その方向から離れない。

自らに託された苦い、もしくは甘い果実を食べ、甘い蜜を与える。

非常な篤信の持ち主であり、清らかで純粋であるもの以外は口にしない。

非常に従順であり、アッラーに命令に決して逆らわない。

彼らは非常に遠い地まで行き、また自分の土地に戻ってくる。

彼らは非常に清潔であり、汚れた場所にはとどまらず、それらを食べることもない。

非常に芸術的であり、世界中の建築家や技術者が集まっても、蜂がやっていることをやることはできない。

このようにして彼らが作り出す蜜には、外見上、病人への癒しとなるように、それについて熟考することにおいては逸脱という病である無知への癒しがある」

本能の奇蹟

イスマイル・フェンニ・エルトゥールルは動物の本能と呼ばれる神のプログラムによってその生を継続させていることを次のように語っています。

「動物たちは、その生命の維持と世代の継承の為に必要なもの、自らにとって役に立つ糧を、決して学ぶこともなく、この本能を通して知っている。鳥たちは素晴らしい巣を作る。渡り鳥たちは旅の為に、一定の時期になると集まる。虫たちの一部は死ぬ前に、卵から孵る自分の子供たちを食べるであろう他の虫を、殺すのではなく、彼らの一部の腺に害を与え、歩けないようにし、子供たちのそばに置く。しかし奇妙なことに、この虫たちが成長した後に食べるものはまた別のものである。蜂たちは幼虫の食べ物を変えることで、彼らをオスまたはメスにする能力を持っている。彼らの巣に、何らかの事情でオスがいなくなった時には幼虫を、それを通して新たな女王とすることができる」[43]

43 *Îman Hakîkatleri Etrafinda Suallere Cevaplar*, p. 58-59.

また非常に教訓深いこととして、スズメバチはバッタを従えさせます。地面に穴をあけ、バッタを、死なずに意識を失うように差します。これは缶詰にされた肉のようです。そして、まさにピッタリのタイミングと場所で卵を産み、子供たちがそこから出てきた時には、食べることのできる新鮮な肉を見つけることができるのです。母親は遠くに飛んでいき、子供たちを見ることなく死んでしまいます。このような神秘的な行為や技術を「学び取る」「適応する」という言葉で説明することはできません。これは彼らに、アッラーによって与えられたものなのです。[44]

　子供の鮭は、何年も海で過ごした後、自分の祖国である川に戻ります。ちょうど自分が生まれた小川が、大きな川に流れ込んでいる岸に戻るのです。

　彼をここまでぴったりと自分の故郷に連れてくる感情は誰が与えたものでしょうか。もしこの魚を捕まえて、同じ川に流れ込む別の小川に入れれば、すぐに誤った道にいることを理解し、すぐに引き返して元の川に戻り、そこから川の流れに逆行して小川へと泳いでいくのです。

44　参照: *İlim-Ahlâk-Îman*, 編集: M. Rahmi Balaban, p. 189.

ウナギの神秘を解くことはさらに困難です。人を驚かせてやまないこの被造物は、子を産む時には世界各地の湖や川から集まり、バーミューダ諸島[45]のそばの海溝で産み、そこで死にます。ヨーロッパのウナギたちも、何千マイルもの大洋を超えて同じ場所に来ます。はてもない水の中で生きているということの他は何も知らないと考えられているこの小さな子供たちは再び出発し、両親が来た同じ海岸に到達します。そこでとどまることなく、そこから両親が暮らしていた川、湖へと向かいます。これまでヨーロッパではアメリカのウナギが見つかったこともないし、アメリカの川でヨーロッパのウナギが見つかったこともありません。さらにアッラーは、彼らの旅の長さゆえに、ヨーロッパのウナギの寿命を1年ほどより長くされています。

これほど強い、方向づけの力の源は何でしょうか？[46]

動物たちに見られるこの驚くべき状態は、彼らがたまたま偶然に存在しているのではないこと、敵等に行動しているのではないこと、逆にこれら全てが彼らを創造した力が定めた計画

45 バーミューダ諸島は、大西洋の、アメリカの東側、カリブの北側に位置する島々である。

46 İlim-Ahlâk-Îman, 編集: M. Rahmi Balaban, p. 188-189.

やプログラムに従って実現していることを明白に示しているのです。

動物たちも崇高な意識によって方向づけられていることは、アッラーの存在、アッラーの崇高さと統治を明白に証拠づけているものです。アッラーはこれらの証拠を人間たちに示され、誰が真実を見出し、アッラーに従うのか、誰が、目の前の奇蹟の顕現にもかかわらず、正しさや真実に対してそれを見ないことに固執するのかを明らかにされます。クルアーンでは次のように語られています。

「本当にアッラーは、蚊または更に小さいものをも、比喩に挙げることを厭われない。信仰する者はそれが主から下された真理であることを知る。だが不信心者は、「アッラーは、この比喩で一体何を御望みだろう。」と言う。かれは、このように多くの者を迷うに任せ、また多くの者を（正しい道に）導かれる。かれは、主の掟に背く者の外は、（誰も）迷わさない」（雌牛章、第2章、第26節）

対で創造されていること

唯一性をご自身にのみ特有のものとされるアッラーは、全ての被造物を対として創造されました。クルアーンでは次のように語られています。

「またわれは、凡てのものを両性に創った。あなたがたは訓戒を受け入れるであろう（という配慮から）」（撒き散らす者章、第51章、第49節）

「かれは、あなたがたに見える柱もなしに諸天を創り、また地上には確りと山々を据えてあなたがたと共にぐらつかないようになされる。種々雑多な動物をそれに捲き散らされる。またわれは、天から雨を降らせ、いろいろな見事なものをそこに雌雄で生育させた」（ルクマーン章、だい31章、第10節）

科学がようやく近年になって確認することのできたこの両性での創造の本質を、私たちに14世紀前に下されたクルアーンによって告げられ、人々に学問の贈り物とされているのです。

人間の認識や快楽を超越したところで、あたかも花嫁の部屋のような繊細さや注意深さで織り上げられたこの世界は、微粒子、粒子、細胞、植物、動物、人間、そして物質、さらには原子の中の電子や陽子のような不思議な要素に至るまで、全ての事象の性質に応じた特別で奇妙な婚姻の決まりに従うものとされているのです。これも、私たちの為に壮大な熟考の地平線を拓きます。

アッラーの恵みへの熟考

アッラーの私たちへの最大の恵みは、これほどの被造物の中で「人間」として創造され、

ムスリムのいる環境で生まれさせてくださったことです。これよりも大きなものは、クルアーンの呼びかけの対象とされ、預言者ムハンマドのウンマであることです。

預言者ムハンマドは私たちの為に、クルアーンを行動へと反映させた実際的で完璧なお手本です。私たちに経典と英知を教え、私たちの内面世界を豊かなものとされます。この恵みの大きさを正しく理解することができれば、感謝のサジュダから頭をあげることができなくなるはずなのです。

アッラーの恵みはこれらに限られている訳ではありません。アッラーの多くの恵みが、私たちしもべの上にあらゆる瞬間に豊かな雨のように降り注いでいるのです。預言者ムハンマドは次のように語られています。

「アッラーは、『あなたは施しを行いなさい。私もあなたに施しを行う』と言われた。アッラーの宝庫は広大である。あらゆる被造物に与えられている糧は、アッラーの宝庫において何かを不足させることはない。アッラーは日夜、途切れることなく施しをなされる。天と地を創造された日からアッラーが恵まれたものを考えてみなさい。これらはアッラーの富において何かを不足させることはない」（ブハーリー、タフシール、11/2、タウヒード22）

恵みの権利は、それについて熟考すること、それを創造されたお方の存在、御力、恵みについて考察すること、アッラーの御力と恵みを考え、感謝することです。

ウマル・ビン・アブドゥルアジズは次のように語っています。

「アッラーをズィクルしつつ語り合うことはとても素晴らしい。アッラーの恵みについての熟考は、イバーダの中で最も徳のあるものの一つである」(Ebû Nuaym, Hilye, V, 314; İmâm Gazâlî, İhyâ, VI, 45)

恵みの否定、つまり恩知らずであることとは、恵みへの感謝を軽視し、それを乱暴し我欲の基準の中で、肉体の欲するままに費やし、無駄にすることです。この状態は人を、恵みを与えられるアッラーから遠ざけます。

感謝は三つの部分から成り立ちます。

1. 心の感謝－恵みを考えること

2. 舌の感謝－恵みに対し感謝し、賞賛すること

3. その他の器官の感謝－それにふさわしい形で恵みの対価を支払うこと

一方で、「恵みの感謝は、その同種のものでなされる」とも言われています。つまりアッラーが私たちに何を恵まれたのであれ、私たち

はそれを与えられていない人に恵み、施すことが必要となります。実際、クルアーンでは次のように語られています。

「そしてアッラーがあなたに善いものを与えられているように、あなたも善行をなし」（物語章、第28章、第77節）

あらゆる機会での熟考

ズィヤー・パシャは次のように語っています。

「一つの被造物において、1000の智の授業が読み取られる

この世界は何と素晴らしい学び舎であろうか」

すなわち、「万物というこの書のあらゆるページで、アッラーを知る為の智についての何千もの授業が読み取られる。この世界は熟考の海にひたり、恭順を得る為に何と素晴らしい学校であることか」

偉大なイスラーム学者であるスフヤーン・ビン・ウヤイナ師は、この状態の描写の為、ある詩人のものである次の言葉をしばしば繰り返していました。

「人は、熟考を行うのであれば、あらゆるものから教訓を得る」（イマーム・ガザーリー、イフヤー、VI, 45）

この為にアラブ人たちは

「教訓を得る為のものは非常に多い。教訓を得ている者は非常に少ない」と語ったのです。

あらゆる微粒子がアッラーを語る

人は、熟考を行いつつ、この世界という書物を読むことを学ぶことができれば、自分の周囲で見ている全ての微粒子が彼にアッラーの偉大さを示唆し、彼をマーリフェトゥッラーへと近づけます。フズーリーは何と素晴らしく語っていることでしょうか。

「もし学者は、神の啓示を認識できる能力を得るなら、万物における全ての微粒子がアッラーの命令を届けるジブラーイールとなる」

アッラーは次のように語られています。

「われは、あなたがたが見得るものにおいて誓い、またあなたがたが見得ないものにおいて誓う。本当にこれは、尊貴な使徒の言葉である」（真実章、第69章、第38－40節）

クルアーンにおける誓いの英知の一つが、誓いがかけられているものにおける教訓、効用、英知へと注意をひくことです。しもべがそ

の崇高さの示唆の中でその感情を深めることが望まれているのです。

従って目に見えるもの見えないもの全ての被造物は、アッラーの御力と統治の言葉なのです。そこには熟考し教訓を得るべき無数の英知が存在します。

微粒子ほどのプラタナスの種が、肥沃な土壌を媒介として巨大な木となり、その堂々とした姿を得るように、私たちにおける熟考や感覚はクルアーンの気候によって育まれ、力を得た結果、到達される神秘、英知、教訓もまた壮大なものとなるでしょう。

アッラーは次のように語られています。

「本当に天と地には、信者たちにとり種々の印がある。またあなたがた自身の創造、そしてかれが(地上に)撒き散らされた生きとし生けるものには、信心堅固な者に対し、種々の印がある。昼と夜との交替、またアッラーが天から下された糧、それによって死んでいる大地が甦ること、また風向きの変化にも、知性ある者への種々の印がある」(跪く時章、第45章、第3−5節)

クルアーンにおけるこの熟考の例によって心や神経を整えることはしもべを「篤信」の空気へと導きます。花々が空気や水、土や熱を必要としているように、熟考力において進歩する為には熟考が必要なのです。

アッラーはしもべたちが、考え、調べ、細やかな理解力を備えた品のある人となることを求めておられます。だから信者は、あらゆる機会を通し、イバーダの喜びの中で熟考を行うべきなのです。この状態の素晴らしい例を示したアフマド・ビン・ハワリーの妻、ラービアは次のように語っています。

「アザーンを聞くたびに、最後の審判の日を思い起こす」

「雪が降るのを見るたびに、人の行いが記されたノートが空中を舞うのを目にしているかのようになる」

「バッタの群れを見るたびに、復活を思い起こす」

伝承によると、ハリーファ・ハールン・ラシッドがある時ハマム（公衆浴場）に行きました。浴場で働く人が誤って、彼に沸き立つ熱湯をかけてしまいました。それに対しハリーファ・ハールンは熱せられた体の激しい痛みの中で外に出て、何千ものサダカを配り、こう言ったのでした。

「私は今日、ハマムの湯にすら耐えることができない。審判の日、地獄の旅人となれば、私はどうなるだろう」

預言者ムハンマドは、目にされた全てのものから教訓を得られ、アッラーに感謝と共に向

かわれていました。私たちも目にする全てのものにアッラーの崇高さを見出し、感情や思考の世界の為の精神的な糧を得る努力をするべきです。ムスリムは、太陽、月、大気、自らの創造、祖先、子供、つまり何を見たとしてもそれらを通して得られるアッラーのメッセージを心の目で読み取るべきです。どこから、どうやって来たのか、どのように生命を維持しているのか、姿形を誰が与えたのか、寿命を誰が定めたのか、どこに行こうとしているのか、この生命と万物が英知を伴わないものではないこと、何も無駄で無益に創造されたのではないこと、自分自身が勝手に放っておかれているのではないことを考え、常にアッラーの御力と崇高さを認識していなければならないのです。

アッラーはなぜ万物を創造されたのか

アッラーは次のように語られています。

「われは天と地、そしてその間にある凡てのものを、戯れに創ったのではない。われは、天地とその間の凡てのものを、只真理のために創った。だが、かれらの多くは理解しない」（煙霧章、第44章、第38－39節）

万物について熟考する人は、崇高なるアッラーの御望みを理解し、アッラーが全てをある目的の為に創造され、しもべたちへの奉仕の為

に供されていることを認識するべきです。それからそれに対し、アッラーが自らに何を求めておられるのかを考え、しもべとしての務めに励むべきです。なぜならアッラーのこの素晴らしいもてなしや恵みに対して無感覚でいたり、恩知らずでいたりすることは非常に痛ましい不注意さであるからです。

人は、与えられている全ての恵みに対して問われることを忘れてはいけません。アッラーは次のように語られています。

「その日あなたがたは、(現を抜かしていた)享楽に就いて、必ず問われるであろう」(蓄積章、第102章、第8節)

要するに、その中で暮らし、私たちが気付いているもしくは気付いていない全てのアッラーの恵みについて、アッラーに無限の感謝をし、しもべとして奉仕する義務を負っているのです。この義務を意識し、認識し、その実行の為に努力する賢明な人々は何と幸福なことでしょうか。

人間における熟考

考えて見るならば、私たちが踏み、通り過ぎている地面は、今日までにこの世に生まれた何十億もの人々の、土壌と化した死体で満たされています。あたかも、何重にも重なった何十億もの影のようです。明日には私たちも、この濃密な影の中に染みとおっていくでしょう。それから無限の生命と永遠への旅が始まります。だから少し立ち止まって館あげてみましょう。一瞬を永遠と取り換えることは、どのような理性の産物でしょうか。

人間における熟考

その創造における奇蹟的な細やかさ

アッラーは次のように語っておられます。

وَفِي الْاَرْضِ اٰيَاتٌ لِلْمُوقِنِينَۙ.
وَفٖٓي اَنْفُسِكُمْۜ اَفَلَا تُبْصِرُونَ

「またあなたがた自身の中にもある。それでもあなたがたは見ようとしないのか。天には、あなたがたへの糧と、あなたがたに約束されたものがある」（撒き散らす者章、第51章、第20－21節）

崇高なるアッラーは、人間をこの上なく壮大な形で創造されました。今日の高度な科学や技術のおかげで無数の発見がなされているにも関わらず、そこにおける驚異的な神秘と英知の解明には至っていません。

アッラーは次のように語られています。

「人間よ、何があなたを恵み深い主から惑わせ（背かせ）たのか。かれはあなたを創造し、形を与

え、（均整のとれた体に）整え、かれの御心の儘に、形態をあなたに与えられた御方である」（裂ける章、第82章、第6－8節）

アッラーはここで、人間の過去を思い起こさせ、その創造について熟考することを求めておられます。この上なく独特なその創造により、被造物の中で最も完全な存在とされた人間は、目にされた時には不快な気持ちになるような一滴の液体から創造されているのです。[47]

医学がようやく見出したこの創造の諸段階について、14世紀前にクルアーンでは次のように描写されています。[48]

---

47 参照:眉をひそめて章、第80章、第17-22節；ビザンチン章、第30章、第20節； 復活章、第75章、第36-38節；送られるもの章、第77章、第、 20-22節；ヤー・スイーン章、第36章、第77節； 人間章、第76章、第2節

48 1400年にわたってクルアーンは、科学的な発見によって確認がなされてきました。誇り高い預言者によって人類に提供された一つの書物が、万物において生じるアッラーの法やこれらの反映である事象の何千もに言及しているにもかかわらず、どの発見もそれを反論することができていないということもそれが啓示によるものであることを示す明白な証拠の一つです。つまり、クルアーンは常に人間の知識の前を生き、全ての発見がそれを確認しているのです。イスラームに対して否定的な条件付けを持っていない一部の西洋の思想家が、ただ今日において得られた知識により、クルアーンにおいて上記の例のように1400年前に触れられていることを前にし、驚嘆、感嘆し、導きを得たのです。その一人であるフランス出身の発生学の学者であるMaurice Bucaille教授は、イスラームによって誉れを得ました。この他の例もあ

「われは泥の精髄から人間を創った。次に、われはかれを精液の一滴として、堅固な住みかに納めた。それからわれは、その精滴を一つの血の塊に創り、次にその塊から肉塊を創り、次いでその肉塊から骨を創り、次に肉でその骨を覆い、それからかれを外の生命体に創り上げた。ああ、何と素晴しいアッラー、最も優れた創造者であられる。それから後、あなたがたは必ず死ぬ。それから復活の日に、甦らされるのである」（信者たち章、第23章、第12－16節）

人の創造と同様、その器官も、その状態という言葉で人を熟考へと招きます。つまり、目、耳、手、足、脳、心臓、つまり私たちの肉体全ては広大な熟考の舞台として、あたかも次のように呼びかけています。

「アッラーが肉、神経、血管から創造された諸器官をどのように整えられたか、それらを互いとの均衡の中で働く素晴らしいシステムとしてどのように創造されたのか、教訓をえるまなざしで見て見なさい！頭が球形に創造され、そこに耳、目、鼻、口やその他の穴が設けられている。手や足は長く創造され、その先端を指

る一方で、この一つの例えも非常に重要です。さらにこの言及した人物には、トルコ語にも翻訳された作品があり、それを読むことをこの機会にお勧めします。Müsbet İlim Yönünden Tevrat, İncil ve Kur'ân, 翻訳： Mehmet Ali Sönmez, Ankara, 1998; Mûsâ ve Firavun, 翻訳：. Ayşe Meral, İstanbul, 2002

に、指をも関節に分けられている。心臓、胃、肝臓、脾臓、腸、子宮といった内臓は最も適した形で創造されている。これらのどれも不必要ではなく、互いに無関係でもない。逆に、それぞれにはとても重要な働きがあり、全てがその任務に最も適した形で創造されている」

それからこれらの器官は、それぞれの部分に分かれています。例えば目には層があり、それぞれの層には特有の働きと形があります。もしその一つが損なわれ、もしくはその特性の一つが失われれば、目は見えなくなります。

骨

骨についての熟考も、驚くべきものとなります。アッラーはそれらを、細く弱い一滴の自ら、どのようにこれほど固く、強く創造されたのでしょうか。それからそれらを、肉体という建物を維持する為のいかにバランスのとれた強い骨組みとされたのでしょうか。そしてそれらを、異なる分量や基準のもと、どのように形づけられ、定められたのでしょうか。一部は小さく、一部は大きく、一部は長く、一部は丸く、一部は中身があり、一部は空洞がなく、一部は幅広く、一部は細いのです。

人は1ピースの骨でできているのではありません。骨は、関節や動く接合部により、互いに

結びついています。それら一つ一つに、その動きに応じた形状が与えられています。この関節の潤滑機構は実に素晴らしく、これまで技術の中で用いられてきた3種類の潤滑タイプによっても完全には説き明かされていません。

ここで、こう考えてみましょう。私たちの肉愛の関節のどれかが動かなければ、生活にどれほどの支障が生じることでしょうか。

アッラーは私たちの肉体で骨を一つ余分に創造されていれば、その骨は人間にとって、抜いて取り除かなければいけない苦しみの源、苦痛の要因となっていたでしょう。

その反対に何かの骨が不足していれば、その不足を補う為にどれほど努力することが必要となったでしょう。たいていの場合、それを補うことは不可能であったでしょう。

私たちの手の親指を使えなかったらと考えてみましょう。私たちの作業はどれほど滞ったことでしょうか。この状況は実際に考えてみるべき点なのです。

歯のうちの一部は平らで、すりつぶすのに適しています。また一部は尖り、鋭く、噛みちぎり、分割するのに適しています。

アッラーは骨を動かす為に、筋肉を創造されました。筋肉の量や形状は、その場所やニーズにより変わります。目にも多くの筋肉があり

ます。この一つが病んでしまうと、目の健康は損なわれます。

これら全ては目に見える不思議です。さらに、五感によって認識される特性、すなわち性格、性質、人格、良心といった精神的なものがあり、それらの特質はさらに崇高なものです。

人間の肉体における不思議は、アッラーの一滴の水における芸術です。人は美しい絵を見た時、画家の熟練さ、芸術性、そして知性に驚きを感じます。それを、その目で誇張させます。しかし画家が行ったことは、無から何かを創造させることではなく、存在している紙、絵筆、絵の具といったオブジェクトを一定の配置のもとで一つに集め、アッラーが創造された世界から得た印象の結果を反映させているだけなのです。

だから、画家の作品をすら注意深く見て驚いているのなら、絶対的な芸術家であるアッラーが一滴の水から創造された比類なき創造の美や芸術の奇蹟である「人間」という事象に対し、どのように驚異を感じるべきなのか、熟考する必要はないでしょうか。

諸器官

耳の形状、鼻の効果、舌で話ができること、それぞれの文字の音がそれぞれ異なって発

音されること、口に歯があること、歯の、糸に通された真珠の粒のような整ったデザイン、声帯の繊細な構造、それぞれの人の声が異なっていること、目が見えない人が人をその声で認識する力…

髪、髭、眉、まつ毛…胃、肝臓、腎臓、静脈…全てについて十分に熟考することが必要です。それぞれがどれほど高等な知識や英知によって創造され、互いとの均衡のとれた形でその役割を果たしていることでしょう。

私たちの腎臓は、小さな肉片です。しかし、有毒なものと無毒なものとを区別しています。有毒なものであれば、外に送りだします。無毒であれば、再び肉体に戻ります。腎臓には理性があるのでしょうか。コンピューターがあるのでしょうか。分析設備があるのでしょうか。この小さな器官が病気になると、人がどれほどの苦痛を受けるのか、皆が知っています。巨大な機械は、この50グラムの腎臓が行っている役割を完全に実行することができません。

私たちの手を見てみましょう。望むものに伸ばすことができるよう、長い形で創造されています。内側は平らで、5つの指に分かれ、全ての指には3つの部分があります。4本の指が片側に、もう一本の指は反対側にあります。親指は全ての指を助けます。もし、過去と未来の人類が全て集まり、繊細な考えで、親指を既存の形

よりも美しいものにしようとしたとしても、それはできないでしょう。

人は、諸器官のうち最も価値がないように見える爪ですら、それを失えば、肉体のどこかがかゆくなった時には被造物のうちでもっとも無力なものとなるでしょう。他の人に助けを求めようとすれば、彼は長々とした説明を受け、何度も試行錯誤してから、かゆい場所をちゃんと見つけることができるでしょう。しかし人の手は、かゆい場所をすぐに見つけ、そこに届く形で創造されています。さらに、眠っている時、ぼんやりしている時ですら、その場所をすぐに見つけることができます。

さらに、腕、手、指が行っている最も簡単な動作すら、そもそも、最も複雑で高度な工学的計算を必要とするものです。実際、今日の進んだ技術の生み出した機械の為に作られたロボットの手、腕の動きにおいて到達されているレベルは、いまだに人間の器官と比較するべくもないほど遅れていることを考えるなら、アッラーが人間の肉体で示されている無限の智と力に驚嘆しないことは不可能なのです。

詩人は、全ての被造物と同様、人間の上で示されているアッラーの芸術も、見る目、聞く耳に、その状態という言葉で常に絶対的な創造主アッラーを宣言している、ということを何と素晴らしく表現していることでしょうか。

「私の存在は、私の創造主の存在の最も美しい証拠である。他にどのようなしっかりした証拠があろうとも、この証拠で十分であり、他の証拠を必要とはしない」（シナーシ）

アッラーの慈悲と慈愛

アッラーの慈愛と慈悲をみてください。歯が生えてくるのは、生まれてから2年後にされています。なぜなら赤ちゃんは2年間、母乳以外のもので、完全な意味で育まれることはないからです。この観点から、歯を必要としていないのです。逆にこの時期に歯があれば、授乳する母親にとって別の苦しみの要因となっていたことでしょう、

子供たちが大きくなれば、肉体の食糧へのニーズも高まり、母乳だけではもはや十分ではなくなります。今度はしっかりと食べる必要性が出てきます。食べ物を噛み、飲み込むことが必要となります。この観点から、子供における歯の形成は早すぎることも遅すぎることもないのです。ちょうど、必要になった時期に歯が生え始めます。早くに出ていれば、授乳の妨げとなっていたでしょう。崇高なアッラーがあの柔らかい歯肉から、さらにちょうどふさわしい時期に、あの固い骨を出現させられることも、まさに驚嘆すべきみわざの一つです。

それからアッラーは両親に、子供の世話をするために特別な慈悲の感情を与えられました。全てのみわざにおいて英知の持ち主であられるアッラーが、両親の心に慈悲を与えられていなければ、子育ての苦労に誰が忍耐できたでしょうか。

人の肉体は、素晴らしい熟考の舞台です。崇高な創造主の偉大さの、最も明らかな証人です。しかしこのことに注意を示さない人は、常に自我の欲求で忙しくしています。しかし、自我に基づいた行為においては、動物ですら人間に似たようなレベルなのです。人を動物から区別するもの、それを被造物の中で最も誉れあるものとするものは、天と地における天使を見ること、万物、そして人間における神の芸術の素晴らしさを語り合うことで得られる、智です。なぜならこの智が深まるにつれてしもべは、偉大な天使たちのレベルに上昇するからです。さらにはより高くなります。預言者たちや誠実な者たちの中で、アッラーに近しい状態で復活します。この名誉、高潔さは、動物のように、さらには動物よりも逸脱した状態で欲望の虜となって生きる不注意な人には、あてはまるものではないのです。[49]

49 参照：İmâm Gazâlî, İhyâ, VI, 58-62.

人の顔と指先

ある時ある人が、聖ウマルのそばで、

「私はこのチェスに感嘆する。チェスの板の長さや幅は1アルシュに過ぎないが、人がそこで100万回ゲームをすれば、1回のゲームは必ず他のものとは異なるものとなる。どのゲームも他のものには似ない」と言いました。

聖ウマルは彼に、次のように言いました。

「それ以上にもっと驚嘆に値するものがある。人の顔の長さや幅は1カルシュに過ぎない。眉、目、鼻、口といった器官の位置も決して変化しない。それにもかかわらず、東西、完全に同じ顔をした人はいない。この小さな一片の皮の中に、限りのない違いを示すアッラーの御力、偉大さ、英知とは何と崇高なものであろうか」（Râzî, *Tefsîr,* IV, 179-180［雌牛章、第2章、第164節］）

詩人はこの英知について次のように表現しています。

「この顔を描いた、芸術的な画家は誰か？
鏡を見て、問いかける者はいないのか？」

（ネジップ・ファーズル）

人の指紋はさらに素晴らしいものです。今日、暗号として指紋によって開かれるコンピューターやドアが用いられています。なぜなら全ての人の指紋は異なっているからです。さらに

は、人のそれぞれの指の指紋は、他の指のものとは異なっています。

指紋が、ちょうどシリーズ番号や登録番号のように全ての人ごとに異なり、固有の形状を持つことは19世紀後半に発見され、特に治安や法的な識別において使用されはじめました。今日では指紋学と呼ばれる、指紋を研究する学問分野すら存在しています。

人にこの特性を与えられたアッラーは、1400年前に下されたクルアーンで、この神聖な奇蹟を指摘されています。最後の審判の日、人の肉体が復活させられる際には、指紋すら以前のままの状態で整えられることを告げておられるのです。クルアーンでは次のように語られています。

「人間は、われがかれの骨を集められないと考えるのか。いや、われはかれの指先（の骨）まで揃えることが出来るのである」（復活章、第75章、第3－4節）

このように、常にクルアーンは先を行き、人間の知識はそれを認めながら、後をついていくのです。

ちょうど指紋のように、人の目もそれぞれに異なっています。暗号の代わりに、持ち主の目を承認して作動させる機械、コンピュータ

一、扉が、日常的な生活に入り、広がりつつあります。

1センチ平方にすら満たない小さな部分に、無数の違いを創造されたアッラーは何と崇高であられることでしょうか。

遺伝子の奇蹟

遺伝学においてなされる新たな発見も、全ての人が固有に所持している暗号がもう一つあることを示しています。

さらにこの、遺伝子とよばれるものは非常に小さく、地上における全ての生命を生じさせている遺伝子が全て集められたとしても、指ぬきほどにもならないのです。

顕微鏡ですら見ることのできないこの遺伝子は、生命を持つ細胞の全てに存在し、全ての人、動物、植物にその個性を与えます。一つの指ぬきは、60億を超える人口の全てのそれぞれの個性をそこに収められないほど小さく見えるものの、この点における真実には疑いの余地はないのです。

では、遺伝子と呼ばれるこれは、どうやって、無数の生命体の特性の中に秘められているのでしょうか。どのように、信じられない程小さな場所で、それぞれの個人の心理に至るまでの個性を維持できるのでしょうか。

顕微鏡ですら見ることのできないほんの小さな遺伝子の中に閉じ込められた数百万の原子が、このように地上の全ての生命を絶対的に管理できるという状態は、ただ英知の持ち主である創造主が得ることのできる深い知識と熟練の産物であり、他の理論の余地はないのです。[50]

実際、この事実を示唆し、アッラーは次のように語られています。

「あなたがたの主が、アーダムの子孫の腰からかれらの子孫を取り出され、かれらを自らの証人となされた時を思え。（その時かれは仰せられた。）「われは、あなたがたの主ではないか。」かれらは申し上げた。「はい、わたしたちは証言いたします。」これは復活の日にあなたがたに、「わたしたちは、このことを本当に注意しませんでした。」と言わせないためである」（高壁章、第7章、第172節）

私たちの時代になってようやく発見されたこの事柄や、これに類似するアッラーの御力を芸術の顕現は、人々の知性を無力にさせます。この為に、まだ19世紀にズィヤー・パシャは次のような英知に満ちた連句を読んでいるのです。

「その芸術を前に、人々が驚嘆し、その御力によって最も優れた学者をも無力な状態とされるアッラーを賛美する」

50 参照： *İlim-Ahlâk-Îman*, 編集：M. Rahmi Balaban, p. 189-190.

肉体という工場を動かすのは誰か？

人は自らを始めとして、天と地の生物の全てがあらゆる形でアッラーを必要としていることを目にしています。最も単純なものとして、次のことを目にしています。

私たちの肉体の動きのほとんど全ては、私たちの意識外で統治されています。例えば心臓の鼓動、呼吸、その他の全ての器官や細胞の内部での活動や、それらの間でのやりとり、相互援助もどうです。人の肉体において、アッラーのプログラムの中で素晴らしいバランスを保って働く器官、もしくはただ一つの組織細胞の中の何百種類もの生化学反応の制御や管理が、ただ一日だけ私たちに任されたとすれば、数分ですら耐えることはできず、どれだけの支障を及ぼしていたことでしょうか。[51]

教訓深いこととして、一方では10トンもの象が－アッラーがおとなしくさせてくださったことにより－10歳の子供に従っているのを目にします。また一方では、－人の無力さの表れとして－裸眼では見えない程小さなウイルスが、多くの強い肉体を倒してきたことも目にしているのです。

51 参照：Şâkir Kocabaş, *Kur'ân'da Yaratılış*, İstanbul 2004, p. 115.

つまり人は、アッラーが与えられた力、強さを決して我欲のものとしてはいけないのです。決して傲慢になってはいけず、真の持ち主を忘れてはいけないし、常に感謝の気持ちを持っているべきです。そしてアッラーの御力を前にして、自らが埃の細胞ほどですらないことを理解し、アッラーに庇護を求めるべきなのです。

つまり私たちはここで、人において示される無数のアッラーの英知と御力の顕現の中のいくつかの例について言及してきました。人について考えるなら、アッラーがそれにどれだけの神秘と英知を置かれているかを目にすることができます。人の全ての細胞について1冊の書物を書くことすらできるでしょう。

人はなぜ創造されたのか?

最も美しい形で創造され、完成させられ、アッラーの多くの恵みを受け得いる人間の、この世界での真の役割とは何でしょうか。人間には何が待たれているのでしょうか。その責任とは何でしょうか。

アッラーは次のように語られています。

「あなたがたは、われが戯れにあなたがたを創ったとでも考えていたのか。またあなたがたは、

われに帰されないと考えていたのか」（信者たち章、第23章、第115節）

「ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため」（撒き散らす者章、第51章、第56節）

人は自分の肉体の細胞一つ一つの為に何千回も感謝するべきなのです。これも、イバーダ、サダカ、良い行い、善行という形で示すべきです。なぜなら全ての恵みには対価があり、また全ての恵みは感謝を必要とするからです。

預言者ムハンマドは次のように語られています。

「人のそれぞれの関節の為に、毎日一つのサダカが必要である。乗り物に乗ろうとしている人を助けて乗せること、あるいはその荷物を乗り物に載せることもサダカである。良い言葉はサダカである。礼拝の為、モスクに行く際の一歩一歩もサダカである。道を示すこともサダカである」（ブハーリー、ジハード，72. 参照. ムスリム、ザカート56）

「毎日、それぞれの関節や骨の為に一つずつのサダカが必要である。全ての賛美はサダカであり、全ての感謝もサダカであり、タフリール（ラーイラーハ　イッラッラーと唱えること）もサダカであり、タクビールもサダカであり、善を勧めることもサダカであり、悪を避けさせることもサダカである。しもべが午前中に行う2ラカートの礼拝はこれら全て

に対応する」（ムスリム、ムサーフィリーン、84、ザカート56、参照：ブハーリー、スルフ11、ジハード、72, 128）

別の伝承ではそれに、「二人の人の間で公正に判断すること」と、「通行する人を苦しめるものを道から取り除くこと」も加えられています。（参照：ブハーリー、スルフ、11、ジハード、72、128、ムスリム、ザカート、56）

つまり、この世界ではアッラー良いしもべとなるべく努力することが必要なのです。人生を、イバーダ、服従、善、善行に満ちた形で送り、来世に最善の形で備えるべきなのです。

死の謎を解くこと

ムハンマド・ビン・カーバ・アル－クラズィーは次のように語っています。

「ある時、ウマル・ビン・アブドゥルアジズにマディーナで出会いました。その時彼は、ハンサムで若々しい若者で、豊かさの中で暮らしていました。その後、カリフになった時に私は彼のそばに行き、許可を貰って中に入りました。彼を見て私は驚きました。そしてその顔をびっくりして見つめていました。彼は私に、

『ムハンマドよ、なぜそう驚いて見ているのだ』と言いました。

『信者たちを統治する者よ、あなたは顔色が悪いし、体もくたびれている。髪は白くなり、抜けている！あなたをこう言う状態で見て、驚きを隠せなかったのです』と私は言いました。

それに対しウマル・ビン・アブドゥルアジズは私にこう言いました。

『ムハンマドよ、私を墓場において3日後に見れば、あなたはどれほど驚くことだろう。その時には蟻が目を取り出し、目が頬の方に流れ、口や鼻は血や膿で満たされているだろう。その時には私のことを全く認識できないだろうし、さらに驚くことだろう。今はそういうことはおいておき、私にイブン・アッバースがアッラーの使徒から伝承しているハディースを再度語りなさい』」（ハーキム，IV，300/7706）

人は何よりもまず、自らの先行きを熟考するべきです。死がどのようなものとなるか、墓での生活で何に直面するのか、来世ではどのような地位にあるのか。人間にとって最も重要な未知のものごととはこれらなのです。つまり、ゆりかごから棺まで続く冒険の秘密、この世界にやってきたこと、ここから来世に行くことの英知を把握することです。人はこの謎を説き、永遠の救いに至ることができるよう、生涯を通して努力するべきです。

人はまず、自らのはかなさについて熟考しなければなりません。なぜなら次のことは、絶対的な真実であるからです。

「地上にある万物は消滅する」（慈悲あまねくお方章、第55章、第26節）

ある日、次の日、というものが存在しない日が来るのです。その日は私たちすべてにとって未知の日です。アッラーは次のように語られています。

「そして実際に死の昏睡が訪れる。これはあなたが避けてきたもの。そしてラッパが吹かれる。これはあの約束された日である」（カーフ章、第50章、第19－20節）

皆この世界に、ある扉、すなわち母の胎内から入ります。我欲的、そして精神的な行為や感覚に満ちた障害物走の場であるこの世界の生を生きます。この狭い通路を抜けた後、最後には墓の扉から永遠の世界に移るのです。

そう、この世界は、二つの入り口がある宿舎のようです。聖アーダム以来、今日まで、このような形で無数の人々で満たされ、そしてカラになってきました。彼らは今どこにいるのでしょうか。一定の時間が経つと、私たちはどこにいるのでしょうか。わかりません…しかし確かなことは、迫害者にも、虐げられた人にも、しもべにも掟に背くものにも死は訪れ、今は

皆、永遠の生の始まりである審判の日を待っているのです。

　考えて見るならば、私たちが踏み、通り過ぎている地面は、今日までにこの世に生まれた何十億もの人々の、土壌と化した死体で満たされています。あたかも、何重にも重なった何十億もの影のようです。明日には私たちも、この濃密な影の中に染みとおっていくでしょう。それから無限の生命と永遠への旅が始まります。だから少し立ち止まって館あげてみましょう。一瞬を永遠と取り換えることは、どのような理性の産物でしょうか。

　クルアーンでアッラーは、

　「かれらがそれを見る日、（墓の中に）滞留していたのは、一夕か一朝に過ぎなかったように思うであろう」（引き離す者章、第79章、第46節）と語られ、現世での生が永遠での生と比べればいかに短いかを教えておられます。

　詩人もこの真実を描写し、この世界の終りを次のように表現しています。

　「細やかなこの寿命は、瞬きをするかのよう

　私たちが聞かぬ間に、鳥が来て、飛び去っていったかのよう」（アーシュク・パシャ）

だから、この短い寿命の資本を、決して終わらないものであるかのように粗暴に費やすことよりもひどい愚かさは他にあるでしょうか？

死を熟考すること

預言者ムハンマドは、死を何度も思い起こすことを命じられ、私たちが現世に没頭することを望まれませんでした。[52]「永遠の地を信じているのに関わらず、ただ偽りの世界の為に働き、努力する人々には、いかに驚いたとしても行き過ぎではない」と言われました。（クダーイ、シハーブルーアフバル、383）

人は、世界とのつながりが切られること、よいこと、悪いこと何を行ったとしても、それらと共に残されること、行いの対価が不足なく与えられることを考えると、罪から遠ざかり、善行により傾斜します。つまり、死を熟考することは、意識を持ち、生き方を点検し、来世を改善する要因となります。実際、聖ハディースでは次のように語られています。

「死を何度も思い起こしなさい。なぜなら死を思い起こすことは、（人を）罪から清め、現世に対し無欲とする。もし、豊かである時に死を考えるなら、あなたを豊かであることの災いから守る。貧しい時に熟考するのであれば、

52 参照：Tirmizî, Zühd, 4; Nesâî, Cenâiz, 3.

その暮らしに満足できるようになる」（スユーティ、ジャミーウッサウル、1，47）

また預言者ムハンマドは、死を熟考することを奨励され、次のように語られています。

「私はあなた方に墓地の訪問を禁じていた。しかしもはや、訪問を行うことができる。なぜなら墓地の訪問はあなた方に来世を思い起こさせるからである」（ティルミズィー、ジャナーイズ、60、ムスリム、ジャナーイズ、106）

「死と、死後、体や骨が腐ることを思い起こしなさい。来世の生を求めるものは、現世での生の装飾を放棄する」（ティルミズィー、クヤーマ、24）

「誰であれ、死を何度も思い起こすのであれば、アッラーはその人を愛される」（ヘイセミー、X，325）

あるサハーバが預言者ムハンマドに、

「信者のうち、最も利口なのは誰ですか」と尋ねました。預言者ムハンマドは、

「死を最も多く思い起こし、その後の為に立派に備えを行う人々です。真の利口な者とは彼らです」と答えられました。（イブン・マジャ、ズフド、31）

サハーバたちの死への熟考

アブー・バクルはあるフトバで、次のように語っています。

「皆が驚嘆していた美しい顔の人々はどこにいるのか。若者時代、うぬぼれを持っていた勇者たちはどこにいるのか。壮大な街を建設し、その周囲を高い城壁で囲った支配者たちはどこにいるのか。戦いの場において敗北を知らなかった勇者たちはどこにいるのか。時間が皆を腐らせ、土に帰した。皆、墓場の闇の中に埋められ、去って行った。急ぎなさい、急ぎなさい！手遅れになる前に理性を持ち、死の向こうの為に少しでも早く備えをしなさい。あなた方自身を救いなさい、あなた方自身を救いなさい！」(İbnü'l-Cevzî, Zemmü'l-Hevâ, s. 668; Komisyon, Nadratü'n-Naîm, III, 960)

聖アーイシャは次のように語っています。

「ある時私は、地獄を思い起こして泣いていました。アッラーの使徒は私をその状態で見て、

『アーイシャ、どうしたのだ』と言われました。

『地獄を思い起こして泣いていました。あなた方預言者たちは審判の日に、家族を思い起こされるのですか？」と私は言いました。

預言者ムハンマドは次のように答えられました。

『三つの場所があり、そこでは誰も誰かを思い起こしたりはしない。

1. 秤で善行が量られる時、秤が重くなるか軽くなるかを知るまで。

2. 「ここに(来て)、あなたがたはわたしの(行状)記を読め」(真実章第19節) と言われ、行為を記したノートが与えられる時、ノートが右側から与えられるのか、左側から与えられるのかを知るまで。

3. 地獄の上にスラート橋が築かれた時。橋の両側には多くのフックや固いとげがある。アッラーはこのフックを通して、被造物のうち望まれるものをとらえ、地獄に投げ入れられる。人はこのフックから逃れられるかどうかを知るまで、誰のことも考えられない』(ハーキム、IV, 622/8722)

サハーバの一人であるウサイド・ビン・フダイルは、徳を備えた人でした。しばしば次のように語っていました。

「もし常に、次の3つの状態のうちどれかであり続けることができれば、疑いもなく天国に行く者となれていたことだろう。

1．クルアーンを読むか、読まれているクルアーンを聞いている時の精神状態であることができれば

2．預言者ムハンマドの説話を聞いた時に包まれる魂の状態を維持することができれば

3．死者を見送った際に感じた思いを維持することができれば。そう、葬儀に参加する度に、自分自身に、『あなたが死んだ時の状態はどのようになるだろう。あなたに何が行われるだろう、最後にはどこに送られるのだろうか』と考えるのだ」（参照：Ahmed, IV, 351; Hâkim, III, 326/5260）

死の熟考の効果

「人々への忠言として、死はそれ自体で十分である」[53]というハディースでも示されているように、考え、教訓を得る人にとって死には非常に多くの学ぶべき事柄があります。

この世界の一過性の財産、地位、立場、そして我執的にすばらしいものを過度に愛すること、それらに心を結びつけることは精神的な病の最たるものです。ねたみ、傲慢、偽善、そして利己的な野心も、現世への愛情の産物です。この種の悪い性質や精神的な病から救われる為

53 Heysemî, Mecmau’z-Zevâid, Beyrut 1988, X, 308.

の最も効果のある薬の一つが、死、墓、来世の状況を熟考することです。

神秘主義の真の目的も、我欲に打ち勝ち、その自己中心さから救われ、現世への愛情を心から取り除くことです。従って死を熟考することは、多くの宗派においてこの目的の為に取られる一つの手段となっています。修行者は日々のズィクルを行う際、5分から10分、死について考えます。

オスマン時代、墓地が町の内部に、道のそばに、そしてモスクの中庭に造られていたことは、死を考えることを容易とする為でした。この状況を目にした西洋の旅人は、

「トルコ人は死者たちと共に生きている」と言わずにはいられなかったのでした。

死をしばしば思い起こし、自我の欲望を克服し、来世に備えることは、人を最期の息の際に心を焼き尽くすような後悔から守ります。アッラーは死の瞬間に、夢から醒めたように我に返る人々が、深い後悔と共に次のように言うことを伝えておられます。

「「主よ、何故あなたは暫くの間の猶予を与えられないのですか。そうすればわたしは喜捨〔サダカ〕をして、善い行いの者になりますのに。」と言う」（偽信者章、第63章、第10節）

この痛ましい後悔や絶望を味わわない為に、適切な時に目覚め、機会を逃すことなく永遠である来世の生の為に備えることが必要なのです。

ハサヌ・バスリ師は、ある葬儀に参加しました。埋葬が終わってから、そばにいた人に、

「この死んだ人は、今、この世界に戻ってきて、誠実な行為やズィクルを増やすこと、罪をより懺悔することを考えているだろうか」と言いました。そばにいた人も、

「ええ、もちろんそう考えているでしょう」と言いました。

それに対してハサヌ・バスリ師は次のように言われました。

「では私たちはなぜ、彼のように考えないのだろうか」(İbnü'l-Cevzî, el-Hasenü'l-Basrî)

死の厳しさに備えること

ハサヌ・バスリ師は次のように語っています。

「二つの日、二つの夜があり、被造物たちはそのようなものを決して見たことも聞いたこともない。夜のうち一つは、墓の人々と共に過ごす夜である。それまであなたは彼らと過ごしたことはない。二つめは、翌朝が最後の審判と

なる夜であり、もはや夜が来ることのない一日が始まるのである。

最も恐ろしい二つの日のうち一つめは、アッラーから使いが来て、アッラーがあなたに満足されたか否かを、あなたが天国と地獄どちらに行くのかを教える日である。二つめの日は、行為を示したノートが右もしくは左から渡され、アッラーの御前に出される日である」（参照： İbnü'l-Cevzî, ez-Zehrü'l-Fâtih, s. 25; Ebü'l-Ferec Abdurrahmân, Ehvâlü'l-Kubûr, p. 154）

人にとって最大の試練であり、最も恐ろしい災いは、死です。しかしそれ以上に悪いことは、死について知らずに生きること、それを意識から遠ざけること、アッラーにふさわしい行いをできないことです。知性を持つ人に必要なことは、死が来る前にそれに備え、自我を悪い習慣から清めることです。

シャイフ・サーディーは次のように語っています。

「兄弟よ、あなたは最後には土になるのだ。土になる前に、土のように謙虚になるようにしなさい」

聖ウマルも次のように語っています。

「裁きを受ける前に、自らを点検しなさい。最大の出会いの日（アッラーの御前に出て、アッラーの御目にかかる日）の為に、（誠

実で立派な行為によって）自らを飾りなさい。疑いもなく、現世にいる間に自我を点検する人にとって、最後の審判の日には裁きが軽くなるであろう」（ティルミズィー、クヤーマ、25/2459）

私たちのはかない肉体が墓に埋められる時、子供や財産は後に残されます。私たちはただ、私たちの行為と共に土の胸に抱かれることになる。そこで、白い布と共に私たちの肉体も土となる。私たちと共に、ただ行為を記したノートだけが残る」

イマーム・ガザーリー師も次のように語っています。

「死の瞬間、人と共にただ三つの特性が残る。

1. 心の清らかさ。つまり、心が現世の汚れから清められていること。アッラーは次のように語られている。

قَدْ اَفْلَحَ مَنْ زَكّٰيهَا

『本当にそれ（魂）を清める者は成功し』（太陽章、第91章、第9節）

2. アッラーのズィクルに精通していること。アッラーは次のように語られている。

『「これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがないのである。」』（雷電章、第13章、第28節）

3. アッラーへの愛情をはぐくむこと。アッラーは次のように語られている。

قُلْ اِنْ كُنْتُمْ تُحِبُّونَ اللّٰهَ فَاتَّبِعُونِي يُحْبِبْكُمُ اللّٰهُ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ وَاللّٰهُ غَفُورٌ رَحِيمٌ

『言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、あなたがたの罪を赦される。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。」』（イムラーン家章、第3章、第31節）

心の清らかさは、ただマーリファ、すなわちアッラーを心で知ることによって可能となる。マーリファも、常にズィクルと熟考を行うことの結果として獲得される。そう、この三つの特性が救いを行うものである」

もし人が、「明日」の為に必要な備えを行うことができれば、彼の死は良いものとなり始めます。もはや彼は、死を恐れることはありません。

実際、ビシュル・ビン・ハーリス師は次のように語っています。

「アッラーに従う人にとって、墓場は何と素晴らしい場であることか」[54]

聖メヴラーナも次のように語っています。

「息子よ、それぞれの人の死は、それぞれの色を持つ。人をアッラーに出会わせることを考えず、死を憎悪する者、死に敵対する者の死は、恐ろしい敵のように見える。死の親友となる者の前には、それは親友のように姿を現す。

死を恐れ、逃げる者よ。物事の真実、事実を求めているのなら、あなたは本当は死を恐れているのではない。自分自身を恐れているのだ。

なぜなら、死の鏡で見ておびえているものは、死の前線ではなく、あなた自身の醜い顔なのだ。あなたの魂の一部に似ている。死は、木の葉である。全ての葉は、木の種類によるものとなる」

つまり、私たちの死と、審判の日まで続く墓場での生は、現世における私たちの状態や行為によって形作られるのです。

この為アッラーは、クルアーンの多くの章句で現世と来世の様子を私たちに説き明かされているのです。現世が終焉すること、いつの日

54 Komisyon, *Nadratü'n-Naîm*, III, 963; Ebu'l-Ferec Abdurra - man, *Ehvâlü'l-Kubûr*, s. 155.

か急展開を迎え、無となることを考え、その偽りや欺瞞から遠ざかることを求めておられるのです。来世が日々私たちに近づいていること、永遠に続くことを熟考し、それを求めることを命じておられます。

この為、しもべは死ぬ前に全ての罪を、深い悔悟と共に断念すること、アッラーの命令や禁止事項に従うという点での不足を補うことが必要です。つまり、舌によって教えの否定、中傷、侮辱、もしくは陰口を行い、手によって殴り、心によって邪推を行った人々に対しその罪を帳消しにしてくれるよう頼み、死ぬ前に権利や借りから清められなければならないのです。

不注意な人は、現世において他者の権利を奪ったことに喜び、惨めさを幸福と考えているかもしれません。しかし明日にも、公正さの秤が築かれ、彼自身に「あなたは卑しむべき、無力で弱い破産者である。もはやここではどの権利も相手に返すことはできず、誰にも許しを乞うことができない」と言われた時、いかに後悔するか、誰にもその想像はつかないのです。

ウマイヤ朝のカリフの一人である、アブドゥルマリク・ビン・マルワンは、死がかなり近づいた時に、ダマスカスの郊外の通りで、服を手に巻いて洗濯石に打ちつけている洗濯人を見ました。彼は来世の厳しい裁きを考え、深いため息をつき、

「私もこの洗濯人であればよかったのに。この手の働きで毎日稼いで生計をたて、現世での仕事のどれにも発言権が泣ければよかったのに」と言いました。（イマーム・ガザーリー、イフヤー、VI，114）

死の厳しさを考え、それに備えると同時に、アッラーの慈悲にも決して絶望しないことが必要です。

ウクバ・アル‐バッザールは次のように語っています。

「遊牧民の一人が、埋葬の為に運ばれる遺体を目にした。彼の方に向かい、

『あなたを祝福する、亡骸よ。何と幸福なことか』と言った。私は

『なぜ彼を祝福しているのか』と尋ねた。彼はこう答えた。

『この上なく気前がよいお方の監獄（つまり墓場）に運ばれていく人をどうして祝福せずにいられようか。彼は、素晴らしいお方のもとに運ばれていくのだ。そのお方の、客へのもてなしは豪勢であり、許しも非常に大きいのだ』

私はその時まで、このような素晴らしい言葉を聞いたことがなかった」(Ebü'l-Ferec Abdurrahman, Ehvâlü'l-Kubûr, s. 155)

クルアーンにおける熟考

　クルアーンは、心から信仰する信者にとって熟考の世界の深みへと開かれた荘厳な扉です。広い熟考の地平線です。地や天のことばです。魂への糧となる英知にみちた言葉に満ちた、無限の恵みの宝庫です。人間に与えられた、表現の奇蹟です。

　イスラーム文学において1400年以上にわたって書かれてきた何千もの作品は、ただ一冊の「書物」を理解し、そこにおいて深みを増し、ある「人間」をよりよく知り、そこに自らを滅することができる為のものなのです。

クルアーンにおける熟考

人間はその天性として、熟考する傾向を持ちます。しかし人はその理性を、我欲の感情や狭い境界線から救われ、真実や善へと方向づけるガイドを必要とします。最も確実なガイド、手引きは、アッラーの書であるクルアーンであり、その実際的な解釈である預言者ムハンマドです。

とりわけ、人間への慈悲として下されたクルアーンは、心から信仰する信者にとって熟考の世界の深みへと開かれた荘厳な扉です。広い熟考の地平線です。地や天のことばです。魂への糧となる英知にみちた言葉に満ちた、無限の恵みの宝庫です。人間に与えられた、表現の奇蹟です。

クルアーンは、人間と万物の解説です。万物、人間、そしてクルアーンは、互いに結びつき、互いを最も美しい形で解説する三つの世界です。クルアーンにおいて深みを増し、自らとアッラーの恵みを読み、万物の英知のページを

めくり始めます。無数の、神の英知が彼に示されます。心から彼方へと、窓が開かれます。

人間を精神的な滅亡に引きずり込む、我欲に満ちた自己中心的な感覚の薬は、クルアーンにあります。人間を動物よりもなお低い状態に下げる純潔さの欠如から救われる為の方策も、クルアーンにあります。公正さの感覚が抑圧へと変容しない為の予防策もまた、クルアーンにあります。要するに人間があらゆる状態で必要としている最大の幸福の為の処方箋は、ただクルアーンにあるのです。

クルアーンはアッラーが教えられた

クルアーンは、アッラーが人類に、神の観点から恵まれた最も大きな贈り物です。

クルアーンでは次のように語られています。

「慈悲あまねく御方が、このクルアーンを教えられた。（かれは）人間を創り、物言う術を教えられた」（慈悲あまねく御方章、第55章、第１－４節）

アッラーは無限の慈悲の偉大な顕現として人間にクルアーンを教えられ、それを通して人間に多くの英知と神秘を示されました。だから人は、クルアーンを学び、神によるその教えの中でまず内面世界を発展させ、それからあらゆる状態、行為によってあたかも生きたクルアー

ンとなれるよう、努力しなければならないのです。

全ての書物は、ある一冊の書物の為に

イスラーム文学において1400年ほどの間に書かれた何千冊もの作品は、ある一冊の書物を理解し、そこにおいて深みを増し、ある「人」をより近しく理解する為のものです。地上にある全ての木がペンに、全ての海がインクになったとしても、クルアーンが含む英知と真実を数え上げ、そこに書くことは不可能です。[55]全ての知識と英知の暗号はそこにあるのです。二つの世界の幸福の鍵もやはり、そこにあります。

クルアーンは常に前を進み、人間の知識がその後を追います。行われてきた全ての科学的発見は、クルアーンにおける知識を評価し、説き明かすものなのです。

アッラーは次のように語られています。

「われは、わが印が真理であることが、かれらに明白になるまで、(遠い)空の彼方において、またかれら自身の中において(示す)。本当にあなたがたの主は、凡てのことの立証者であられる。そのことだけでも十分ではないか」(フッスィラ章、第41章、第53節)

55 参照:ルクマーン章、第31章、第27節

クルアーンにおける研究が続く限り、その新たな奇蹟が示されるでしょう。実際預言者ムハンマドは、学者たちがクルアーンに飽きることがないこと、多くの繰り返しの為にその新鮮さを失うことは絶対にないこと、人を驚かせ、驚嘆させる側面が尽きることはないと言うことを知らせておられます。[56]

クルアーンを熟考と共に読むべきである

イスラーム学者たちは、クルアーンを読誦することの意図とは、その英知と意味を熟考すること、その定めるところに従って行動することであると語っています。

人の思考力の為に、クルアーンを読むこと以上に効果的なものはありません。なぜならクルアーンは人類の全ての立場、あり方を知るアッラーのお言葉であるからです。つまりクルアーンは、人類に鏡を示し、自らを最も正しい形で知ることを可能とします。この為信者は、クルアーンをしばしば読誦し、アッラーのこのお言葉に望みが何であるのかと熟考すべきです。

この形でクルアーンの一つの節を熟考、考察と共に読むことは、熟考なしにクルアーンの全てを読むことよりもなお尊いことです。なぜ

56 参照： Tirmizî, Fedâilu’l-Kur’ân, 14; Dârimî, Fedâilu’l-Kur’ân, 1.

ならクルアーンの全ての言葉には、数えきれない神秘が存在するからです。人はただ細かな熟考、崇高な道徳、そして誠実な行為によって得られる清められた心、細やかな気持ちによってその神秘に至ることができるのです。

アッラーは次のように語られています。

「われが定めたもので、明瞭な種々の印をその中に下した。必ずあなたがたは留意するであろう」（御光章、第24章、第1節）

「われがあなたに下した啓典は、祝福に満ち、その印を沈思黙考するためのものであり、また思慮ある者たちへの訓戒である」（サード章、第38章、第29節）

「かれらはクルアーンを熟読玩味しないのか。それとも心に鍵をかけたのか」（ムハンマド章、第47章、第24節）

預言者ムハンマドに人々は、

「クルアーンの読誦の為にどのような声や音階がより美しいでしょうか」と尋ねました。

預言者ムハンマドは次のように応えられました。

「クルアーンの読誦を聞いた時にアッラーへの恐れを感じる人の声、音階」（Dârimî, Fedâilu'l-Kur'ân, 34）

シャイターンが疑念を与える行いの筆頭に、クルアーンを読むことが挙げられます。なぜならクルアーンを読み、その約束、威嚇、明白な言葉や説明を考える人は、誠実な行為により熱意を持って取り組むようになるからです。疑わしい事柄、禁じられたものからより遠ざかります。この形でクルアーンを読むことは誠実な行いのうち最も徳のあるものである為、シャイターンは人々をクルアーンから遠ざける為にできる限りの力を尽くすのです。そしてこの為に、クルアーンの読誦の前に«أَعُوذُ بِاللهِ مِنَ الشَّيْطَانِ الرَّجِيمِ»「アウーズ ビッラーヒ ミナッシャイターニッラジーム」といい、シャイターンからの庇護を求めることが命じられているのです。クルアーンでは、次のように語られています。

「あなたがクルアーンを読唱する時は、忌まわしきシャイターンに対して、アッラーの御加護を祈れ」（蜜蜂章、第16章、第98節）

預言者ムハンマドはクルアーンをどのように読まれていたか

預言者ムハンマドはクルアーンを、重々しく、一言一言、そしてそれを体現しながら読まれました。クルアーンの言葉の意味について熟考し、その命令はすぐに実行しました。アッラーを賛美することについて言及する節が来た時には、「スブハーナッラー」と要った賛美の表

現で、アッラーが一切の不足から清められているお方であることを賞賛されました。ドゥアーの節が来るとそれらと共にアッラーに懇願しておられました。アッラーに庇護を求めることに言及する節を読まれると、すぐにアッラーに庇護を求められました。[57]

時には一つの節を非常に集中して読まれ、朝までその節と共に熟考し、懇願されていました。

アブー・ザッルは次のように伝承しています。

「アッラーの使徒はある夜、立ちあがった状態で朝まで次の章句を繰り返し読まれました。

اِنْ تُعَذِّبْهُمْ فَاِنَّهُمْ عِبَادُكَۚ وَاِنْ تَغْفِرْ لَهُمْ فَاِنَّكَ اَنْتَ الْعَز۪يزُ الْحَك۪يمُ

『あなたが仮令かれらを罰せられても、誠にかれらはあなたのしもべです。またあなたがかれらを御赦しなされても、本当にあなたこそは、偉力ならびなく英明であられます』」（食卓章、第5章、第118節）（ネサーイ， イフティタフ， 79； アフマド， V, 156）

57 参照： Müslim, Müsâfirîn, 203; Nesâî, Kıyâmu'l-Leyl, 25/1662.

またある日預言者ムハンマドは、上記の節と共に

「主よ、かれらは人びとの多くを迷わせました。わたし（の道）に従う者は、本当にわたしの身内であります」（イブラーヒーム章、第14章、第36節）という節を読まれ、その後手を掲げられ、

「アッラーよ！わがウンマ！わがウンマ！」と懇願され始めました。その一方で泣いておられました。それに対しアッラーは、

「ジブラーイールよ！アッラーは全てをよりよくご存じではあるが（人々も知る為に）行きなさい、ムハンマドになぜ泣いているのか聞きなさい」と言われました。

ジブラーイルがやってきました。預言者ムハンマドは彼に、ウンマの為に感じている不安の為に泣いたのだと伝えました。そこでアッラーは

「ジブラーイル預言者さま、ムハンマドのもとに行き、『ウンマに関してあなたを満足さあせよう、あなたを決して悲しませないだろう』という吉報を伝えなさい」と言われました。（ムスリム、イーマーン、346）

預言者ムハンマドは、そのウンマについてこれほどに考えておられ、また慈悲深いお方でした。このハディースを十分に熟考し、私たちがそのお方にどれほど愛情を感じているか、ま

たこの愛情の証拠として預言者さまのスンナをどれほど実行できているかについて、私たち自身を点検しなければいけません。

アブドゥッラー・ビン・マスードは次のように語っています。

ある日、アッラーの使徒は、

「私にクルアーンを読んでくれるか」と言われました。私は、

「アッラーの使徒よ、クルアーンはあなたに下されたのに、私があなたにクルアーンを読むのですか」と言いました。アッラーの使徒は

「私はクルアーンを他者から聞くことも好むのだ」と言われました。そこで彼に、婦人章を読み始めました。第41節になり、

「われが、それぞれのウンマから一人の証人を連れてくる時、またあなた（ムハンマド）を、かれらの悪に対する証人とする時は、どんな（有様）であろうか」と読むと、

「これで十分だ」と言われました。見ると、神聖なその目から涙が流れていました。（ブハーリー、タフシール4/9； ムスリム， ムサーフィリーン，247）

聖アーイシャも預言者ムハンマドの心の繊細さと熟考の地平線について、ある光景を次のように伝承しています。

「ある晩、アッラーの使徒は私に、

『アーイシャよ、あなたが許せば、この夜をアッラーへのイバーダと共に過ごそう』と言われました。私は、

『私はあなたと共にいることを好みますが、あなたを喜ばせることをもっと好みます』と言いました。それから彼はおき、ウドゥーをして、礼拝をされました。彼は泣いていました。あまりにも泣いたので、服やその神聖なひげ、そしてサジュダをしている場所までびっしょり濡れていました。彼がそのような状態であった時に、ビラールが朝の礼拝に呼びに来ました。預言者ムハンマドが泣いているのを見て、

『アッラーの使徒よ！アッラーがあなたの過去と未来の罪を全て許されたのに、なぜ泣かれているのですか』と言いました。

預言者ムハンマドは、

「アッラーに多く感謝するしもべであってはいけないかね？誓って言うが、今晩、私に章句が下された。それらを読み、熟考しない者たちを気の毒に思う」と言われ、次の章句を読まれました。

「本当に天と地の創造、また夜と昼の交替の中には、思慮ある者への印がある。または立ち、または座り、または横たわって（不断に）アッラーを唱念し、天と地の創造に就いて考える者は言う。「主

よ、あなたは徒らに、これを御創りになったのではないのです。あなたの栄光を讃えます。火の懲罰からわたしたちを救って下さい」（イムラーン家章、第3章、第190～191節）（イブニ・ヒッバーン サヒーフ，II，386;アルーシー、ルーフル・マーニ，IV，157）

この章句が下された夜、預言者ムハンマドは、星たちが羨望するような真珠の粒のような涙と共に朝まで泣かれました。信者たちがアッラーの御力と崇高さの顕現を熟考することで流す涙も、ーアッラーの恵みによりーはかない夜の飾り、墓の闇の灯り、そしてーインシャラー、天国の庭園の露となるでしょう。

預言者ムハンマドは、クルアーンを読むこと、その神秘に気づきながら読むことの必要性と徳について次のように語られています。

「集団の人々が、アッラーの家のいずれかに集まり、アッラーの書物を読み、彼らの中でそれについて語り合うなら、平穏が下り、彼らを慈愛がつつみ、天使がその周囲を囲む。アッラーもその人々について、ご自分の位階に置かれる方々との間で言及される」（ムスリム，　ズィクル 38；アブー・ダーウード，ウィトル，14/1455；ティルミズィー、クラート，10/2945）

「クルアーンを3日よりも短い期間で読み終える人は、それを正しく理解することはできない。正しく熟考することはできない」（アブー・ダ

ーウード，ウィトル，8/1390；ティルミズィー、クラート，11/2949；ダーリミー、サラ―ト173）

「クルアーンを、あなたを悪事から守る形で読みなさい。もしそれがあなたを悪事から守らないのであれば、それを読んだことにはならない」（アフマド・ビン・ハンベル　ズフド，　p. 401/1649）

サハーバたちのクルアーンの読誦

サハーバたちは、クルアーンを理解する為に熟考を深く行いました。アッラーの言葉について深く考え、それを自分たちの生き方において実践しつつ、読んでいました。聖ウマルの次の言葉は、その典型的な例です。

「私は雌牛章を12年で読み終えた。そして感謝として、ラクダを捧げた」（クルトゥビー　I，40）

聖ウマルの息子アブドゥラーも、雌牛章を学び、それを生活に取り入れる為、その節についてちょうど年間、研究をしていました。ムワッタ、クルアーン、

なぜなら彼らはクルアーンを、義務や法規、それらに関する事柄などを学びながら読んでいたからです。クルアーンの言葉を熟考することにおいて深みを増し、その人生に移行させていました。（ケッターニ，テラーティブ II，191）

ある人が、ザイド・ビン・サービトに行き、クルアーンを一週間で読み終えることについてどう考えているのかを尋ねました。彼は「良いことだ」と答えた後で、こう続けました。

「しかし私は、15日もしくは20日に一度ハティムを行うことをより気に入っている。理由を尋ねるなら、その場合、クルアーンについて十分に熟考し、その意味をよりよく理解できるからだ」

アブドゥラー・ビン・メスードは次のように語っています。

「誰であれ、知識を求めるのであればクルアーンの意味を熟考しなさい。その解釈や読誦を深く行いなさい。なぜならクルアーンには、以前の人々、そして今後の人々の知識が存在する」（ヘイセミー，VII，165；ベイハーキ　シュアブ，II，331）

ある遊牧民は預言者ムハンマドの神聖な口から

「一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る」（地震章、第99第7－8節）という章句を聞き、驚嘆のうちに

「アッラーの使徒よ、一微塵の重さですか」と尋ねました。

預言者ムハンマドは、

「そうです」と答えました。一瞬で態度を変えた遊牧民は、

「私には欠点がある」と泣き始めました。そしてこの言葉を何度も繰り返しました。それからこの章句を繰り返しながら立ち上がり、去って行きました。

預言者ムハンマドはその背後で、

「信仰が、この遊牧民の心に入った」と言われました。（スユーティ、アル・ドゥッルル・マンスール VIII，595）

アッラーの親友たちのクルアーンの読誦

フダイ・ビン・イヤーズは、

「クルアーンは、それによって振る舞うよう、啓示された。人々はただ、それを読むことを実行している」と言いました。それに対して彼に、

「クルアーンにより振る舞うとはどういうことか」と質問がされました。師は次のように答えました。

「それが合法としているものを合法と、禁止しているものを禁止されていると認め、それらを生活において実行すること、それが命じて

いることに従うこと、避けるように求めているものを避けること、そして驚嘆させるその表現について考え、（アッラーを賛美すること、その項目を十分に調べること、熟考すること）によって可能となる」

　クルアーンの一つの章句にすら、非常に多くの広い意味があるのです。イマーム・シャーフィー師は、

　「人々が時間章を正しく熟考し、考察すれば、それは彼らにとって十分となる」と語っています。

　偉大なイスラーム学者であるアスマーイは、クルアーンに関する熟考について、一つの記憶を次のように伝えています。

　遊牧民の一一人が、ハーリフェ・ビン・アブドゥルマリクのそばにやってきました。ヒシャムは彼に、

　「私に忠言をしてください、遊牧の民よ」と言いました。

　遊牧民はハリーフェの熟考をクルアーンに向け、このような忠言を行いました。

　「忠言としては、クルアーンで十分だ。追い払われたシャイターンからアッラーに庇護を求めます。慈悲あまねく慈愛深きお方、聞かれ、ご覧になっているお方アッラーの名において、

「災いなるかな、量を減らす者こそは。かれらは人から計って受け取る時は、十分に取り、

（相手にわたす）量や重さを計るときは、少なく計量する者たちである。これらの者は、甦ることを考えないのか、偉大なる日に。その日、（凡ての）人間は、万有の主の御前に立つのではないか」（量を減らす者章、第83章、第1－6節）

遊牧民は次のように言葉を続けました。

「師よ、これは秤で量を減らす者の罰です。全てを不正に受け取る者の罰について、ご自分で考えてみてください」

有名なオスマン朝の学者の一人、ムハンマド・ハーディミーは次のように語っています。

「あらゆる種類の苦しみ、災い、災難から救われる為の唯一の道は、クルアーンに結びつき、それを人生において実行することである。イバーダと服従を続けなさい。遠くに最も徳のあるイバーダの一つである考察、正しい読み方、そして徳を持ってクルアーンを読むことにしっかり結びつきなさい。なぜならクルアーンをこのように読むことは、アッラーと対話することのようであるからである」（参照： Hâdimî, *Mecmûatü'r-Resâil,* s. 112, 194, 200）

クルアーンからの熟考の例

アッラーの知識についての熟考

クルアーンでは多くの箇所で、アッラーの無限の英知について触れられ、人間を熟考へと招いています。

クルアーンでは次のように語られています。

「幽玄界の鍵はかれの御許にあり、かれの外には誰もこれを知らない。かれは陸と海にある凡てのものを知っておられる。一枚の木の葉でも、かれがそれを知らずに落ちることはなく、また大地の暗闇の中の一粒の穀物でも、生気があるのか、または枯れているのか、明瞭な天の書の中にないものはないのである」（家畜章、第6章、第59節）

信者は、この章句を読むと、少し考えるべきなのです。まだ全く開かれていない、存在していない、人間の知識が到達できない、無数の知られていない宝庫があり、これら全ての鍵はただアッラーの位階にあります。それらについてはアッラー以外の誰も知らないのです。アッラーはこれらすべてをご存じであり、同時に全ての被造物についてもあらゆる詳細を含めてご存じなのです。一枚の葉は、それがいつどこに落ちるか、空中で何度回転するか、ということ

をアッラーがご存じなく落ちることはないのです。

　アッラーは、地上の闇に落ちる一つの粒についてすら、それがいつ落ちるか、誰に食べられるかということすらご存じです。目に見える、見えない、考えられる、感じられる、大小問わず、現われたもしくは現われる予定の、秘められたもしくは明白なあらゆるものは、その全ての範疇、あらゆる詳細と共にアッラーの知識に含まれているのです。[58]

　上記のクルアーンの言葉を読むと人の想像力は、既知の、もしくは未知の地平線へと、目に見える、もしくは見えない世界へと翼を広げます。この地上の未知の事象、そして海の無限の深さを周遊します。限りのない世界のあらゆる一端で、目の見える世界の境界線のかなたで、一歩ずつアッラーの知識や芸術性を見て行きます。地上の全ての木から落ちる無数の葉を眺めます。地の深みに隠された一粒ですら、アッラーの目から逃げることはありません。限りのないこの世界に、乾いたもの、濡れたもの何があろうと、全てがアッラーのご命令に従って動くのです。

58　参照: Muhammed Hamdi Yazır, Hak Dîni, III, 1947; Ebû Hayyân, IV, 145-146, (家畜章、第6章、第59節)

これは気が遠くなるような、人々を驚嘆させる旅です。時間の次元、空間の境界線、目に見えるもしくは見えない、既知のもしくは未知の世界の深みにおいて行われる旅です。この旅の移動距離は非常に長く、その範囲はこの上なく広いのです。人の想像力は、この空間を完全に考えることすらできません。ただこの完全な光景は、上記の章句のいくつかの言葉によって、この上なく細かく、不足なく、広範囲で描かれているのです。（Seyyid Kutub, *Fî Zılâl,* II, 1111-1113, [家畜章、第6章、第59節]）

人はこの形でクルアーンや万物について熟考するにつれて、アッラーの知識と力を一部であれ理解します。熟考から遠ざかっている者は、アッラーの神秘や英知を知ることはなく、我欲に満ちた生活の中で引きずられていくのです。

サーディ・シラーズィーは次のように語っています。

「理性を持つ人のまなざしにおいて、緑の木の葉の1枚1枚は、アッラーを知る為の詩集なのです。不注意な人にとって、全ての木は、1枚の葉ですらないのです」

アッラーはまた別の章句で次のように語られています。

「かれは大地に入るもの、またそれから出るものを凡て知っておられ、また天から下るもの、ならびにそこに上るもの凡てを知っておられる。かれは慈悲深く寛容であられる」（サバア章、第34章、第2節）

人がこの章句を読むと、無限の物体、その行動、形、そして意味のイメージが脳に現れます。これらを想像に押し込むことすら不可能です。この章句が示す事象を、その一瞬であろうと、そこで起こることを見出し数えることすら不可能です。これを行う為に全人類が集まり、生涯の全てをこの仕事に捧げたとしても、その「一瞬」においていくつのものが天から地に降りたのか、いくつのものが地から天へと上昇したのかを見出すことはできないのです。

大地には、どのようなものが入るのでしょうか。大地にどれだけの種が落ちることでしょうか。大地の下でどれほどの昆虫類や爬虫類がいるのでしょうか。この無限の大地に、どれほどの水滴、気体分子、放射線が浸透するでしょうか。そう、どれだけのものが大地に入ることでしょうか。全てがアッラーのご命令と評価のもとで。

これに対し、大地からもどれほどのものが出ることでしょうか、それほどの植物が芽吹くことでしょうか。クルアーンでは次のように語られています。

「かれらは、かの大地を見ないのか。如何に多くの、凡ての尊いものを、われはそこで育てるかを」（詩人たち章、第26章、第7節）

「本当にわれは、水（雨）を豊かに注ぎ、次いで大地を裂いて切れ切れにし、そこに生長させるものには、穀物、またブドウや青草、オリーブやナツメヤシ、繁茂した庭園、果物や牧草（がある）。あなたがたとあなたがたの家畜のための用益である」（眉をひそめて章、第80章、第25－32節）

「そして大地から、どれほどの鉱物が出てくることでしょうか。どれほどの火山が、マグマを噴出させていることでしょうか。どれほどのガスが蒸発しているでしょうか。どれだけ多くの昆虫が、秘められたその巣から地上に出て来るでしょうか。

教訓として意味深いことに、雪が降り、辺りを覆い尽くすと、無数の生物は大地の胸に庇護を求め、長い期間、創造主の保護のもと、安全に過ごします。アッラーは大地を彼らの為のゆりかごとされているのです。この為、雪が解けた時にそれらの生物の死骸の山を見ることがないのです。この被造物は皆、大地の上に出てきて、生き続けるのです。

また、考えるならば、地上から天球でどれほどの力、天使、魂、ドゥアー、祈りの声が昇って行くことでしょうか。目に見える、もしくは見えない、どれほどのものがあるでしょう

か。人間はそのごく一部を知っており、その多くを知らないどれほど多くの生命体、そして生命を持たない物質が…

そして天から地には、どれほどのものが下っているでしょうか。一方で雨粒、隕石、熱し、照らす光線…また一方でどれだけの「カダー」の矢、任命を受けた「カダル」、アッラーの慈悲…一部は全ての被造物を包括し、一部は一定のしもべたちを特別に包む、アッラーの慈悲…

これらの全てが、一瞬の間に起こっているのです。ただ一瞬の間の事象を、人間の認識は把握することができるでしょうか。人間がどれほどの寿命を費やしたとしても、この事象を数えることはできません。しかしアッラーの、無限で理性の限界を超越し、何ものもその妨害とはなり得ない知識は、この事象の全てを－どこであろうと、いつであろうと－包括するのです。だから次のことを決して忘れてはいけないのです。感情、意志、そしてその鼓動によって全ての心臓は、崇高なアッラーの管理のもとにある、ということです。（Bkz. Seyyid Kutub, *Fî Zılâl,* V, 2891-2892, ［サバア章、第34章、第2−3節］）

出来事章

クルアーンの全ての章、全ての節は、それについて深く熟考することを必要とします。しかし私たちはここで、例として、出来事章、蟻章、ビザンチン章のうち一部の節を取り上げます。

アッラーは出来事章を、最後の審判の日の恐ろしさを説くことから始めます。その日、一部の人々が高く挙げられ、一部の人々が低く落とされることを教えています。審判の後、人間が三つに分類されることを告げています。

それからアッラーは、あらゆる善行において前を行き、アッラーに近しいしもべたちと、行為が記されたノートが右側から渡される誠実な人々が到達する比類のない恵みについて描写され、それを聞く者は幸せを感じます。

それから、行為が記されたノートが左側から渡される不運な人々が直面する、辛く恐ろしい罰を描写します。しもべたちを、鳥肌が立つような懲罰の光景により、罪から遠ざけるのです。

それからアッラーは、このつらい状態に陥らないようにと、しもべたちを熟考へと招き、次のように警告されます。

人間の創造

「われはあなたがたを創った。あなたがたはどうして真実を信じようとしないのか。あなたがたは、あなたがたの射出するもの（精液）に就いて考えたか。それを創ったのはあなたがたなのか、それともわれがその創造者であるのか」（出来事章第57−59節）

無に近いような水の一滴から、この上なく複雑でまたこの上なく均衡のとれた形で動くシステムを備えた、人間の肉体ができると言うことは、いかに壮麗な神の芸術でしょうか。

死と復活

「われは、あなたがたに死（期）を定めた。われは、（決して）出し抜かれたりすることはない。だがわれは同類の者で取り替え（世代の交替）、またはあなたがたが知らない（他の形態の）ものに、あなたがたを創（り変え）る。」（出来事章、第56章、第60−61節）

死の真実…誰も、死から逃れることはできません。アッラーは望まれれば、教えを否定する人々を滅ぼされ、よりよい集団をもたらされることができます。

「あなたがたは、確かに最初の創造を知っている。それでも何故留意しないのか」（出来事章、第56章、第62節）

最初の創造をこれほどに素晴らしい形で行われた崇高なアッラーは、人を再び創造するのにも、その力が十分なのです。このことについて熟考し、来世に、そして死後の復活に備えることが必要となります。

種と植物

「あなたがたは、あなたがたが耕す（畑の）ことを考えたか。あなたがたがそれ（植物）を育てるのか、それともわれが育てるのか。もしわれが欲するならば、それを枯れた屑にしてしまう。あなたがたは驚愕して止まない。（そして言うであろう。）「わたしたちは本当に負債を課せられた。いや、わたしたちは（労働の成果を）取り上げられた。」（出来事章、第56章、第63－67節）

私たちは、周囲の草花、木々、植物を、教訓を得ようとするまなざしで、アッラーの創造の芸術と恵みを驚嘆のうちに眺めるべきです。アッラーが与えられなければ、人間の努力や予防策は無と化し、一本の草すら生えることはありません。

一瞬のうちに、周囲の緑が全て、乾いた砂漠となったと考えてみましょう。私たちの暮ら

しは、一瞬で厳しいものとなってしまうでしょう。

甘い水

「またあなたがたの飲む水に就いて考えたか。あなたがたが雲から（雨を）降らせるのか、それともわれが降らせるのか」

雲から下る甘い水は、アッラーの大きな恵みです。この水が苦い状態で下れば、誰もそれを甘くすることはできません。もしくは、日照りになれば、雨を降らせる力は誰にあるでしょうか。

火

「あなたがたは、灯火に就いて考えたか。その（燃やす）木を、あなたがたが創ったのか、それともわれが創ったのか。われはそれを教訓とし、また荒野の住民の便利のために創った」（出来事章、第56章、第71－73節）

人生において非常に人間の役に立つ火や、その燃料となる木を誰が創ったのが、実際に考える必要があるのです。

アッラーの御力を見てください。緑の木から、炎があがるのです。そして火の性質につい

て考えてみましょう。どのように燃えるのでしょう。どのように焼くのでしょう。

砂漠の旅人は、夜の寒さと闇から、火に庇護を求めます。火は、旅人にとって不可欠な保温、照明、そして料理をするための媒介なのです。そもそも全人類が火を必要としています。火なしで暮らすことは、非常に困難です。

従って火は、教訓を秘めたものであり、かつ、土、水、空気のような不可欠なニーズです。預言者ムハンマドは、次のように語られています。

「ムスリムは、三つのものにおいて共同である。水、草、そして火である」（アブー・ダーウード・ブユ 60/3477）

また一方で、現世での火を見て、地獄を思い起こすべきです。いかに、教訓を秘めていることでしょう。私たちの下にはマグマの層、壮大な火の海があり、私たちの上には巨大な炎の玉である太陽があります。二つの火の中で、涼しく平穏な生活条件を恵まれたアッラーに、どれほど感謝しても足りないのです。

これらすべての恵みに対し、人はアッラーを何度も賛美することが必要です。

「だから偉大であられるあなたの主の御名を讃えなさい」（出来事章、第56章、第74節）

－私たちの舌は、クルアーンと布教を行いつつ、賛美を行うべきです。

－私たちの心は、感情の深いところで感謝をし、賛美を行うべきです。

－私たちの器官は義務ではない礼拝、断食、奉仕を増やすと言う形で、賛美を続けるべきです。

星もしくは啓示

「わたしは、沈んでゆく星にかけて誓う。それは本当に偉大な誓いである。もしあなたがたに分るならば」（出来事章、第56章、第75－76節）

アッラーの崇高さの限りのなさ…アッラーは私たちの熟考を、無限へと向けられます。

天は、まさに果てのない大洋のようです。

この節では、星が見えなくなってから始まる夜明け前の時間と、夜の礼拝にも注意が向けられています。

またこれらの節で誓いがかけられていることのもう一つが、預言者ムハンマドに下された啓示です。これらは、一つの節、もしくはいくつかの節、もしくは章の全部という形でした。全ての啓示が、「ナジュム＝星」と呼ばれています。

クルアーン

「本当にこれは、非常に尊いクルアーンである。（それは）秘蔵の啓典の中に（書かれてあり）、清められた者の外、触れることが出来ない」（出来事章、第56章、第77－79節）

クルアーンには、最高の形で敬意、尊敬を示すことが必要です。そのムスハフについている外側のカバーにすら、ウドゥーのない状態で触ることは禁じられています。ウドゥーのない状態の人は、服のそででムスハフをつかむこともできません。それに対する尊敬や敬意を損なうような行為をとることも、大きな不注意さです。なぜなら、

「万有の主からの啓示である。これは、あなたがたが軽んじるような教えであろうか。またあなたがたは（それを）虚偽であると申し立て、あなたがたの暮らしを立てるのか」（出来事章、第56章、第80－82節）

私たちに与えられた最大の恵みの一つは、クルアーンの対象とされていることです。この恵みへの感謝は、それを正しく理解し、その定めるところに従って生きることです。

死

「それならあなたがたは、(臨終の人の魂が)喉もとを塞ぐ時、(座って只)見守るばかりなのか」(出来事章、第56章、第83－84節)

人の寿命が尽き、アッラーの命令が下されると、それをなかったことにするために人にできることは何もありません。

「われはあなたがたよりもかれに近いのである。だがあなたがたには見えはしない。あなたがたがもし(来世の)報いを除外されているというのなら、あなたがたは何故、その(魂)を(体内に)呼び戻さないのか。もしあなたがたが、真実(を語っているの)ならば」(出来事章、第56章、第85－87節)

アッラーの御力と、人の無力さ…全ての人は、好むと好まないとに関わらず、アッラーの定めに従い、服従するのです。人生においてアッラーの命令に逆らい、頑固に対抗するうぬぼれ、思い上がった者も、その瞬間には何の異議の声も挙げられません。意志の上に合った無数の不注意さの覆いが取り除かれた人は、万物における真の統治がただアッラーのものであることを、全ての真実と共にただその瞬間に理解することができるのです。

死者は三つの状態のどれかである

（１） もしかれが、（アッラー）に近付けられた者であるなら、（かれに対する報奨は）安心と満悦、そして至福の楽園である。

（２） もしかれが、右手の仲間であるならば、「あなたに平安あれ。」と右手の仲間から（挨拶される）。

（３） もしかれが、嘘付きで、迷った者であるならば、煮え立つ湯の待遇を受け、獄火で焼かれよう。（出来事章第88－94節）

不信心者、そして罪を犯したムスリムは、ここに該当します。

「本当にこれは、揺ぎのない確かな真理である」（出来事章、第56章、第95節）

アッラーに庇護を求める

「だから偉大であられるあなたの主の御名を讃えなさい」（出来事章、第56章、第96節）

蟻章

この章では、クルアーンが英知の持ち主であり全てをご存じであるアッラーによって送られたことが語られています。アッラーの御力の大きさ、その誉れの崇高さ、預言者に恵まれた

奇蹟や援助、あらゆる考えにおいてある崇高さがあることが語られています。預言者ムハンマドが預言者として送られたこと、人間の為に大きな発展や改善への要因となられたことが吉報として伝えられています。この点についての言及の為、聖ムーサー、ダーウード、スライマン、サーリフ、そしてルートゥの物語について触れられています。

これらの歴史的な物語は、アッラーの御力や完全さを示す伝承された証拠です。多神教徒はこれらを信じなかった為、崇高なるアッラーは彼らにより明白で一般的な論理的な証拠を示され次のように語られています。

「誰が、天と地を創造したのか。また誰があなたがたのために、天から雨を降らせるのか。それでわれは、美しい果樹園をおい茂らせる。そこの樹木を成長させることは、あなたがたには出来ない。アッラーと共に(それが出来る外の)神があろうか。いや、かれらは(正しい道から)外れた民である」(蟻章、第27章、第60節)

預言者ムハンマドは、この章句を読むとすぐに、

بَلِ اللّٰهُ خَيْرٌ وَأَبْقَى وَأَحْكَمُ وَأَكْرَمُ وَأَجَلُّ وَأَعْظَمُ
مِمَّا يُشْرِكُونَ

「いや、アッラーは彼らが同位にしているものよりもより尊く、より永遠であり、より統治をされ、より気前深く、より崇高でより偉大である」と言われました。（ベイハーキ、シュアイブ、 II，372）

クルアーンの節は、アッラーの御力のしるしである被造物について考えるよう招き、次のように続きます。

「誰が、大地を不動の地となし、そこに川を設け、そこに山々を置いて安定させ、２つの海の間に隔壁を設けたのか。アッラーと共に（それが出来る外の）神があろうか。いや、かれらの多くは知らないのである。

苦難のさいに祈る時、誰がそれに答えて災難を除き、あなたがたを地上の後継者とするのか。アッラーと共に（それが出来る外の）神があろうか。だがあなたがたは、少しも留意することがない。

陸と海の暗黒の中で、あなたがたを導くのは誰か、また慈悲の前兆の吉報として、風を送るのは誰か。アッラーと共に（それが出来る外の）神があろうか。アッラーはかれらが（主に）配して崇めているもの（偶像）の上にいと高くおられる。

創造をなし、それからそれを繰り返し、天と地からあなたがたを扶養するのは誰か。アッラーと共に（それが出来る外の）神があろうか。言ってやるがいい。「あなたがたが真実を語っているというのな

ら、その証拠を出しなさい。」（蟻章、第27章、第61－64節）

ビザンチン章

アッラーはしもべを熟考へと招かれ、次のように語られています。

「かれらは反省しないのか。アッラーが天と地、そしてその間にある凡てのものを創造なされたのは、唯真理のため、また定めの時のためであることを。だが人びとの多くは、主との会見を否認する。

かれら（マッカの多神教徒）は、地上を旅してかれら以前の者の最後が如何であったかを、観察しないのか。かれら（昔の人）は、かれらよりも力において優れ、地を掘り起こし（て耕作し）、またかれらよりも栄えていた。そして使徒たちは明証を持ってかれらのところに来た。アッラーがかれらを損ったのではない。かれらが自ら自分を損ったのである」（ビザンチン章、第30章、第8～9節）

いくつかの節の後では、アッラーの唯一性、無限の御力、そして偉大さの根拠をいくつも並べ、次のように語られています。

「かれは、死から生を齎し、また生から死を齎され、また枯れ果てた大地を甦らせる。これと同じようにあなたがたも引き出される。

かれが、泥からあなたを創られたのは、かれの印の一つである。見るがいい。やがてあなたがた人間は（繁殖して地上に）散らばった。

またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう（取り計らわれ）、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある。

またかれが、諸天と大地を創造なされ、あなたがたの言語と、肌色を様々異なったものとされているのは、かれの印の一つである。本当にその中には、知識ある者への印がある。

またかれが、あなたがたを夜も昼も眠れるようにし、またかれに恩恵を求めることが出来るのも、かれの印の一つである。本当にその中には、聞く者への印がある。

またかれが、恐れと希望の稲光をあなたがたに示しなされ、天から雨を降らせて、死んだ後の大地を甦らせられるのは、かれの印の一つである。本当にその中には、思慮ある者への印がある。

またかれが、御意志によって、天と地を打ち建てられたのは、かれの印の一つである。そこで、（一声）あなたがたに呼び掛けられると、見るがいい。たちまち大地からあなたがたは（引き）出される。

天と地にある凡てのものは、かれに属する。万有は、真心込めてかれに服従する」（ビザンチン章、第27章、第19－26節）

アッラーのお言葉について考えない者

アッラーは、純粋なしもべを定義し、次のように語られています。

「また話題が主の印に及べば聾唖者か盲人であるかのように、戯らに知らないふりをしない者」（識別章第第25章、73節）

信者は、自らにクルアーンが読まれた時、あるいはクルアーンの言葉によって忠告を受けた時に、すぐにそれに集中し、全身を耳にしてそれを聞き、それについて考え、従います。

別の章句では次のように語られています。

「信者は、アッラーのことに話が進んだ時、胸が（畏敬の念で）戦く者たちで、かれらに印が読誦されるのを聞いて信心を深め、主に信頼する者たち」（戦利品章、第8章、第2節）

逆に、クルアーンの精神性から何かを得ることのない者、示唆、神秘、象徴を理解しない者、その謎に至ることがないもの、命令や忠言に従わない者は、大きな損失の中にあるのです。

アッラーは次のように語られています。

「また地上で正義を無視し、高慢である者に就いては、われが啓示から背き去らせるであろう。それでもかれらは、凡の印を見てもこれを信じない。また公正な道を見ても、それを（自分の）道としない。そして邪悪な道を見れば、それこそ（真の）道であるとしている。これはかれらがわが印を拒否して、それを軽視しているためである。」（高壁章、第7章、第146節）

自らをひとかどの者と見なし、他の人々よりも優れていると考えるうぬぼれた人々は、クルアーンの章句の意味を考えることができず、またそこから教訓を得ることもできません。なぜならアッラーは、迫害者の心に、クルアーンの英知を理解し、その崇高さの顕現に至る力を与えられないからです。彼らを、この偉大な神の恵みを得られない状態とされているのです。なぜなら神の神秘の英知の宝庫であるクルアーンが、このようなかたくなな心の沼にあることは、ふさわしくないからです。それはただ、篤信を備えたしもべの心に影響を与え、彼らに道を示す光となるのです。

篤信を備えていない不注意な人々のつらい状態は、クルアーンを正しく熟考しないこと、結果として我欲の粗雑さに捕えられてしまうことによります。クルアーンについて良心を持って考え、それに従っていれば、神の命令に対し無関心であったり、反発したり、混乱したりす

ることはなかったでしょう。逆に、真実を認め、良い徳を持ち、神の神秘や英知から教訓を得ていたでしょう。結果として、彼ら自身に永遠の安らぎと幸福の道が開かれていたでしょう。

❁

ここまで述べられてきたことから理解されるように、一人の信者が熟考から遠ざかり、寿命という資本を無駄にすることはあり得ないのです。なぜなら、時間の価値を知ることができずに誤った場所でそれを無駄にすることを警告する為にアッラーは、

「時間にかけて（誓う）。本当に人間は、喪失の中にいる。信仰して善行に勤しみ、互いに真理を勧めあい、また忍耐を勧めあう者たちの外は」（時間章、第103章、第1－3節）と仰せられているからです。

この為、篤信を持つ信者のまなざしは教訓、沈黙は熟考であるべきなのです。特にクルアーンの言葉における神の真実を熟考し、そこにおいて深みを増し、アッラーへの智に至るべく努力すべきなのです。また信者は、クルアーンを、アッラーからしもべたちにもたらされた手紙であると認識し、永遠の安らぎの源であるクルアーンに、信仰の愛情と興奮と共に結びつかなくてはならないのです。

常にムラーカバの状態であること

ムラーカバとは、内面世界を点検すること、管理すること、注意を一定の点に集めることと言った意味になります。神秘主義においては、「心を、それに害を与える者から守ること、『アッラーは常に私をご覧になっている。私の心を見ておられる』という認識の中にあること」もしくは「恵みを待つこと」と定義されています。つまりムラーカバとは、人が内面世界に向かい、自分の状態を常に点検すること、そして熟考することです。これによって常に覚醒した心で、アッラーに庇護を求める精神のあり方を得ることができます。

アッラーに到達する最短の道

心の世界も、目に見える世界と同様に、限りのない熟考の舞台です。**メヴラーナ**師の次の物語は、ムラーカバ、内面世界の熟考の重要性を素晴らしい形で説いています。

「あるスーフィーが、喜びを得て熟考を行うことができるよう、美しい庭園に行く。庭園の色とりどりの装飾を前に、喜ぶ。目を閉じ、ムラーカバと熟考を始める。そこにいた不注意なある人が、このスーフィーが眠っていると思う。この状態に驚く。スーフィーに、

『なぜ眠っているのだ。目を開けなさい、ブドウ棚、花が開いた木々、芽吹いた草を見なさい。アッラーの慈悲の作品を見て見なさい』という。

スーフィーは次のように応える。

『不注意な者よ。よく知っておきなさい。アッラーの慈悲の最大の作品は心である。それ以外のものは、この大きな作品の陰のようなものである。木々の間に川が流れている。その澄み切った水に、両側の木々が映っている。水の中に反映され、見えるものは、想像上の庭園である。本物の庭園は心にある。なぜなら心は、神の展示場であるからである。その優美で繊細な反映が、水や泥でできているこの世界である。もしこの世界のものが、心の世界のこの心地の良いものの反映ではないのなら、アッラーはこの想像上の世界を「偽りの場」と言われなかっただろう。イムラーン家章第185節では

「この世の生活は、偽りの快楽に過ぎない」とされているのだ』

不注意な者、そしてこの世界を天国だと思い、『天国とはこれだ』という者は、この川の見た目に騙されるものである。真の庭園から、つまりアッラーの友から遠い者は、その想像に心惹かれ、騙される。ある日、この不注意さの眠りは終わる。目が開かれ、真実が見える。しかし最期の息におけるこの光景に、何の価値が

あるだろうか。死ぬ前に死に、その魂がこの庭園の真実の芳香を感じていたこの人はなんと幸福であろうか」

ムラーカバとはアッラーに到達し、知識、閃き、神秘、英知を得る為の重要な道です。さらに、神秘主義における精神的な発展の道の中で、最も価値があり、恵み豊かなものの一つです。

ムラーカバを行うことを望む信者は、まず心をそれに備えさせます。礼拝をしているかのように座り、頭を膝の方に下げます。この状態で、全ての注意を集め、アッラーに向かい、この精神の状態の中で「アッラーは常に私を見ておられる。アッラーは常に私と共におられる。私に、私よりも近い」という信条について熟考します。その結果として、全てを包む神の光が、彼の心にも照らされるようになります。

ムハンマド・ハーディミー師はムラーカバを師に指示して行うと言う手段でも実行することができるとしています。その結果として、いくつかの神の英知が顕示されています。

ムラーカバは、アッラーをあいする人々の観点においては、人をアッラーに近づける、最も近い道です。心からアッラーに向かうことは、それ以外の器官を通してアッラーに向かうことよりもより影響があり、より重要です。なぜなら心によって皆、あらゆる瞬間に容易にア

ッラーに向くことができるからです。しかし、加齢や病気と言った状態では、器官による行為は困難となるのです。

英知を見出す人々は、

「一呼吸の間、アッラーのやすらぎとムラーカバと共にあることは、スライマンの富を得ることよりもより尊く、より良い」と語っています。

預言者ムハンマドが伝えられたことによるなら、何の陰も存在しない最後の審判の日、アッラーは一部のしもべにアルシュの陰を恵まれます。この幸運な者の一部は、一人で立ち上がり、ひとけのない場所でアッラーを思い起こし、思いが募って涙を流す信者です。

ムラーカバ

ムラーカバとは、著名な「ジブリールのハディース」で描かれているイフサーンの意識を体現することです。

「イフサーンとは、アッラーに対し、アッラーを見ているかのようにしもべとして仕えることである。あなたがアッラーを見ていなくても、アッラーは必ずあなたを見ておられる」（ムスリム、信仰，1，5；ブハーリー、信仰37）

イスラーム及び信仰において完全さに到達することは、イフサーンの状態に到達することにかかっています。イフサーンの状態で生きる為には、アッラーが私たちをいつでも見ておられることを認識し、私たち自身を常にムラーカバ、精神的に点検すること、これによって私たちの状態をただすことが必要となるのです。

さらに、アッラーが私たちに、私たちよりも近い問い真実を心で常に認識しておくことが必要です。

心にこの感情が生じれば、しもべは信仰からイフラースに到達したことを意味します。その人はもはや、全ての誠実な行為を豊かで精神性に富んだ心と共に実行し、クルアーン、万物、人間について熟考することの精神的な喜びであふれます。

神秘主義者は、クルアーンの全てを熟考のうちの読む為に、まず一部の章句について熟考の訓練を行います。その為に、人の心に最も影響を与え、アッラーと共にあると言う感情やアッラーへの愛情を植え付ける章句が選ばれます。この章句において深みを増し、熟考を行うことを、ナクシベンディ派では「**ムラーカバ**」と名付けています。

ムラーカバには４つの段階があります。

1.「アハディーヤ」(アッラーの唯一性)についてのムラーカバ

このムラーカバでは、「純正章」について熟考が行われます。全ての完成された特性を備え、あらゆる不足から清められているお方、アッラーの美名について熟考を行います。そしてこの段階から、心の細やかな部分に豊かさが流れてくると考えられます。

ムラーカバが行われる章句の意味は、類推やその側面によることなく、想像が行われます。ただアッラーがこれらの特性を備えていることについて考えられます。この想像が弱まると、章句が再び読まれます。そして再び、熟考を行います。それを続けることで、信者のイフサーンの感情が増し、アッラーについての智から、何かを得るようになっていくのです。

純正章では私たちに、本質として次のことを思い起こさせます。アッラーは唯一であり、比類される者は存在しない、ということです。唯一である、ということはアッラーに特有なのです。

この世界ではアッラーの主性の顕現はありません。アッラーには「ムハーラファトゥンリル・ハワーディス」という特性があり、後で創造された何ものにも似ておられないのです。この全宇宙に、考え付く限りの何があろうと、

アッラーはそれよりも崇高であられます。アッラーは完全なるお方です。つまり、私たちが知っているよりもずっと崇高であられ、人間がその理性で把握することができないほど、完成されたお方です。類似するもの、もしくは相反する者が存在しない為、その主性を理解することは不可能なのです。

アッラーは「**サマド**」であられます。何も、必要とはされておらず、皆、そしてあらゆるものはそのお方を必要としています。万物における全ての力は、アッラーに属するものです。人間は、アッラーの御力や崇高さを熟考して、自らの無力さを理解し、全身全霊でアッラーに服従すべきです。エゴから離れ、無力さを認識し、常に「ああ、主よ！」と言うべきです。アッラーの美しい特性を堅持するものとなるよう努力すべきなのです。

アハディーヤ、つまり唯一性は、分けられること、数で分けたり、部分に分けたりすること、そして共同である存在を認めません。従って崇高なるアッラーは生むことも生まれることもなく、何もそのお方とは釣り合わないのです。つまりアッラーは、キリスト教徒が主張するように父、母、もしくは息子では決してないのです。なぜなら、タウヒードの信条は、共同作業を認めないからです。生む者は分裂し、分裂する者は無となります、そしてそれが生んだ

者も、結局は同じ状態に陥ります。生むことは特に、永遠に存在することができないはかない者の行為であり、世代の継続の為のニーズなのです。このようなニーズは、全ての完全性がそこにまとめられたアハド、サマド、そしてワージブル・ウジュード、つまりその存在が必須であるお方アッラーに関して、一つの不足、欠点となっていたでしょう。しかしアッラーは、あらゆる不足や欠点から遠ざかったお方なのです。

つまり、熟考や考察の中心である心は、アッラーの御力の作品やアッラーの崇高さの顕示を、その奥底から感じ、常に感謝している状態であるべきなのです。

2. 共にあることのムラーカバ

この段階では、「あなたがたが何処にいようとも、かれはあなたがたと共にあられる」（鉄章、第57章、第4節）の意味の深みにおいて熟考が行われます。しもべは、誰と共にあるべきかを認識します。この状態は、心においてある意識となります。

人間はどのような形であれ、アッラーの知識の統治の外に出ることはできません。地の底、天の深み、どこにいたとしても、アッラーの知識の外に出ることは不可能です。心臓が撃

つこと、呼吸すること、見ること、聞くこと、その他の器官が規律正しく働くことは、アッラーが常にしもべたちと共にいることを証明しています。実際、寿命が来た時にはアッラーはこれらの可能性を取り上げられ、その人は死亡するのです。

アッラーは次のように語られています。

「あなたは、天地にある凡てのものをアッラーが知っておられることを知らないのか。3人で秘密の相談をしてもかれは4人目に常におり、5人の時もかれらの6人目に常におられる。それより少なくてもまた多くても、かれらが何処にいようとも、かれはかれらと共におられるそれで審判の日には、かれはかれらの行ったことを、かれらに告げられる。本当にアッラーは凡てのことを熟知なされる」（抗弁する女章、第58章、第7節）

人に最も近い親友は、アッラーです。その知識、あるいはその御力により、直接もしくは天使たちを活用され、あらゆる点において人間に、最も近い親戚よりも近くおられます。親戚はただその人の外見の状態を知ることができます。あらゆる点で彼にとって役に立つ存在ではいられないように、多くの苦痛も取り除くことはできません。アッラーはあらゆる状態をご存じであり、望まれることを行われます。特に、死の瞬間には。そう、その時には人にとってア

ッラー以上に近い存在はありません。クルアーンでは次のように語られています。

「それならあなたがたは、(臨終の人の魂が)喉もとを塞ぐ時、(座って只)見守るばかりなのか。われはあなたがたよりもかれに近いのである。だがあなたがたには見えはしない。」(出来事章、第56章、第83－85節)

アッラーは、あらゆる瞬間にご自身がそばにおられることを忘れ、その意識を持つことができないしもべに、次のように警告をされています。

「かれらは人に(その罪を)隠せるが、アッラーに隠しだてすることは出来ない。夜中にかれの御喜びになられないことを、策謀する時でも、かれはかれらと共においでになられる。誠にアッラーは、かれらの行う一切のことを御存知であられる」(婦人章、第4章、第108節)

アッラーが常に自分と共におられること、行うことを見ておられることを認識しているしもべは、罪から遠ざかり、行動にも注意を払います。

3. 近さのムラーカバ

この段階では、「われは(人間の)頚動脈よりも人間に近いのである」(カーフ章第16節)という章句について熟考を行います。アッラーは私

たちに、私たちよりもなお近いのです。私たちの考え、意志、感情をご存じです。

語られた言葉をそのまま記録する任務を負った天使たちすら気づかない、秘められた形で人の心に生じた考えや判断の全てを、アッラーはご存じです。なぜなら全てのものと同様、考えを創造されるのもアッラーであるからです。[59] 創造主が知らないと言うことがあり得るでしょうか。

この真実をそれにふさわしい形で熟考する人々が震えないこと、自らを点検しないことはあり得ないでしょう。もし人が、この章句の意味だけでも頭や心で生かすことができれば、アッラーが望まれないたった一つの言葉を話すことすら、さらにはアッラーが認められないたった一つの考えを抱くことすら、実行する勇気は

59 アッラーは良いこと、悪いこと双方の発生において、「創造するお方」という特性で顕されます。つまりしもべが災いとなることを行うことを望んだ時、アッラーが望めば、「創造されるお方」という特性を示され、その欲求の実現を許されます。また望まれれば、しもべに慈悲をかけられ、その実現を許されません。この状態は、良い行いにおいても同様です。つまりしもべが良いことを行うことを望んだ時、アッラーが望まれれば「創造されるお方」という特性を示され、そのことの実現を恵まれます。望まれれば、その実現を許されません。この状況でしもべは、良い意志の為に同じだけの報償を得ます。つまり、良いことも悪いことも創造されるのはアッラーであり、しかしそのご満悦は常に良いことにあるのです。

持てないでしょう。人があらゆる瞬間に篤信に基づいてい生きること、常に審判を受けると言う不安によって覚醒している為には、このたった一つの章句で十分なのです。

戦利品章ではアッラーが人と心の間に入られること、[60]望まれればその人の願いや考えを方向づけられることが伝えられています。アッラーは人に、その心臓よりも近く、また心臓にもその持ち主よりも近く、またそれを支配されておられます。その力は、人と他人の間に限らず、人とその心臓の間に入られるほどのものなのです。人を一瞬にして、その心にある野望から遠ざけられます。忍耐力や意志を破壊され、反対方向に向けられます。考えや喜びを変化させられます。この為アッラーが人と心臓の間に覆いをひかれ、死へと招かれた時には、アッラーに従わないこと、命令に逆らうことは不可能なのです。従って人は、一つの呼吸の後に自分に何が起こるかすら知ることができないのです。

アブー・ムーサー・アル - アシャーリーは次のように語っています。

「私たちはある旅でアッラーの使徒と共にいた。丘に登ると私たちは、『アッラーは偉大なり、アッラーの他に神はなし』と大声でタ

60 参照：戦利品章、第8章、第24節

クビールを行った。それに対しアッラーの使徒は、

『ムスリムたちよ！自らを困難に陥れないでください。なぜならあなた方は、耳が聞こえない者、ここにいない誰かに声をかけているのではない。アッラーは常にあなた方と共におられ、聞いておられ、あなた方にあなた方よりもなお近いのだ』と言われました。（ブハーリー、ジハード、131、ムスリム、ズィクル、44）

これに類似する多くの章句はハディースから理解されることは、アッラーはしもべに近しくおられると同様に、しもべがご自身に近づくことをも望んでおられます。この為に「一途にサジダして（主に）近付け」[61]（凝血章、第96章、第19節）と命じておられるのです。

近さという段階において、心の中に浮かんだことすらアッラーによって知られていることを認識した人は、ただ誤ったことだけでなく、悪い感情、考えからも遠ざかろうとします。その意志を正しい方向性で保とうと努力します。

この熟考の結果人には、アッラーに対し深い親しみ、愛情が生まれます。

61　参照：凝血章、第96章，第19節

4. 愛情のムラーカバ

このムラーカバでは、「やがてアッラーは、民を愛でられ、かれらも主を敬愛する」（食卓章、第5章、第54節）という章句の熟考が行われます。この熟考の結果、人の心にあるアッラーへの愛が強まります。もはやしもべは、アッラーの全ての被造物を、その創造主ゆえに愛情を込めて見るようになります。門のところにいる猫、犬、さらには緑の枝すら、愛情を込めて見るようになります。咲いた花を見ると「主よ、何と素晴らしく与えられているのでしょう。この花をもあなたが与えられたのです」と言います。常に賛美と感謝を行っている状態です。誰も傷つけることはありません。自らを傷つける人がいても、皆を許します。なぜなら私たちも、アッラーに対して罪を犯しているからです。自分たちになされた罪を許さないのであれば、諸世界の主に対する私たちの罪について、どうやって許しを乞うことができるでしょうか。

許しながら、アッラーの許しにふさわしい状態になっていくことは、完成された信者にとって不可欠の信仰の次元なのです。

真の勝利とは、人が自らを苦しめる相手を、心の中にわずかな怒りすら感じることなく許すことができることです。

また一方で、アッラーゆえに許すことはアッラーへの愛情の最大の顕現の一つです。この主の顕現を示すことができなければ、アッラーへの愛情、という主張もただの言葉上のものとなります。

ムラーカバの際には、全ての信者は自らの認識、能力、そして誠実さに応じて、クルアーンの章句について熟考し、そこから恵みを得ます。次第に、全てのクルアーンを熟考と共に読める段階に至れるよう、努力するのです。

これらのムラーカバの結果、しもべは内面世界をアッラーに向け、その心をアッラー以外のものの為に忙しくすることもなくなります。アッラーの命令を何よりも優先します。その舌をアッラーへのズィクルで忙しくします。

誠実なしもべは、おもちゃに夢中になっている子供に似ています。子供は寝る時にもおもちゃへの愛情のうちに寝ます。起きる時にはそれを探しながら置きます。人が死ぬこと、そして墓から起き上がって集合の場に行くことも、ちょうどこのようになるのです。人は、何を心配しながら夜眠っているのか、注意すべきです。もし、信者の暮らしにおける全ての考えがアッラーであれば、死も、復活もアッラーと共に、そのご満悦と共にあるでしょう。

ハディースでは次のように語られています。

「人々は審判の日、死んだ時の状態で復活させられる」（ムスリム、天国、83）

「あなた方がどのように生きたのであれ、そのように死ぬ。どのように死ぬのであれ、そのように復活する」（ムナーウィー、ファイズル・カディルV，663）

人の全ての努力と希望がアッラーから離れたものであれば、死も復活もその道で起こります。審判の日、自らに援助者を見つけることができません。

ムラーカバの状態を完全に得る為に、ズィクルと熟考で慣らしを行うことが必要です。実際、預言者ムハンマドも、

اِحْفَظِ اللّٰهَ تَجِدْهُ تِجَاهَكَ

「アッラーに注意を払いなさい、そのお方を自分の目の前に見出すだろう」と言われています。

ムラーカバ、熟考、ズィクルを完全な意味で生かすことができるように、その作法や条件を尊重することが必要です。空腹、怒り、眠気など苦痛のある状態によって心がそれに煩わされている時間ではなく、逆に安らいだ瞬間を選ぶことは、この作法の一つです。

熟考の作法

　全ての被造物は、人の認識や意識に力の手で向けられている、神の顕示の鏡です。この鏡における神秘や英知を眺めることは、心の鏡の透明さによって可能となります。

熟考の作法

アッラーの友である人々の熟考

聖アブー・バクルはある日、審判の日、はかり、天国、地獄、天使たちが並んでいる様子、天と地が折りたたまれ裂け、星たちが光を失い落ちること、山々が放り出されることを思い起こし、これらについて深い熟考を行っていました。それから、アッラーへの畏怖と共に、

「これらの植物のような植物であること、動物がやってきて私を食べて無にしてくれることをどれほど望むだろう」と言いました。それに対して預言者ムハンマドに、

「だが主の（審判の座の）前に立つことを畏れてきた者のためには、2つの楽園があろう」（慈悲あまねく御方章、第55章、第46節）という章句がくだされました。（Süyûtî, *Lübâbu'n-Nukûl,* II, 146; Alûsî, XXVII, 117）

またアブー・バクルは良く晴れた澄み渡った天気の日に、外に出ました。天を見て、アッラ

ーがしもべの為に多くの美と共に創造された自然を眺めていました。その時、木の枝にとまって美しい声でさえずる鳥を見ました。急に悲しくなり、元気がなくなりました。鳥を羨望のまなざしで見つけ、こう呼びかけました。

「あなたは何と幸せなことか、鳥よ！誓って言うが、私もあなたのようになりたかった。木にとまって、果実を食べて、それから飛び去って行く。審判を受けることもないし、罰を受けることもない。誓って言うが、アッラーの御前で審判を受ける人間であるよりは、道端の木になることを、ラクダが来て私を口に入れ、つぶすことを、食べて飲み込むことをどれほど望んでいることか」（イブニ・アビー・シャイバ、ムサンナフ，VIII，144）

聖アリーは次のように語っています。

「イスラーム法に基づかず、細やかな概念から遠いところで行われるイバーダ、深い篤信を伴わない法によって熟考されずに行われるクルアーンの読誦には価値はない」（アブー・ヌアイム、ヒルヤ、1.77）

次の表現も、聖アリーの英知に満ちた言葉です。

1）集中して行われていない礼拝

2）空疎な言葉や行為から遠ざかっていない断食

3）熟考なしでのクルアーンの読誦

4）深い篤信のない知識

5）気前の良さを伴わない財産

6）擁護のされない兄弟愛

7）永遠ではない恵み

8）イフラースを伴わないドゥアーには、価値はない」

また聖アリーは、全てを教訓のまなざしで見て、長い間熟考を行っていました。アッラーの畏怖により、孤児のように泣き、病気の人のように震えていました。イバーダをとても愛し、我欲の鍛錬の為の禁欲を続けました。少ない量のものを食べること、多くの善行を行うことを好みました。イスラームを何よりも尊いものとしていました。彼は次のように語っています。

「善の全ては次の四つのものにある。話すこと、黙ること、まなざし、そして行為である。アッラーのズィクルの範疇にない会話は全て空疎である。熟考から遠い沈黙は、過ちである。教訓を伴わないまなざしは不注意である。アッラーへのしもべとしての奉仕に導かない行動は愚かなものである。その話し方がズィクルや善であり、沈黙が熟考であり、まなざしが教訓であり、行動がしもべとしての服従である人に、ア

ッラーが慈悲をかけられますように人々はこのような人々の手や舌により、救われる」[62]

サハーバのイブニ・マスードはクルアーンと共にある人について次のように語っています。

「人々が互いに話し合っている時に、クルアーンを暗唱したハーフィズはその沈黙によって認識されるべきである。クルアーンを暗唱した者の涙は特別な美しさを持つ。ハーフィズである人が真剣であること、熟考や沈黙の中にあり、崇高な人格や性格を示すことが必要である」（アブー・ヌアイム、ヒルヤ、1, 130）

ウンム・ダルダには、

「アブドゥ・ダルダ師が最も大切にしているイバーダは何であったか」と質問された時、次のように答えています。

「熟考し、その結果教訓を得ることでした」（Vekî' bin Cerrâh, Zühd, 474）

サハーバを目にした世代の有力者であるアーミル・ビン・アブディカイスは次のように語っています。

「預言者ムハンマドの友のうち、一人ではなく、二人三人でもなく、多くの人から聞いたが、彼らはこう言っていた。

62 Ebû Nasr Serrâc Tûsî, *el-Lüma'/İslâm Tasavvufu*, トルコ語訳：H. Kamil Yılmaz, İstanbul 1996, p. 137-140.

『信仰が輝くこと、もしくは信仰の光が強まることは、熟考によって可能となる』」（İbn-i Kesîr, I, 448, Süyûtî, ed-Dürrü'l-Mensûr, II, 409 ［イムラーン家章、第3章、第190節］）

レビー・ビン・ハイサム師に

「あなた以上に尊い人を私たちに教えてください」と質問された時、彼は次のように応えています。

「そう、誰であれ、その話すことがズィクルであり、沈黙が熟考であり、まなざしが教訓であるなら、その人は私よりもなお尊い」（İbn-i Hanbel, Zühd, s. 334; Ebû Nuaym, Hilye, II, 106）

アブー・スライマン・ダーラーニーは次のように語っています。

「目を鳴くことに、心を熟考に慣れさせなさい」

「この世界に従うことは、人と来世の間の覆いであると同様、聖人である人にとってもつらい損失である。来世について館あげることは、人において英知の光が生じる要因となり、その心が再生される」（イマーム・ガザーリー、イフヤー、VI, 45）

ユスフ・ヘメダーニ師は次のように語っています。

「人に信仰上の熟考が生じれば、誠実な行為もその後からついてくる。この二つ、つまり行為と熟考を一つにまとめることが何によって可能となるのであれ、そのようにしてこれらを一体化させることが必要である」[63]

フダイ・ビン・イヤーズは次のように語っています。

「熟考は神の崇高さと統治の鏡という位階にある。あなたに善と災いを明らかに示す」（イマーム・ガッザーリ、イフヤー、VI，44）

ムハンマド・ビン・アブドゥラーは次のように語っています。

「熟考には5種類ある。

アッラーの章句についての熟考であり、そこからアッラーへの智が生じる。

アッラーの恵みについての熟考であり、そこからアッラーへの愛情が生じる。

アッラーの約束とサワーブについての熟考であり、そこから希望が生じる。

アッラーの威嚇と懲罰についての熟考であり、そこから畏怖が生じる。

63 Yusuf Hemedânî, *Rutbetü'l-Hayât*, trc. Necdet Tosun, İstanbul, 2002, p. 60.

アッラーの恵みに対する我欲の暴挙についての熟考であり、そこから恥じらいと後悔が生じる」

英知を持つ人も、次のように語っています。

「全ての尊いこと、良いことを一か所に集めるものは、長い時間熟考を行うことである。沈黙は救いであり、誤った信条への逸脱は悲しみと苦い後悔である。誰であれ、来世について不注意であり、自我の欲望に従っていれば、最後の審判の日に自らに『残念なことだ！』ということになるだろう、そして無となって消えることを強く望むだろう」（Beyhakî, Şuab, VII, 417/10812; IV, 272/5070）

熟考の小川は、豊かな土壌を流れるべきである

アッラーは全てのしもべに熟考する力を与えられました。全ての人の心には、音をたてて流れる熟考の小川が存在します。この小川は決して止まることなく、常に流れています。方向づけがなされず放っておかれると、どこに流れて行ってしまうかわからないのです。正しい場所、誤った場所、あらゆる場所を通ってしまいます。時には乾いた砂漠で亡くなってしまいます。言い換えれば、洪水に巻き込まれた切り株

のように未知の結末に向かって流されていきます。

真の成熟とは、熟考の小川を豊かな土地の方向づけ、豊かな作物を実らせることです。

アッラーは熟考や考察の恵みを、アッラーのご満悦の方向で使わないしもべたちを次のように警告されています。

「本当にアッラーの御許で最悪の罪人とは、（事理を）理解しない聞かない物言わない者である」（戦利品章、第8章、第22節）

「われは地獄のために、ジンと人間の多くを創った。かれらは心を持つがそれで悟らず、目はあるがそれで見ず、また耳はあるがそれで聞かない。かれらは家畜のようである。いやそれよりも迷っている。かれらは（警告を）軽視する者である」（高壁章、第7章、第179節）

心は、鏡のようです。不注意や教えへの否定により、それは暗く、汚れます。それを輝かせるものは、まずアッラーを受け入れ、それからアッラーへの愛情へと向かうことです。人は、最も簡単なものから「なぜこの世界に来たのか。誰の領土で暮らしているのか。糧を与えられるのは誰なのか。この旅はどこに向かうのか」といった問いの答えを考えるべきです。この真実から遠ざかり、我欲に従った生き方にふけり、その心をアッラーを知ること、存在の根

拠を考えることで忙しくしない人は、ひどい結末への旅人となったということなのです。

この種の人は、真実を明白な言葉で示すアッラーの恵みを、見て見ぬふりをして、それについて考えることもありません。従って、不注意さや逸脱の象徴である「動物」に例えられるのです。なぜならその欲求はただ食べること、飲むこと、我欲の欲求に従うことであるからです。

アッラーは次のように語られています。

「あなたは自分の思惑を、神として（思い込む）者を見たのか。あなたはかれらの守護者になるつもりなのか。それともかれらの多くは耳を傾け、または悟るとでも思っているのか。かれらは家畜のようなものに過ぎない。いや、それよりも道から迷っている」（識別章、第25章、第43－44節）

アッラーの友である人は、次のように語っています。

「この世界は、理性を持つ者（考え、教訓を得る理性を備えた者）にとて、アッラーの芸術に教訓と共に触れる場であり、愚かな者にとっては食事と性欲でできている」

また一方で熟考は、－先にも述べたように－もろ刃の剣のようです。善の為に奉仕する一方で、災いの為に奉仕することもあります。我欲の低俗な命令にも従うし、霊的な、崇高な

者たちの命令にも従います。アッラーは熟考の能力を悪い道で用いるしもべたちを次のように威嚇されています。

「アッラーの許しがなければ、誰も信仰に入ることは出来ないのである。また悟らない者には、かれは退廃を起こさせる」（ユーヌス章、第10章、第100節）

人にうつる最も大きな汚れは、教えの否定という病です。精神や心をアッラーの、万物に関する言葉であるクルアーンの章句で忙しくしない者、それらについて考えない、知性を働かせない者は、この汚れから救われないのです。

信仰の光によって育まれ、啓示の導きにおいて用いられる知性は、タウヒードやアッラーを知る為の道を見出しますが、そこから遠ざかっている知性は真実や善に到達することができません。啓示を基準とせず、ただ理性によって真実を見出すことができると考える哲学者が最も騙されている点もこれなのです。なぜなら彼らは、信仰から遠い知性によっても真実や善に到達できると考えているからです。

また一方で、熟考と言う恵みを正しく用いる為に、理性と心を何の意味もないもので忙しくしないことも必要です。事実、クルアーンでは次のように語られています。

「虚しい（凡ての）ことを避け」（信者たち章、第23章、第3節）

「嘘の証言をしない者、また無駄話をしている側を通る時も自重して通り過ぎる者」（識別章、第25章、第72節）

ハディースでは、

「不要なことを放棄することは、人が良いムスリムである故である」（ティルミズィー、ズフド、11、イブニ・マジャ、フィテン、12）

我欲の病の最も効果的な薬は、人が熟考を価値のあるものについて行い、自らに関係のないことにかかわることから遠ざかることです。何の意味もないことについての熟考は、全ての災い、破滅、低俗さの扉となります。価値もないものについて考える者は、役に立つものを逃し、自分たちに必要となるものを得ることができなくなります。

イブヌルージャズウィは次のように語っています。

「心が、ムバフ（それを行うことがハラームでも善行でもないこと）について考え続けることは、そこに圧力をもたらします。ハラームであることを考えて計画することがどのような結果をもたらすか、もはやあなた自身で考えてみなさい。じゃ香ですら、水の特性を変え、それによってウドゥーをすることを妨げるのであ

れば、犬がなめた水の状態を考えてみなさい。そう、だからこそ、ある偉大な人は次のように語っているのです。「ムバフを行うことを習慣とした人は、出会いの喜びを得ることができない」（Bursevî, Rûhu'l-Beyân, ［信者たち章、第23章、第51節］）

人は、熟考、考察、想像、イメージの力を良い方向に向けなければ、シャイターンは彼の考えを災いへと方向づけます。従ってその人は、アッラーの慈悲による熟考の恵みを得ることができません。アッラーが恵みとして与えられた知性と心の能力を活用する代わりに、そこから害を受けるのです。

だから信者は、クルアーンやスンナが示す方向性において、知性、思想を常に正しく価値があるものの為に用いるべきなのです。

熟考とズィクルは共にあるべきである

ユスフ・ヘメダーニは次のように語っています。

「心とズィクルは、木と水のようである。心と熟考も、木と果実のようである。木に水を与えずに芽吹くのを待つこと、葉や花をつけるのを待たずに果実を期待することは誤りとなります。望んだとしても、果実をつけることはできないのです。なぜならそれは果実の時では

なく木が育ち、形成されていく時であるからです。それに水を与えること、雑草や余計なものを取り除くこと、それから太陽の熱を待つことが必要です。これらが実現すれば、木は生き生きと活気づき、緑の葉で飾られるのです。木はこの特徴に包まれた後、その枝から果実を求めることが、正しいのです。もはや果実の時であるからです。（Rutbetü'l-Hayât, p. 71）

ハサン・バスリー師は次のように語っています。

「知性を備えた人は自らを、ズィクルを伴う熟考、そして熟考を伴うズィクルに慣れさせ続けます。結果として、その心に語らせます。その後はもはや、彼らの心は常に英知によって話し始めます」（イマーム・ガザーリー、イフヤー、VI, 46）

つまり、ズィクルと熟考は互いに分けるべきではないのです。ズィクルにおいて最も重要な点は、それを意識や、意味の熟考と共に行うことです。偉大な聖人の一人ムハンマド・パルサー師の表現によるなら、タウヒードのズィクルで「ラー・イラーハ」（他の神はなし）という時、全ての被造物がはかないものであることを考え、全てが無であるとみなし、アッラー以外の全てを意識から遠ざけ、その考えを清めることが必要なのです。心は、アッラー以外の何の

しもべにもならないという意識、認識によって満たされるべきなのです。

「イッラッラー」（ただ、アッラーが存在する）という時には、アッラーの不滅のそんざいがえいえんであること、愛を持って向かうべき唯一の存在であることを考えるべきです。この形で、アッラーの美しい特性が、その心に顕れるのです。

バハウッディン・ナクシュベンドは次のように語っています。

「ズィクルを行う意図は、ただ『アッラー』と、『ラー　イラーハ　イッラッラー』ということではない。おそらくその要因から、真の要因（アッラー）に向かうこと、恵みがその真の要因からもたらされていることを見ることである」

つまり、ズィクルの真実は、不注意さの場から、目撃という次元に上昇することなのです。

メヴラーナは次のように語っています。

「唯一であり、並ぶ者、比類する者がないアッラーは、«اُذْكُرُوا اللّٰهَ»:『アッラーをズィクルしなさい』と私たちに許可を与えられた。私たちを火の中で見出され、光を与えられた。感じない、熟考しない、ただ口と舌で行われたズィクルは、不十分な空想である、立派に、つまり心

から、驚嘆しつつ行われるズィクルは、言葉や単語から清められたものである。（メスネヴィc. 2, beyit：1709, 1712）

アッラーの美名と特性を熟考によってズィクルする人においては、次第にアッラーへの愛情が強まります。なぜならアッラーをズィクルすることは、「アッラー」という言葉をただ言葉として繰り返すことではなく、その愛情を、認識の場である心に定着させることなのです。

ズィクルと熟考のおかげで、人々はまずアッラーへの愛情に到達し、そしてその愛情のおかげでマーリフェトゥッラー、すなわちアッラーの美名と特性をよりよく知り始めます。その結果、アッラーも彼を愛され、友とされます。ある聖ハディースでアッラーは

「しもべたちのうち私の友である者、そして創造した者のうち私が愛する者は、私をズィクルするものであり、そのズィクルに対して私も彼らのことを思う」と仰せられているのです。（アフマド、III, 430）

ズィクルは舌、体、そして心の三つの場所において行われます。舌のズィクルはアッラーの美名と特性と共にアッラーを賛美すること、感謝すること、讃えること、その書物を読むこと、そしてアッラーにドゥアーすることです。体のズィクルは、それぞれの器官が何を命じられているのであれ、それを行い、禁じられてい

るものを避けることです。心のズィクルについて、エルマルル・ハムディ師は次のように説いています。

「心によるズィクルは、アッラーを心から念じることであり、主に3つに分けられる。

1．アッラーの主性や特性を根拠づける証拠について考えること、そのお方の所有されるものについて、心にもたらされる疑念に応えを見つけることである。

2．アッラーの、私たちに対する権利と、しもべとしての私たちの義務を熟考することである。つまり、アッラーの命令や禁止事項、それらの根拠や英知を考えることである。（なぜなら人は、その提案の本質や神の命令に従うことの結果を知ると、誠実な行いをより尊重するからである）

3．内面世界や外部の被造物、そこにある創造の神秘を熟考し、全ての微粒子が万物の鏡であることを認識することである。この鏡をあるべき形で見る者の目には、その美しく荘厳な世界の光が反映される。その認識の中で得られる喜びのほんの一つの閃きすら、この世界ほどの価値がある。

ズィクルのこの段階に、終わりはない。この点で、人は我を、そして世界を忘れている。全ての意識は、アッラーの中に失われる。さら

に、ズィクルやそれを行う人の名も、しるしも何も残らない。ただ、ズィクルがなされているアッラーのみがそこに感じられる。この位階について語る者は多いが、そこに到達した者は、もはや語ったりはしない」

つまり、全ての被造物は、人の意識や認識に力の手によって向けられた、神の顕示の鏡です。この鏡における神秘や英知を見ることができるかどうかは、心の鏡の透明さにかかっているのです。

ズィクルと熟考の為の最も恵み豊かな時は明け方である

愛する者は、愛する対象を何度もズィクルします。何かについて多くズィクルした者は、しばらくすればそれをさらに愛するようになります。愛情の大きさは、その愛情の為になされた献身に比例するのです。そう、明け方に甘美な眠りを放棄し、アッラーに庇護を求めることも、真の愛情の最善の顕現の一つです。

考えるべきことは、明け方には神の慈悲と慈悲がまさにあふれんばかりとなるのです。この神聖な恵みからのインスピレーションでナイチンゲールは最も美しいメロディーでさえずり、色とりどりのバラは最も美しい香りをその時刻に気前よく与えてくれます。人がこの神聖

な慈悲の食卓から何も得られないのは、いかに悲しいことでしょう。

1日のうちで最も尊い時刻は、夜の3分の2の時間の後に続く、明け方の時間です。この明け方の時間は、神経を煩わせるものから遠く、心が清められ、純粋となり、静けさが周囲を包み、はかない結びつきが弱まる時間です。この時間は、神の慈悲が下され、諸世界の主がしもべたちに最も近くおられる時間です。忙しくする物事から遠ざかり、心が完全にアッラーに向けられることで、明け方の時間は考える者たちにとって教訓を得るのに最も適した時間です。熟考の為にも最もふさわしい時間なのです。

アッラーは次のように語られています。

「衣を頭から纏う者（ムハンマド）よ、夜間に（礼拝に）立て、少時を除いて。夜間の半分、またそれよりも少し縮めて（礼拝に立て）、あるいは、それよりも少し多く礼拝に（立て）、そしてゆっくりと慎重な調子で、クルアーンを読め。やがてわれは、荘重な御言葉（クルアーン）をあなたに下すであろう。本当に夜間（礼拝）に起きることは、最も力強い歩みであり、御言葉を一層明確にする。本当にあなたは、昼間は要務で長く追われる」（衣を纏う者章、第73章、第1－7節）

明け方の静けさに比べ、日中は注意が散り、音や騒音が増す時間です。夜の効果的な時間を活用できない人は、日中のせわしなさの中

でアッラーに向かい、イバーダを行うことの豊かさや精神性に、明け方程は到達することができません。

要するに明け方の時間帯は、イバーダの為に用意された選ばれた時であり、日中は奉仕を行い、糧を得る為に与えられた素晴らしい恵みなのです。つまり信者は、明け方にはただアッラーと、日中には人々と共にいるべきなのです。

預言者ムハンマドは、夜の最も豊かで恵み多い時刻である明け方の時刻に礼拝を行うこと、クルアーンを読むこと、ドゥアーや熟考を行うことを決して放棄されませんでした。病気になり、立ち上がれない程弱られた時ですら、明け方の時間を座って活用されました。[64]

預言者ムハンマドは、熟考の為に特に夜を活用されました。涙の中で、足が腫れるまでクヤームの状態でおられ、何時間もルクウやサジュダをされました。

イマーム・ハサン・ビン・ルシャイクは次のように語っています。

「明け方の時間に眠りから目覚め、精神的な上昇への要因となるような努力を行うことよりもよりよい、熟考の大海の鍵、アッラーの扉

64 参照:. Ebû Dâvûd, Tatavvu', 18.

を開くことができる為の鍵はない。なぜなら人はその時間、外部のつながりや世俗的な不安、欲求から遠ざかっているからである。アッラーと共にある時間に入ったのだ。肉体は休み、回復し、新たに力をつけている。要するに、空気が最もきれいであり、吹く風も最も心地よい時間、夜と日中の間の最も適切な時間が、明け方の時間である。なぜなら明け方には、光が闇の上を覆うからである。夜の状態は、この逆となる。闇が、光の上に落ちるのである」（参照：Ebû Gudde, *Zamanın Kıymeti,* p. 86）

クルアーンでは次のように語られています。

「かれらの体が臥床を離れると、畏れと希望とを抱いて主に祈り、われが授けたものを施しにさし出す」（アッ・サジダ章、第32章、第16節）

信者が明け方の時刻に罪を悔悟し、神の懲罰を考えて感極まること、死を思い起こすこと、人生の残された部分をどのように生かすかと考えること、クルアーンについて熟考することは、アッラーが好まれ、満足される誠実な行いに含まれるものです。

アッラーはこのような形で明け方の時刻を活用し、施しを行なう生活を送るしもべたちに、次のような特別な吉報を与えられています。

「かれらはその行ったことの報奨として、喜ばしいものが自分のためにひそかに(用意)されているのを知らない」（アッ・サジダ章、第32章、第17節）

預言者ムハンマドは、この章を次のように説き明かされています。

「アッラーは、『私は誠実なしもべたちの為に、どの目もみたことのない、どの耳も聞いたことのない、誰も思い描いたこともない恵みを用意した』と言われた」（ブハーリー、ベドゥル・ハルク、8、タフシール、32/1;、タウヒード、35、ムスリム、ジャンナ、2－5）

ここから理解できることは、私たちには知らされていない天国の恵みは、知らされているものよりもずっと多いということです。いくつかの伝承によれば、この恵みについては天使や預言者たちすらも知らないと伝えられています。

結論

熟考は、真実と救いの為の鍵である

真実に到達することは、ただ熟考と考察によって可能です。根拠、つまりアッラーの御力の刺繍や崇高な顕現を聞き、目にするということにおいて目や耳が不自由な人のように振る舞う人は、どうやって真実を見出すことができるでしょうか。この為、「情報が感覚を目覚めさせないのであれば、知識も得られない」と言われているのです。

アッラーは、真実を見いだせない不信心者たちの状況を、クルアーンで次のように描写されています。

「本当にあなたは、死者に聞かせることは出来ない。また聞えぬ者に呼び掛けても聞かせることは出来ない。（ことに）かれらが背を向けて引き取る時は」（蟻章、第27章、第80節）

人が疑念、妄想、欲求と言った災いから守られることを助ける、啓示によって鍛錬された

知識と、預言者ムハンマドの心の層から何かを得ようとする努力をしていれば、真実や善への媒介となるでしょう。アッラーの奇蹟は言うまでもなく、道徳や預言者ムハンマドの生涯についてすら、それにふさわしい形で熟考が行われるなら、必ず、誠実な預言者であられること、招いておられることが完全に正しいことを認識するでしょう。この熟考の結果、－アッラーの御許しにより－自我の欲求や理性の袋小路から救われるのです。

アッラーは地獄に行く者の状態とその後悔について、次のように語られています。

「かれらはその中にあって叫ぶであろう。「主よ、わたしたちを出して下さい。きっと善い行いをします。（これまで）していたようなことは、いたしません。」（かれは仰せられよう。）「われは、あなたがたを十分に長命させたではないか。その間に誰でも訓戒を受け入れる者は、戒めを受け入れたはず。しかも警告者さえあなたがたに遣わされていた。だから（懲罰を）味わえ。悪い行いの者には救助者はないのである。」（創造者章、第35章、第37節）

つまり、人が真実と永遠の安楽に至る為には二つの道があるのです。

1）誠実な信者たちを見つけ、彼らに影響を受け、彼らの恵みや精神性の範疇でアッラーに服従します

2）もしくは、熟考や考察の力をクルアーンや預言者のスンナの方向性において活用し、真実を見出し、我欲をそれに服従させます。真実を見出した人々に従わず、良心を持って考え、知性が示す道を進まなければ、その結果が恐ろしい懲罰となることは確実なのです。

真の熟考とは、ワージブル・ウジュード（その存在が不可欠であるお方、アッラー）の照明である。

以前も述べたように、人にとってアッラーの主性を把握することは不可能です。なぜなら人間の知識の道は、五感、理性、そして心であるからです。これら全ての認識能力は限られたものです。力、能力が限られた媒介を通し、永遠で絶対的、始まりも終わりもないお方の存在を把握することはできません。限られた媒介を通しての認識は、ただ限りのあるものにおいて実現するのです。

従って、アッラーの主性について考えることは、運命の神秘と英知を完全に理解することのように、人間の力を超越したことを行うとすることです。クルアーンとスンナによって拒否されているのです。アッラーの真実を熟考しないことが災いの要因となるように、身の程をわきまえず、自分の能力や力を超越したことに飛

びつこうとすることも、大きな損失をもたらします。

この為預言者ムハンマドは、

「アッラーの創造されたもの、そしてその恵みについて熟考しなさい。しかしアッラーの主性については考えてはいけない。なぜならあなた方は、そのお方の御力を（それにふさわしい形で）決して評価できないからである」と言われています。（参照： Deylemî, II, 56; Heysemî, I, 81; Beyhakî, Şuab, I, 136）

イブニ・アラビー師も、

كُلُّ مَا خَطَرَ بِبَالِكَ وَاللّٰهُ غَيْرُ ذٰلِكَ

「アッラーに関してあなた方の頭にどのような考えが思い浮かんだとしても、崇高なるアッラーはそれとは異なることを知っておきなさい」と言われています。なぜならイスラームが示している真実として、アッラーの特性の一つは、「ムハーラファトゥン－リル－ハワーディス」すなわち、創造された何ものにも似ておられないことであるからです。だから私たちが一人の人間について、例えば「アーリム」（熟知している）「アーディル」（公正である）というアッラーに属するいくつかの特性で表現することは、ただアッラーが被造物のどれにも似ておられない、という特性への信条によって、シ

ルク（アッラーに何ものかを配すること）とはならずにいるのです。

アッラーをその主性の真実によって把握することが不可能である一方で、アッラーの万物や事象におけるその特性の顕現から、その存在、唯一性に理性と心で到達することはできるのです。あらゆる被造物のように、可能性や能力が限られている人間にとって、できることはただこれなのです。これもアッラーの位階において、信者と認められる為には十分です。だから、イスラーム学者たちは「知識の頂点、そして最も徳のあるものは、マーリフェトゥッラー、すなわちアッラーが知られることである」と語ってきたのです。

実際に人はただ、特性からその特性を備える者、作品からその作り手、芸術から芸術家、要因からその要因をもたらすものへと向かう理解力を持っています。人はこの道、つまり一つずつが芸術の奇蹟である被造物や、与えられている恵みを見て、アッラーの崇高さ、御力、慈悲を、自らの能力や力を基準として理解することができます。つまり皆、マーリフェトゥッラーの大海から、その容器の分量だけの水を得ることができるのです。

聖メヴラーナは次のように語っています。

「ある時、私の中に、アッラーの光を人々の中に見出そうと言う願いが生じた。ちょう

ど、海をしずくの中に、太陽を微粒子の中に見出すことを望んでいたのだ」

もし人が、冷静な認識と誠実な熟考、考察によってアッラーの特性、行為、作品を眺めているなら、その人が教えを否定する人であることは決して考えられません。なぜなら否定とは、知性と思想の活動と心の繊細さが損なわれた場所で始まるからです。つまり、思想と心が本来のあり方であり、損なわれていない人が教えへの否定に引きずられることは不可能なのです。もし不信心者の世界に生まれた人であるなら、不信心から救われる可能性が非常に高くなります。その例として、聖イブラーヒームが多神教徒の環境で生まれ育ったにもかかわらず、知性と心の能力によってアッラーの存在と唯一性を見出したことが、クルアーンで詳細に語られています。

従って、絶対的な否定者となることは、正しく考えることのできる人にとって不可能なのです。なぜなら、あるものを「ない」ということによって終わりにはできないからです。説得力のある、正しい根拠や証明が必要となります。生命、万物、死後の謎を説き明かすことができない人が、ただ「ない」ということで何の証拠、証明となるでしょうか。この状態は、空腹であるのに、体の健康が損なわれた為にそれに気づいていない人の状態に似ています。彼ら

が空腹であるのに、空腹ではないということは、ただその病気の照明であり、証拠です。全ての神経系がマヒしてしまった、もしくは麻酔をかけられた人が、体に刺さった釘や、その器官を布のように切るメスに気づきません。このように、崇高な真実に対し魂を病ませ、それに気づいていない人々についてアッラーは。

「見ない者､聞かない者､言葉がない者」という表現を用いています。

なぜならアッラーはそれぞれの人の本質に、信仰し、真実を求めるニーズやその能力をも与えておられるからです。その為、信仰や真実について知らずにいることは、ただ魂が見ず、聞こえない為なのです。信仰しない人々の魂も、アッラーの認識の為の備えはできているか、認識している状態です。しかし、この状態を、精神的に見ない、聞かない状態でいる為に、意識に上がらせることができないのです。ちょうど、見ているのに思い出せない夢のようです。

言い換えるなら、人の魂における信仰への傾向は、天性のものです。そしてこれはまあ子供の頃から、満たされるべき空腹のように私たちの前に姿を示します。例えば、父親が礼拝するのを見ている子供は、礼拝のあり方についての質問をしません。アッラーの偉大さを自ら理解できない為、具体的なものとして表現しよう

とします。アッラーがどれだけであるか尋ね、死んだ人がどこに行くのかに興味を持ちます。天国と地獄がどのような場所であるかを知りたがります。常に学ぼうとしているのです。なぜなら人間の本質において、精神性は秘められているからです。秘められているこの能力が意識の上に上った時、人は信者となります。意識下に閉じ込められている時には、不信心者なのです。丁度、鳥かごに閉じ込められた鳥のようです。長い鳥かご生活の後で、鳥はかごから出されても飛ぶことができません。なぜなら翼が固まってしまっているからです。ちょうどこのように、信仰の感覚は意識の上に上がらなかった時には、人の信仰する力は損なわれるのです。

従って、私たちを無から創造されたアッラーを、私たちの可能性や力に応じて知ることが必要となります。閃きやマーリフェトゥッラーに至り、アッラーに到達する為には、アッラーの特性や御業を正しい形で理解することが必要なのです。

あらゆる行いにおいて英知を備えられたアッラーは、多神教徒の社会に預言者ムハンマドを派遣される時、最初に「比類なき、配する者のないお方の名において、読みなさい…」と命じられていたとすれば、これは前もっての異議をもたらし、シルクにおいて条件づけられたような人々に、信仰によって誉れを与える可能性

は小さくなっていたでしょう。しかしアッラーはその正しい言葉を、彼らが否定しないであろう「創造するお方」という特性によって始められたのです。これを受け入れた後、「創造する」という行為をその持ち主に用い、「創造なされる御方、あなたの主の御名において、読め」（凝血章、第96章、第1節）と命じられたのです。偶像が何も生み出さないことを知っている偶像崇拝者たちは、真の神がアッラーであることを、真の賞賛と感謝にはただアッラーがふさわしいことを自ら理解したのです。

解釈者のベイダヴィーは次のように語っています。

「崇高なるアッラーは、凝血章で、人が最も低い位階から、最も高いところに移されたことを思い起こさせられる。このようにしてまずアッラーを知る為、論理の道において証明となる創造を示す。第2に、聞くと言う手段において証明となる読み書きに注意をひいている。つまり、論理的知識及び語られた知識を一つにしている」

つまりアッラーは、被造物について熟考することを、教えを否定する人々が信仰によって誉れを与えられる為の一つの媒介とされたのです。信者のこの点における熟考は、信仰が強まること、覚醒が増すことの媒介です。

全てが動き、変化している

考えているなら、私たちが見ているこの世界では全てが変化しています。ある状態から、別の状態へと移り変わります。例えば、精子は凝血へ、凝血は噛まれた肉片へ、肉片は肉や脂肪に変わります。このような変化は、星、惑星、鉱物、植物、つまりあらゆるものに見られます。

原子の中には壮大な動きがあります。電子は非常に細かな計算で、想像もできない速度で回っています。核の要素であるプロトンや中性子はより小さな容量に閉じ込められており、その速度は電子に比べて非常に増しています。一秒で訳6万キロを超える速度で回っているのです。この高速はそれらが、「沸き立って泡立つ液体のしずく」という状態で見えることの要因となります。

詩人は、作品から作り手への推移には、微粒子一つであっても十分であることを素晴らしく表現しています。

「あなたの存在を知ることは　何と言う希望か　この世界と共に

あなたが創造された一つの微粒子でその証明には十分である」（シナーシ）

1ミリ平方であるまち針の頭部に、約100兆の原子が存在することを思うなら、万物の動き

がどのような力の作品であるかをよりよく理解できるでしょう。

そう、この全ての動きや変化が生じる為には、真の作り手が必要であり、それが崇高な創造主であられるお方アッラーです

なぜなら、知性を驚嘆させるこの素晴らしい状態が、その作り手なしに生じること、あるいは意識をもたない作り手によって生じることは絶対に不可能であるからです。

全てがある目的の為に創造された

この世界においては全てがある目的や効果の為に創造されていることが明らかです。以前にも述べたように、

－月や太陽の光により、この世界の被造物は照らされ、成長します。地球と月が太陽の周りを回ることで、時刻がもたらされます。地球が回ることによって季節、日、夜が、月が回ることによって月々が生まれます。

－常に吸い、はいている空気は、肺に行く血を清めます。私たちの肉体が何よりもそれを必要としている為、それは非常に容易であり、多く存在するのです。

－風は雲を送り、それを必要とする場所に雨をもたらします。また風は、植物や木々を

植え付け、気温を調節し、空気をきれいにします。

ー同じように海の効果も、数えきれないほどです。

これらすべて、そしてここで数えきれないほどのさらに多くの事々の、人間の暮らしにおける重要性は既知の通りです。従ってこれらを教訓のまなざしで見つめ、熟考する人は、次のような結論に至ります。すなわち、あらゆるものの創造に、大きな英知と目的が存在すると言うことです。これが偶然であると見なすことは、論理の服従、良心の停止を意味します。これらは知識、英知、力、そして崇高さの持ち主であるお方の作品なのです。そしてそれが、**アッラー**なのです。

同じ鉱山から異なる産物が生じている

周囲で目にしている様々な存在の本質は、皆同じです。全て、物質として存在しています。様々な要素は、全て同じ本質の各部分です。例えば、天空の物体も、皆同じ物質からできています。ただそれぞれに、それ自身に固有の性質、特性、量、そして寿命はあります。一部のものは冷たく、一部のものは非常に熱いのです。

窒素、炭素、酸素、水素といった要素から、植物や動物が生じています。しかしこれらの物質と生命の間には、そして知識、意志、力、聞くこと、見ることのような崇高な特性の間には絶対に何の関係もないのです。

そう、これら全ては神の芸術の奇蹟です。この世界で私たちが見ている様々な、そして完成された存在は、尊い力を備えた芸術家の作品なのです。これほどの芸術的奇跡を生じさせている存在が、後になってそれらに似ることは不可能です。それは、その存在が不可欠であり、誰の力も必要とせず、永遠であるお方アッラーなのです。

要するに、考える人がアッラーを見出すこと、アッラーに驚嘆することは決して困難ではないのです。熟考のおかげで、人が無信心者であれば信仰を見出し。信者であれば信仰における位階を高めます。アッラーへの智、愛情の階段を進み始めるのです。

マーリフェトゥッラーの道

イスラーム学者たちは、「人に命じられた最初の義務は、マーリフェトゥッラー、つまりアッラーを知り、アッラーへと導く熟考を行うことである」と語っています。

クルアーンの普遍的で本来の目的は、人々の知性や心をアッラー以外のものに従事することから救い、マーリフェトゥッラーへ導くことです。

　アッラーは人々がご自身を知り、しもべとして従う為に創造されました。人はこの目的に、ズィクルと思想という道で、最もよい形で到達することができます。イバーダは人の生活の真髄です。アッラーにイバーダを行うことの最善の形は、ズィクルです。ズィクルと熟考は互いに切り離すことのできない兄弟のような存在です。

　疑いもなく、人にとって最も重要なことは、永遠の幸福と安らぎに至ることです。他の願望は、これに比較すると重要性のないものとなります。永遠の幸福と安らぎに到達する為に最も重要な媒介が、マーリフェトゥッラーなのです。

　学問的な情報は、ある事象を要因—結果という結びつきで把握します。智（マーリファ）は、これに加え、そこにおける神の意志の顕現を認識することで実現します。この為にこそ、アッラーが知られるということに関する知識が、マーリフェトゥッラーと名付けられたのです。つまりこれは、アッラーの存在を、智というレベルで把握すると言う意味なのです。

この為、信者たち章第84－87節では「考える」ことが篤信よりも先に言及されているのです。なぜなら人は熟考と考察によって智に到達するからです。アッラーを、ふさわしい形で知った後、アッラーに対立することを避け、篤信を持つべきであることを知ります。なぜならマーリフェトゥッラーなしでは、つまりアッラーをふさわしい形で知ることなしでは、どのような行為も価値を意味しないからです。

要するに、最も崇高な学問がマーリフェトゥッラーであることには疑いの余地はないのです。**ジュナイド・バグダディ**は次のように語っています。

「もし天空の下に、智を備えた人たちが追及している学問よりもより崇高な学問があることを知っていれば、私は他に何もせず、常にそれを得る為に努力していたことだろう」

イブニ・カイーム・アル・ジャウズィヤーは次のように語っています。

「アッラーはクルアーンで、しもべたちを二つの道でマーリフェトゥッラーに到達するよう、招いておられる。

1. アッラーがなさったこと、創造されたことを目にし、それらについて考えること

2. クルアーンの言葉について熟考し、考察すること。

一つめは、アッラーの、目に見えるお言葉であり、二つめは耳で聞かれ、知性によって認識されるお言葉である」（İbn-i Kayyim, Fevâid, p. 31-32）

これらについての熟考や考察は、人を真の意味で信仰に到達させ、創造の意図に方向づけるものです。

詩人は何と素晴らしく表現していることでしょう。

「この万物はその全てが、崇高なるアッラーの書物である

どの文字を見ても、その意味は常にアッラーとなる」

すなわち、「この世界は端から端までアッラーの最も偉大な書物である。この偉大な書物のどの文字を読んでも、その意味が常にアッラーであることがわかるだろう。この世界のどの微粒子について熟考しても、あなたをアッラーに到達させるだろう」

熟考が行為に変わるべきである

熟考、ズィクルとムラーカバによって真実に到達する為に、獲得された知識が実行されることが必要です。神の真実やクルアーンの言葉について考える人は、それらを必要な形で実行

しない場合、その熟考は認められるレベルに到達していないと言うことを意味します。なぜなら行為とは、内面的なものである熟考と考察を、表に出すと言う意味であるからです。

この点についてイマーム・ガザーリーは次のように語っています。

「熟考の果実である知識は、その状態を獲得し、誠実な行為に向かう為のものである。心に知識が現われると、心の状態は変化する。心の状態が変化すると、器官の動きも変わる。この意味で行為とは、状態に基づいており、状態は知識へ、知識は熟考に基づいている。従って熟考は、始点であり、全ての善の鍵である。

真の熟考とは、人を醜いものから美しいものへ、欲望からズフド（アッラーのご満悦を得る為に、現世の恵みから手を引くこと）及び満足へ、と導く熟考である。この熟考は人に、見出し、篤信すると言う状態を獲得させる」（イマーム・ガザーリー、イフヤー、VI，47）

行為へと変わった熟考と考察のおかげで人は、この世界における驚異的な物事を、ごく普通であると見なしてしまうという病からも救われます。

実際、普通の人間は、画家が自然を真似て生み出した絵を評価するのに、自然とその創造主を前にすると同じ評価の感情を抱くことはで

きません。全ての驚異的な事柄を、ありきたりのことと見なすのです。

清められた心の持ち主である、アッラーの友である聖人たちは、画家がただ自分の誉れの継続の為に描いた絵の代わりに、真の芸術家とその作品に対し、驚嘆し、興奮を感じます。アッラーの御力が自然界にもたらした無数の奇蹟における神の芸術の喜びに到達します。その資本が同じ土である植物の、様々な色の葉や花、それらにおける模様、木々の色、香り、味や形において無限の違いを示す果実、ただ1・2週間ほどの寿命であるのにもかかわらず、蝶の羽にある素晴らしいデザイン、人の創造における奇蹟性を眺めます。目が見えること、脳が認識することといった無限の神の奇蹟と、これらの「状態による言葉」と呼ばれる秘められた宣言に耳を傾けます。

このような人々にとって、この世界の全ては、読まれる為に用意された書物のようです。これらは文章における学問を超越し、心における学問に到達したのです。ちょうど、かつてセルジューク朝の神学校で、本に埋まった穏やかな教師であったのに、心が愛情に満たされているシャムスという風変わりな修道僧の、正しい道を示すそのまなざしから閃きを得て、愛の炎に燃え始めたメヴラーナのようにメヴラーナはこのような形で愛情の空気の中で新たに生まれ

た後、外面的な学問についての書物はそのまなざしにおいて価値を失い、もはや万物における神秘やその刺繍を読み取り始めたのです。その後で、人間、万物、そしてクルアーンにおける神秘と英知を説き明かす書であるメスネヴィという名作が生まれることがかなったのです。

この世界での生命を、啓示によって鍛錬された冷静な理性と信仰の光で照らされた繊細な心の作品である熟考と考察の空気の中で生き、マーリフェトゥッラーに到達することのできる純粋なしもべたちは何と幸福なことでしょうか。

終わりに

今日、自分たち自身の歴史や文化になじんでいない一部の人々は、欧米発祥の個人発達プログラムや東洋のヨガや瞑想のクラスで安らぎを見出そうとしています。しかし人が求めている真の安らぎは、アッラーの英知や真実の鍵であり、イスラームが勧めているズィクル、熟考、考察によって実現するムラーカバにこそ存在するのです。

心の考察によって成熟した熟考は、魂の安らぎ、心の平穏の源です。なぜならこのような熟考は、人を英知に到達させるからです。英知の最たるものは、アッラーへの畏怖、篤信や恐れの感情です。つまり熟考は、信者をアッラーのご満悦と愛情に至らせるのです。

万物や事象について、ふさわしい形で熟考することができる人は、「この世界は何であるか？私はなぜ創造されたのか？はかない日々の真実、本質は何であるのか？幸福の道とはどれなのか？私は誰の何なのか？どのように生きるべきなのか？私はどこから来て、どこへ行くのか？」と言

った問いの答えを求めます。この考えは、彼をこの世界の一過性の情熱から遠ざけ、正しい道と永遠の幸福に到達させるのです。

私たちもささやかなこの作品で、万物、人間、クルアーンにおける神秘、英知、そしてその真実について、時代の科学的な確証をも活用し、少しでもお伝えしようとそ力しました。将来、さらにどれだけ多くの神秘や英知が現われ、アッラーの御力や崇高さの無限性に光を当てることでしょう。

さらに、私たちがここで言及した項目は、ただこの本のささやかなボリュームに応じた、いくつかの例えのようなものなのです。親愛なる読者諸君が、ーインシャッラーーこれらの例を通して語ろうと努めた熟考の地平線を、自らの心の世界においてあらゆる存在と事象を包括する広大なものと広げられますように。このようにしてマーリフェトゥッラーの大海から、どれだけの神秘と英知の真珠が集められることでしょう。

アッラーが私たち皆に、崇高な熟考の地平線を与えてくださいますように。クルアーン、人間、そして万物の神秘と英知を、教訓のまなざしで読み取り、心から復活することができますように。私たち皆を、ムラーカバの状態で生き、マーリフェトゥッラーに到達する幸運なしもべとしてくださいますように。

アーミーン！

用語集

アハディーヤ：アッラーがあらゆる被造物においてご自身の唯一性を示すことである。何に注意をおいてみても、それはアッラーの作品なのである。そのものは私たちに唯一のアッラーの存在と、それをアッラーが創造されたこと、アッラーが全てのもののそばにおられることを示す。例えば人間、花、地球はそれそれが単一で、それ自身を創造されたアッラーを示す。

アーディル：権利や法から逸れることなく、権利を尊重する人を意味する。

アッラーが全てを一定の形状、特性を与えつつ創造されることを意味する。創造されたものは他害に、その特性を通して分けられる。結果として、創造されたものは何であれ、選ばれ、他のものと区別されている。これは大きな慈悲であり、この点には多くの英知がある。この慈悲と英知を理解する為には、創造されたものを互いに区別することを可能とする違いが、一瞬の為に創造されたのではないことを考えることで十分である。

イバーダ：しもべがアッラーに対し賞賛や感謝と言った務めを、アッラーが命じられた形で行うこと。崇拝行為。

イフサーン：イスラーム神秘主義において、アッラーを見ているかのように生きるしもべとしての在り方とその心の状態。

イフラース：イフラースは言葉としては、精製すること、純粋にすること、区別すること、不純物を取り除くことという意味である。イフラースは、人がイバーダと服従によってアッラーの命令、望み、恵み以外の全てに対し閉じられることである。

イブリース：シャイターンの名称の一つ。聖アーダムが天国から出る要因となり、人を地獄へ落そうとする存在。クルアーンで伝えられているところによると、アッラーが天使たちに「私は土から人間を創造する。彼を創造し、私の魂を吹き込んだら、すぐに彼にサジュダしなさい」と言われた。イブリース以外の天使はすぐにサジュダをした。イブリースはサジュダを行う者と共にあることを避けた。

ウンマ：イスラーム社会の全体を示す概念である。イスラームの信仰の最も重要な源であるクルアーンにおいても、多く用いられている。「これは過ぎ去った民〔ウンマ〕のことである。かれらにはその稼いだことに対し、またあなたがたにもその稼いだことに対し（応報があろう）。かれらの行ったことに就いて、あなたがたが問わ

れることはないのである」（雌牛章、第2章、第134節）

ウドゥー：一定の期間を、手順に従って洗う、もしくは湿らせることで行われる清浄である。ウドゥーはあらゆることの前に各種の汚れ、けがれから救われること、すなわち物質的、精神的なあらゆる汚れ、細菌などから遠ざかる為にイスラームが命じている重要なイバーダである。

カーバ:　、マッカのマスジド・ハラームの中心部にある建造物であり、イスラーム教における最高の聖地とみなされている。

カリフ：預言者ムハンマドの後、その代理人としてムスリムたちの宗教的な先導、法の保護を行う任務を負った人。最初のカリフは、預言者ムハンマドの死後にカリフとなったアブー・バクルである。アブー・バクルの後はウマル、オスマン、アリーがカリフとなった。

カダー：アッラーが前もって命じられ、定められた事象が、その時が来るとアッラーの意志や承認により実際に生じること、形成されることである。

カダル：アッラーが最初から最後まであらゆる事象の時間、特性、場所を前もってご存じであり、それを認められていること。カダルはアッラーの一定の基準に基づいて設けられた神の法則である。

キブラ：イスラーム教徒はどこにいたとしても、礼拝を行う際にそちらを向かなければいけない、サウジアラビ

アのマッカの町にあるカーバがある方向。

ザカート：ザカートとは辞書的な意味では増えること、増やすこと、豊かさ、賞賛という意味になる。イスラーム用語としては、イスラームの5つの条件の一つであり、所有している財産、お金の40分の1を毎年、支援を必要とする人に差し出すことである。

サジュダ：サジュダは辞書的な意味では「従順、服従、謙虚さのうちに身をかがめること、地に伏すこと、顔を地につけること」という意味である。礼拝において、額、鼻、手、足、膝、そして足の指を地につけることであり、礼拝の義務の一つである。

サダカ：アッラーのご満悦の為に貧困者や困窮者に、見返りなく与えられるもの、行われる支援、あらゆる種類の善行。アッラーの道における支出である。

サハーバ：イスラーム用語として、預言者ムハンマドを目にし、彼と話し、友となり、彼を信じた信者を指す言葉。

シャイターン：悪魔。

しもべ：（アブドゥ）辞書的には「どれい」「下僕」という意味になるこの言葉は、イスラーム用語としてはアッラーに従い、イバーダ（崇拝行為）を行う人という意味で用いられる。イスラームは服従、無条件に従うこと、称えることをただ諸世界の主であるアッラーにのみ行われることであるとしており、それがしもべとしての奉仕（イバーダ・崇拝

行為）という意味になること、人の創造の理由もこの形での「しもべとしての奉仕」であることを示している。

ジブラーイール：ジブラーイールはアッラーの命令を天使たち、預言者たちに伝える啓示の天使である。4大天使の一人であり、最も崇高なものである。ジブラーイールはユダヤ教、キリスト教においても偉大な天使として啓典で名が出てくる3人の天使のうちの一人である。

ズィクル：概念としてズィクルは、アッラーを念じつつ口にすること、及び行うことが奨励されている、言葉と行動の実践を伴う行為の総称である。

1．言葉によるズィクル：アッラーをその美名と共に念じ、感謝し、賛美すること。クルアーンを読誦すること、クルアーンを聞くこと、ドゥアーをすること。言葉で行われるズィクルは、心のズィクルにつながるものであるべきである。

2．心によるズィクル：心によるズィクルは、体のズィクル、つまり言葉によるズィクルの基盤を構成するものであるべきである。行動によるズィクルとは、アッラーが行うことを求められているしもべとしての任務、すなわちイバーダ（崇拝行為）である。

ズフド：禁欲主義。あらゆる世俗的なもの、自我の快楽を拒み、自らをイバーダに捧げること。

スンナ：預言者ムハンマドの言葉、行動、認めておられていたこと。

タクビール：アッラーの偉大さ、崇高さを明らかにする為に唱えられる、アラビア語の「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」という言葉。

タワックル：まず自らがやるべき努力を行った後で、アッラーに委ねること。アッラーを信頼すること。

タビーン：預言者ムハンマドの存命中には生まれていなかったものの、預言者ムハンマドの存命中に存命していた世代（サハーバ）に会い、学んでいた世代。

テデッブル：あることの結果や結末について考えること。

テゼックル：何らかの問題を解決する為に考えること。

ドゥアー：言葉の意味としては、呼びかけること、声をかけること、求めること、救いを求めることである。イスラームにおいてドゥアーは、アッラーの崇高さの前に、しもべがその無力さを訴え、愛情と敬意の中で恵みや救いを求めることを示す。

ハティム　：クルアーンを、様式に従って最初から最後まで通して読むこと。

ハディース：宗教用語としてハディースは、預言者ムハンマドの言葉、行動を意味する。クルアーンでは預言者ムハンマドの人格が信者の模範として示されており、その道を行くことはアッラーの愛情と許しを得ることの前提条件とされている。これにより、ムスリム

の中で信仰、道徳、イバーダといった項目でクルアーンに次ぐ第二の源として受け入れられている。

ハラーム：アッラーが確実に「行ってはいけない」と命じられたものである。ハラームはイスラームにおいて行うこと、飲み食いすることが絶対に禁じられたものであり、アッラーがクルアーンで明らかにされている飲酒、賭博、窃盗、利子等の行為である。

ムラーカバ: 神秘主義者は、クルアーンの全てを熟考のうちの読む為に、まず一部の章句について熟考の訓練を行います。その為に、人の心に最も影響を与え、アッラーと共にあると言う感情やアッラーへの愛情を植え付ける章句が選ばれます。この章句において深みを増し、熟考を行うことを「ムラーカバ」と名付けています。

マーリファトゥッラー:アッラーを心で知ること。アッラーを、全ての特性と共に知ること。

フトバ ： 金曜礼拝やイードの礼拝を始めとして、一部のイバーダや式典の際に、集団に対してなされる説話。辞書においては「集団に対してなされる、効果的な話」という意味になるフトバは、宗教的な意味では金曜礼拝、イードの礼拝を始めとして一定のイバーダにおいてなされる説話や忠言を含む話を意味する。これを行う人をハーティブと呼ぶ。

ムスハフ:「集められ、綴じられたページ」という意味である。そこから、クルアーンの全

ての章と節が書かれ、まとめられ、綴じられ、二つの表紙の間にまとめられた状態を指す。クルアーンは預言者ムハンマドの存命中には様々なものに書かれ、まだムスハフの状態にはされていなかった。アブー・バクルが国家の長であった時代にムスハフとされた。最初のムスハフは「アル・イマーム」と呼ばれた。オスマンの時代にはこの最初のムスハフから8部が増刷された、地上に存在する全てのムスハフは、このムスハフと同一である。

ムハーラファトゥン リル・ハワーディス：アッラーが、後発的に存在するものとは似ておられないことである。アッラーはその特性においても属性においても、ご自身が創造されたどのものにも似ておられない。私たちがアッラーのことをどのように考えようと、アッラーは私たちが想像するものとは異なっておられる。なぜなら私たちが想像できるものは全てが後発的に創造されたもの、無である状態から創造されたものであるからである。アッラーはその存在が必須であり、永続的であり、何ものも必要とはされず、あらゆる不足から遠く、全ての完全性を備えられた神聖なお方である。

サマド：何も必要とされず、誰をも必要とされず、その許可なくしてはどの事柄も定められることがない、また必要性がある時にはご自身に求められるお方という意味である。アッラーは産みも、産まれもなさらない。全ての

被造物はそのお方の「在れ」という命令によって無から創造されたのである。

タウヒード：アッラーが唯一であられること、アッラー以外の創造者が存在しないことを信じることである。言い換えれば、アッラーをその特性、属性、みわざにおいて唯一であると認め、同様にその特性、属性、みわざにおいて他の何ものをもアッラーに配さないことである。

ワージブル・ウジュード：不可欠である存在もしくは存在が必須であるお方、アッラーを意味する。神学はアッラーの存在の不可欠性、必要性を明らかにする。信仰の6つの条件の一つは、アッラーの存在が不可欠であること、真に崇拝されるべき存在、そして全ての被造物の創造主であることを信じることである。現世と来世にある全てのものを、物質も時間も用いずに無から創造されたのはただアッラーである、と絶対的に信じることである。

ハーフィズ：暗記した者、頭で覚えている者、そして守る者という意味になるハーフズは、クルアーンを全て暗記し、暗唱できる者を示す。

ムバフ：行うこと、もしくは放棄することにおいて宗教上全く問題がないこと、つまり責任を問われる人間が、それを行うこと、行わないことが完全に自由である行為である。座ること、食べること、飲むこと、眠ることなどである。これらの行いは実行しても報償はないし、放棄しても罪にはならない。

クヤーム: 起き上がること、直立すること、立つことを意味する。礼拝を構成する要素の一つである。

ルクウ: クヤームでクルアーンの章を唱えた後、手がひざに届く形で前傾姿勢を取ることを意味する。礼拝におけるルクウは義務の一つである。

アーリム: アッラーの啓典であるクルアーンを始めとして、預言者ムハンマドのハディースや全てのスンナを知り、その他のイスラームの知識も必要な形で身に着け、高度な知識の蓄積に至っている人を意味する。能力を備えたこの人々は、基本的なイスラームの知識を身に着けた後、一定の学問分野においてさらに勉学を勧め、固有の専門分野を持つようになる。

アーディル: 権利や法から逸れることなく、権利を尊重する人を意味する。

シルク: アッラーに何ものかを配することを意味する。アッラーと並べて他の神を配すること、他のものを神格化することである。